
バベル 1 傲慢の紅き鎧

坂上知季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バベル1 傲慢の紅き鎧

【Nコード】

N6238Q

【作者名】

坂上知季

【あらすじ】

あなた方は「罪」と言ったら、一体何を連想するだろうか――。
二つの宗教が対立し合う世界。そのうちの一つ・大聖教に所属する神父、姫良三善ひめらみよしとケファ・ストルメントは、共に「釈義」なる異能力を保持する僧兵である。ある日、二人はとある学園に神学を教えるという名目で招かれるが、実はその学園では謎の発火事件が起こつていて……！？

Introduction .

本州第二区・青葛市。
あおついで

大聖教管轄のとある教会から、一台の車が卒然と飛び出していった。

車体は巨大にして黒色、極めて厳つい印象を受けるその車は、この教会が建立されているごくごく一般的な住宅街には非常に似つかわしくない。ついでに言えば、法定速度を軽くオーヴァーしているその速度も。真夏の日差しがざらりと車体を照らしつけられ、その不釣り合い甚だしい姿に誰もが顔をしかめることだろう。

—— かったりい。

その車内でハンドルを握る青年は、短い文句を頭に浮かべながらじつと前を見据えていた。言葉にこそしないが、表情の険しさにはムツとした心境がありありと浮かんている。その苛立ちが、車をさらに加速させてゆく。

瞳はアメジストを連想させる澄んだ紫。精悍さが際立つその眼差しは彼の元来端正な顔立ちをより一層引き立たせる。短い金髪は邪魔にならない程度に整えられており、清潔感がある。左耳にさりげなくつけられた銀十字のイヤークラフが、車が揺れるたびにきらりと瞬いた。

これだけでも彼は充分に目を引くが、それ以外にも目立つ要因があった。

襟元から足先までを覆うのは、一般に聖職衣と呼ばれる衣服。彼の場合、通常の単色のものではなく黒と白のツートーン・カラーのものを着用していた。そして肩から下げられた紫の肩帯。それと一緒に下げられている細かく彫金された銀十字は、太陽の光を享受し胸元で淡い光を放っていた。しかし、この銀十字。彫金による模様以外に、無惨としか表現しようのない深い傷が数え切れないほど入っているではないか。まあもつとも、そんなことは彼にとっては些

細なことからしく、全く気にする素振りなど見せていないが。

以上から分かるように、彼は神父、それも紫色の肩帯から察するに若くして司祭という位階を得ているようだ。

そんな彼は華麗にハンドルを切りつつも、頭の中では全く別のことを考えていた。実はそれが車を猛スピードで走らせる原因でもある。

先程から彼の頭を過ぎるのは、つい五分ほど前に宣告された実にひどい指令。あまりにひどすぎて、思い出すたびに腸が煮えくり返りそうになる。

——まあ、あいつが唐突に物事を決めてくるのはいつものことだけれど。

怒りと同時に諦めにも似た心境がこみ上げてきて、彼は堪え切れずに恐ろしく長い溜息をついてしまった。

「ったく、ホセの野郎……何でいきなり本部に呼び寄せるかなあ。

俺が今、第二区勤務だって知っているくせに」

彼が現在滞在する青葛市から西に二時間ほど車を走らせたところに、本州第一区に位置する大聖教本部——通称・バベルが存在する。青年は大聖教の外部宣教師として、先程飛び出してきた教会に派遣されている。いつものように朝の礼拝を終え、三時課（午前の仕事）を始めようとした時、突然勤務先の司祭に呼び止められた。

曰く、緊急の用事だとかで本部から電話がかかってきている、と。この時点で、既に嫌な予感はしていたのだが。

『おはようございます、ブラザー・ケファ。ご機嫌いかがでしょうか』

受話器から聞こえてきた呑気な声に、がっくりと肩を落とすしかなかった。ああ、どうしてこういう嫌な予感は当たるのだろう。

「ご機嫌は最悪だ。あんたの電話は嫌いなんだよ、ホセ」

額に手を当て、ため息混じりに青年——ケファ・ストルメントはぶっきらぼうな言葉を投げつけた。

受話器の向こうで穏やかにくすくすと笑っているのは、ケファの

間接的な上司にあたるホセ・カーランドである。彼は大聖教の総本山・エクレシアの司教で、現在は本部勤務・人事を総括している人物である。そんな彼がわざわざ連絡してくるのは、厄介事を押しつけようとしているときと相場が決まっている。

「今度は何だ？ 国内での異動なら構わないが、いきなり海外転勤は嫌だぞ」

しかし、ケファの率直な物言いに対してホセは何一つ答えることはなかった。ただ、曖昧に笑うのみである。その煮え切らない態度にさすがのケファもいらつき、思わず素の口調で「気味悪いぞ」と口走っていた。

『いえ。それより、今の言葉は本当でしょうか？』

「あ？」

『国内での異動なら構わない……って』

それから彼はようやく本題を切り出した。この時点でケファが予想していたものよりも、はるかに性質の悪い本題を。

『至急本部に戻ってきてください。今は青葛市勤務ですよ？ じゃあ、本部には二時間もあれば着くでしょう。詳細はこちらに着いてから話しますので——あなたという“プロフェット”が必要になりました』

だからあんたが嫌いなんだよ！

叫びたい衝動を必死になって堪えながら、ケファはハンドルを強く握りしめた。そんな訳で、彼は急遽エクレシア本部を目指して車を走らせなくてはならなかったのである。

こればかりは、事情を察してくれた勤務先の司祭に感謝しなくてはなるまい。元々人手不足の教会、やるべき仕事はただでさえ多いというのに。彼は少し残念そうな表情を浮かべながらも、「ブラザー・ホセの言うことなら仕方ない」と快く送り出してくれた。これこそが、かの教祖が説いた『隣人愛』なのかもしれない。

そんなことをぼんやりと考えていると、

「……ん、」

前を見据えていたケファはふとなにかに気がついたらしく、その紫の瞳を大きく見開いた。そして舌打ちしながらも渋々車を減速させ、肩を竦めた。

「今日は厄日か？　どうしてこう……“あいつら”はタイミングが悪いんだ」

悪い、ホセ。遅れることがたつた今確定した。

助手席に置いていた黒い色の鞆から小さなビニール・パック——中には岩塩が入っている——を取り出し、それをいくらか口を含むと、ケファはゆっくりと車を降りた。案の定外は喧騒に包まれている。おそらく、周辺住民には既に避難勧告が言い渡されたことだろう。

がり、と岩塩の粒を噛み砕くと、ケファは微かな声色で祝詞を上げる。

「——“釈義（*exegesis*）展開・装填（*eisegesis*）開始”」

ふわりと微熱を帯びた風が頬を掠めていった。

紫の双眸が見据える方向。コンクリートがありえない形に隆起し、砂礫が視界をどんよりと悪くさせる。ぱらぱらと細かい砂が頬に当たり、細やかな傷を作った。

祝詞を唱えたその瞬間から、彼の身体には異常な熱が巡り始めていた。頭の前からつま先まで、血液が循環するように。

いける。漠然とそう思った。

「“深層（*significance*）発動”」

刹那、頭上から“なにか”が飛びかかってきた。すさまじい速度。“それ”はただ黒い残像を残すばかりだ。轟音と共に、灰色のコンクリートが砕けた。

隆起するコンクリートがその“なにか”の威力を物語る。あれをもろに食らったら、間違いなく己は天の眷属となるところだ。しか

し、“それ”が落下した場所にケファの姿はない。急降下した“なにか”は標的を見失い、あからさまに戸惑った動きを見せていた。ばさり、と羽ばたく音。

その風の流れに反応し、“なにか”は宙を仰ぐ。塩のかけらがまるで花弁のように流れてゆき、地上の砂塵と混ざり合う。そう、空中にケファの姿はあった。彼の背には純白の翼が現れ、その身体をしつかりと支えている。大きく翼をはためかせると、細やかな塩のかけらが羽根からこぼれ落ちていった。

割れたコンクリートの中に佇むは、我らエクレシアにとって最大の敵。大罪に身を投じた愚かな生物だ。ケファは一度目を細め、右手で胸元に十字を描いた。

「どうか、神の御加護を」

俺と、真下にいるあの敵に。

黙祷の後、ケファの身体は急降下した。

十

ケファが本部に着くと、入口に白い聖職衣を身に纏った男が待ちかまえていた。髪は黒く、肌の色もやや褐色がかっている。男のアイボリーの瞳がケファの姿を捉えると、にこにこ笑いながら片手を挙げた。

「ああ、お待ちしておりました。ブラザー・ケファ」

「申し訳ありません、ブラザー・ホセ。思わず妨害が入ったもので、ケファも丁寧語混じりに挨拶を返すと、一瞬の沈黙の後二人は互いに鼻で笑い合う。そもそも彼らの付き合いはエクレシア所属前から続くもので、いい加減気心の知れる相手ではある。よって、妙な敬語はやめようということであっさりと合意してしまった。

「ケファ、災難だったね。相手は？」

そう尋ねられ、ケファはああ、とさも当たり前のような口調で返答した。

「“傲慢”の第三階層が二体。大した能力も使わなかったから、一人で充分だった」

「そうですか、よかった」

二人はこのほかにもいくつか事務的な会話を繰り広げながら、やたら長大な建物へと入って行く。

この縦にも横にも長いエクレシア本部は、非常に入り組んだ構造をしているため、あちこちに案内掲示板が設けられている。初めて施設を訪れた者の大半が道に迷うというこの建物、密かに迷宮扱いされているのもまた事実である。幸い、ホセもケファも方向音痴ではないので特別困ったことにはならない。

必要最低限の会話を済ませると、途端に二人は無言になった。しばらくはそれでよかったのでじっと押し黙ったまま歩いていたが、なかなか本題を切り出さないホセにとうとうケファが痺れを切らせた。あまり話したくない相手だとは思いつつも、この場合、どちらかが切り出さなければ話が進展しないではないか。よって、今回はケファが譲歩して口を開いたのである。

「ところで、俺に一体何の用？ 本気で異動させる気か。それとも、噂の“A-P”でも完成したのか？」

「ん、“マリア”のことですか？ 残念ながら違います。まあ、あの子ももうすぐ完成するけれど――」

こっちだよ、とホセはケファを奥へ奥へと案内していく。位階の高い者でなければ入ることのできない特殊領域のドアをホセ所有のカードキーで次々と開けていき、二人はさらに奥へと足を踏み入れた。

司祭とはいえ、ケファはここまで奥地に入ったことがない。半ば動揺しながら先に行くホセの背中を追う。

しばらく歩いて、今まで速足で歩いていたホセの足が突然ぴたりと止まった。あまりに突然止まったものだから、思い切りぶつかりそうになった。それは持ち前の反射神経で避けたけれど、止まるときは止まると事前に言っただけのいいものだ。文句の一つでも、とケフ

アが口を開こうとしたとき、彼がゆっくりと振り返った。

彼は、寒気のするほど優しい表情をしていた。慈悲深き、とでもいうべきか。真意の掴めない表情である。

「ここまで来たらもう大丈夫でしょう。ケファ、突然で申し訳ありませんが、来週から異動を命じます。——君に、ある方の教育指導を任せようと思うのです」

やはり異動だったか。来週から、という猶予期間のなさが気になったが、ケファはそれ以上に気になることがあった。おそらく優先事項はこちらだろう。わざわざこんな奥地に連れてきてまで話す理由が、「それ」にはあるのだ。

「ある……方？」

「ええ。我々にとって、重要且つ最大機密というべき、…… “とくべつ” な方の」

そしてホセは最後の扉を開ける。

刹那、ケファは言葉を失った。

その部屋は、たとえば机や椅子など、そういったものは一切排除された無駄のない簡素すぎる部屋だった。窓はひとつもなく、壁についているダウンライトが唯一の明かりらしい。本部の中とは思えない打ちっぱなしのコンクリートの壁は、とにかく寒々しかった。ひやりとした冷気が足元を這う。

その中で、突然、じゅらりと妙な音が聞こえた。重い金属が擦れるような、いやに冷たい音である。

「——ケファ。君に新しい仲間を紹介します」

その音の正体は、鎖だった。太い鎖が壁に二本繋がれており、その末端は白く細い腕にきつく絡みついていた。

あまりに腕が白いので、初めはよくできた人形だと思った。しかし、こちらの物音に気付いてか、人形の閉じられた瞼がぴくりと動く。

そう、それは生きていた。間違いない、生きている人間だったのだ。

「おい、……おい、ホセ。これは」

長い睫毛が震えるように揺れ動き、ふ、と鎖につながれた人間は
瞼をけだるそうに開く。

薄いグレーのくせ毛は顔の大部分を隠していたが、そこから覗く
瞳の色だけはやたら印象的だった。

火の粉を纏いながら勢いをあげる紅蓮の炎のような、真紅の瞳。

「彼の名前は“姫良三善”^{ひめらみよし}。我がエクレシアにおける、救世主に
して最高のプロフェットです」

——それは、今から二年前の物語。

序章

あなた方は「罪」と言ったら、一体何を連想するだろうか。

おそらく、窃盗であるとか、詐欺であるとか、そういうものではないかと思う。しかし私が言いたいのは、その意味での「罪」ではない。

前述で言う「罪」とは、一般的な社会概念的「罪」^{crime}、つまり法律上の「罪」を指す。この場合の「ゆるし」とは、罰を与えないという社会的合意成立の意味における「許し」なのである。

そもそも「罪」とは一体どういうことなのだろうか？

「罪」^{ハット}の原義とは「的外れ」、すなわち「誤れること、迷いだすこと」とされている。基本的には、神に対する不従順、そして謀反ということである。すなわち、「罪」は人間の心の“状態”であり、心から進展した道德的悪の“行動”ということなのだ。

その「道德的」な観点、又はそれから派生された宗教的感覚からくる「罪」^{sin}。私が言いたいのはこちらである。

この場合の「ゆるし」とは、罪を犯さなかった者として認める「赦し」のことだ。つまり「許し」と「赦し」の違いは端的に述べるに「法的」なのか「道德的」なのかということにあるのである。

それを踏まえてこの話を聞いてもらいたい。

現在、「大聖教」^{だいせいきょう}は世界中に信者を抱える強大な宗教となった。世界各地に支部が建立され、神に仕えるための礼拝をも欠かさない日本に存在する本部では年に一度大々的な集会が開かれるほどで、その信者は今も尚増え続けている。

しかし、当然のことながらそれに反発する組織も存在する。その名前は実のところ、はっきりとは分かっていない。今分かっている事実はいえ、この組織は七つのグループに分かれており、

Superbia Invidia Ira Accidia Avaritia Gula Lux
それぞれ「傲慢」「嫉妬」「憤怒」「怠惰」「強欲」「暴食」「色
欲」と呼ばれていることくらいだ。

——通称「七つの大罪（Deadly sins）」。彼らの特
徴は、それに属する者全てが人外と言える脅威の能力を持ち合わせ
ていること、そして彼らは必ずしも“ヒトガタ”ではないという
ことである。

長年冷戦状態にあった二大勢力は、ある時を境に変化する。「七
つの大罪」側が、とうとう実力行使に出たのだ。人々は混乱した。
彼らにより住むところを奪われた者もいる。肉親を奪われた者もい
る。

幾度も流された涙は、後に「かれら」の力になった。

「かれら」——大聖教が抱える最大規模の教団“エクレシア”の
台頭。これが運命を変えたのだ。

エクレシアの中には「神の恩恵を受けた者」——“プロフェット
”なる断罪者が存在する。彼らはある代償を支払うことにより、「
釈義」と呼ばれる特別な力を発動し、暴走した「七つの大罪」を食
い止めることが出来る。今、彼らの暴動を止められるのは彼らしか
いないのだ。

さて、ここでひとつだけ謎かけをしよう。

「エクレシア」に「七つの大罪」——果たして、どちらが正しい
のであるのか？ どちらが「罪^{sins}」を抱えることになるのだろうか？

ただひとつ言えるのは、この「聖戦」が、必ずしも「正解」では
ない、ということだけである。

（ホセ・カークランドの手記より、抜粋）

——これは、大聖教率いる“エクレシア”による、
積義を巡る物語である。

第一章 1

その少女はひどく取り乱していた。

見上げた夜空に立ち昇るは、紅蓮の炎だ。蝶の鱗粉にも似た鮮やかな火の粉が漆黒の闇にきらりと瞬いて、黒煙と混じり合って消えて行った。消防サイレンの音が徐々に近づいてくる。もうじき、この炎を消すためにやってくる。そう、ここに。

——大丈夫。

少女は大きな闇色の瞳を恐怖に震わせながらも、しっかりと己に言い聞かせるように首を縦に動かしていた。

もうじき騒ぎに気付いた教員や生徒が避難を開始し始める。その騒ぎに乗じてうまく戻れば、自分が怪しまれることなどない。でも、と少女は思う。

「本当に……」

本当に、『あのひと』は、わたしの願いを聞き入れてくれるのだろうか？

そもそも、こんなことをしてまで、叶えたい願いなのだろうか？ 少女はくりりと踵を返した。そうだ、今この場所で考えるよりは、ひとりになれる場所で落ち着いて考えた方がいい。だから今は、そんなことは一切考えず一刻も早く寮へと戻るべきだ。

踵を返した刹那、きれいに弧を描く黒髪。炎の明かりに照らされて、その色はより一層深みを増してゆく。彼女はもう振り返らなかつた。今も尚燃え続ける納屋も、煙に燻されて痛む喉も、迷う思考すらも、全部彼女にとっては「なかったこと」にされた。

——大丈夫。

走る彼女は、喘ぎながら再びそう考えた。

——この火事は、決して、私のせいなんかじゃない。

その夜、本州第三区・東十六夜市に建つ聖フランチェスコ学院の

納屋が、ものの見事に全焼した。

十

本州第三区・東十六夜市は、俗に言うところの学園都市として有名である。この場所は何百年も前から大聖教の庇護を受けながら、数多の優秀な学者を輩出してきた。学問に関することならば大抵のものは存在するし、大規模なリゾート開発もなく、景観を乱すものすらない閑静極まりない環境が若人の勉学にはうってつけなのだろうと思う。

さて、そんな閑静な通りを一台の車が走っていた。一応法定速度ではあるけれど、荒さがこれでもかというほど目立つ。別に初心者マークが付いている訳ではないのだが、どうもその動きにはどこか危なっかしい印象を受ける。

黒色の車のボンネットにさりげなくつけられた、淡い金の光を放つ十字架が太陽の光に反射してきらめいた。その十字架は大聖教のシンボル・マークであり、この車を運転する者がその関係者であることは一目瞭然だった。

「——天気だけはやたらいいなあ」

大あくびをかましながら、金髪の青年はハンドルを切る。「ヒメ、目的地まではまだあるぞ。それに車の中であまり文章ばかり読むんじゃない。酔っても知らないぞ」

助手席では、彼に「ヒメ」と呼ばれた少年が黒い書類ケースを抱えていた。そしてその手には、やや厚みのある資料。

「だったら酔わないような運転をしてくれる？」

少年は実にあっさりした言葉を返し、再び手元の資料に目を落とした。

青年はその辺りについては何も言えないようで、ぐ、と言葉を詰まらせた。

彼はそのアメジストを連想させる澄んだ紫の瞳をじっと前へ向け、

左手で首から下げている紫の肩帯を直す。その身に纏った白と黒のツートーン・カラーの聖職衣は、先週新調したばかりのものだ。今回ばかりはきちんとした格好をしないと、と思った結果らしいが、彼の左耳についている十字の飾りが付いたイヤー・カフが、その雰囲気をももの見事にぶち壊しにしている。神父——肩帯の色から判断して、司祭だろう——にして、優しい印象は微塵も感じられない。顕著なのは、彼の表情に浮かび上がる精悍さ、そして、若干の不真面目さだ。

対して少年の方は、優しい印象という点では満点である。年齢は十五歳ほど。青年と同じ聖職衣を身に纏い、肩には黄色の帯を。ほとんど差異のない恰好をしているが、どちらがそれらしいかと問われれば間違いなくこちらだろう。ただし、こちらにもいくつか一風変わった特徴を持ちあわせているけれど。

まず、肩帯と共に下げている銀十字だ。細かく彫金された非常に美しいものであると考えられるが、いかんせん彼の銀十字は無惨としか表現しようのないほどに傷だらけだった。これは祭器であるため、普通ならばこんなに傷だらけになったりしないのである。そしてもう一つは、彼の外見に関することだ。神父——彼は助祭である——にしては若すぎるということもあるが、その灰色の癖毛に隠れている瞳。これがまた一段と風変わりなのである。紅玉を連想させる赤の瞳は、見る者を思わずぞつとさせる。当の本人はさほど気にしていないようだが、その珍しい光彩は受け入れられないこともしばしばである。

少年はぺらりと資料を一枚めくり、「それにしても」と呟いた。
「ケファ・ストルメント司祭に、ひめらみよし姫良三善助祭——。指名つきの案件なんて初めてだねえ、ケファ」

金髪の青年——ケファは、「ああ」と肯定の意を示す。
「別に俺たちじゃなくてもいいと思うんだが……。どこで個人情報
が洩れたんだろ、今は“ご高名な”神学者なんかじゃねえのに。と
ころで、依頼はなんだっけ」

ええと、と少年——三善が資料をめくり、初めのページへ戻る。

「本州第三区・東十六夜の、聖フランチェスコ学院で高等部神学を教えてほしい。学長さん直々の依頼だって、ホセが言ってたよ」

「うーん、あの学院で神学の教員が足りないはずはないんだがなあ

……」

なにせ、依頼主である聖フランチェスコ学院は大聖教直属の神学校だ。一応日本の風土に合わせて、高等部までは他の学校と変わらない教育を行っているが、なにせ根幹は神学校。通常授業に加えて「道徳」の意味合いを込め『神学』を必修科目としており、基本的にはどの生徒も基本的な知識をつけてもらうカリキュラムとなっていることとなっている。そして、この学校には非常に優秀な神学者が数多く所属しており、生徒に関しても大学は是非ヴァチカンへ、という猛者が集うことで有名だ。

そんな学校で、わざわざ臨時教員を求める事態が起こるなどとは考えられない。ばやくケファに三善は無邪気な声色で話を続けた。

「あ、それは表向きの話。本当は、妙な事故が高等部で起こっているから、それを検証してほしいんだって」

「妙な事故？」

ケファが尋ねると、三善は首を縦に動かした。

「例えば、水道やプール、トイレとか……そういう水気の多い所で原因不明の発火事故が起こるんだって。現段階で生徒が三十二名、教員が十四名負傷していて——それが“七つの大罪”に関係しているかもしれないから、是非検証してくれって」

「なるほどね。だから一応名の通った学者で、且つプロフェットである俺たちにご指名が入った、と」

話の要領がようやく掴めたらしいケファは、納得した様子で数回頷いていた。しかし、その表情はどことなく険しい。きょとんとして三善は首を傾げるも、ケファは口を閉ざしたままだ。彼の頭の中では、何か別の考えが浮上しているらしい。

しばらくの沈黙の後、彼はぼつりと呟いた。

「七つの大罪（Deadly sins）」だったらいいけどねえ……」

「どういう意味？」

「ヒメ、お前はできる子なんだから、もうちょっとお勉強しなさい。大罪”以外に、もっと厄介な奴がいるだ——うおッ」

急停車。

がこん、と妙な音を立て車体が前後に大きく揺れる。脳みそがシエイクのごとく激しく揺さぶられ、同時に視界もぐわんぐわんと回転していた。

ああ、星が見える……。

三善は鈍る頭の片隅で考えた。

「悪い、ヒメ。意識はあるか」

運転席のケファも、額に手を当てながら掠れた声を出す。彼もまた、揺れにより相当なダメージを受けたらしい。二人とも頭を打ったわけではないので、致命傷ではないが。

三善はそれとなく肯定して、

「運転へったくそ！」

と言つてやった。そう、ケファの運転のへたくそさはエクレシア内ではかなり有名な話である。何でも人並み以上にこなすことのできるケファの唯一の欠点。神様は、そのあたりをきちんと考慮してくれていたらしい。

しかしその事実には納得できないのはまさに本人のみである。

「失礼な！ これは俺のせいじゃねえぞ、なんか今、変な影が——」

この期に及んで言い訳するのかと三善が反論しようとしたとき、もう一発、車が激しく揺れた。車窓から差し込んでいた日光が突然遮られ、二人は目を瞠る。

とりあえず、この話は後にしよう。二人の間で瞬時に取り決めがなされた。

それもそのはず。黒のボンネットに奇妙なものが乗っかって、彼ら二人を“見下ろしていた”からである。

例えるなら、世界の昆虫図鑑に載っている蟻の拡大写真を見ていうような――全長五メートルはありそうな超巨大昆虫が、べったりとガラスに張り付いてこちらを覗きこんでいる。口と思われる箇所からはだらだらと粘性を帯びた黄色の液体が流れ落ち、ボンネットの鉄鋼を溶かしていた。独特の白い泡と煙が立ち上る。あの黄色い液体は、強い酸なのだ。

『イタ……プロフェット……』

怪物が洩らした呟きは、確かに彼らの耳に飛び込んできた。

これだけの異常事態、普通ならば発狂ものである。しかし、この二人はこれだけの観察をじっくりと行えるくらいに、それはもう恐ろしく冷静だった。むしろ、余裕をかましているようにも見える。

ケファが楽しげに嗤った。

「ヒメちゃん。ここで問題。こいつらの属性と階層は？」

突然の質問に、三善はほんの少し困ったような表情を見せた。眉を下げながら、三秒ほど考え込む。

「ええと。身体は黒いけど、目が黄色いから“暴食（Gula）”。階層は第三？」

「正解。“暴食（Gula）”の特性は“楔（Wedge）”、酸はまあ、胃液つてところだろう。さつさと倒さないと、時間に間に合わない。行くぞ」

二人はその言葉を合図に、車を飛び出した。

刹那、激しい爆風が吹き乱れ、三善の細い体躯はあっさりと飛ばされてしまった。怪我をしないよう咄嗟に受け身を取り、雨の如く降り注ぐ車体の破片から頭を守る。容赦ない熱風が肌を焼いた。

ようやく顔を上げるも、ふっと急に視界が陰った。それが怪物による頭上からの攻撃だと分かると、三善は側転で回避し、彼らが着地する様をその目で確認する。どん、と地響きにも似た重い振動が伝わる。

「ケファ！ こっちは二体いる！」

やや離れたところからケファの声が聞こえた。

「こつちも二体。じゃあ、平等だな。戦えるだろ？」

「もちろん」

爆破により廃車——というよりは鉄片と化した車を横目に、三善は己の左手に手をかける。

彼の左手には白い手袋がはめられており、黒い革ベルトで三重に縛られている。先程側転をした際に、ガラスで掌を傷つけてしまったらしい。うつすらと赤い染みが滲んでいた。しかし三善はそれに臆することなく、さつとそれらをまとめて外してしまった。日焼けしていない乳白色の肌が露わになる。

“七つの大罪”——彼らは、敵だ。エクレシアにとって、だけではない。己にとっての敵なのだ。

三善はそう念じながら、まだ熱を帯びている鉄片を拾い上げる。熱さなど全く気にならなかった。ただそこにあるのは、胸の内から湧き上がる純粋な感情のみ。

敵は、倒す。

だから、今ここで自分にできる最上の祝詞を唱えるのだ。

「『釈義（exegesis）展開・装填（eisegesis）開始』！」

見開いた彼の紅き瞳は、今、燃え盛る炎の如く爛々と輝いていた。

第一章 2

祝詞——神を信じる『心』は、釈義の原動力である。身体を巡る独特の熱が、三善の能力発動部位に集中し始めた。それが完全に満たされるとき、彼らは奇蹟を起こす。

「『深層（significance）・発動』！」

三善の奇蹟が始まった。彼の左腕は白くまばゆい光を放ち、時折火花を散らしながら変形してゆく。スラリと細長く伸びてゆく指先、同時に放出される聖気は、淀んだ空気を一掃し、息苦しさから解放してゆく。

怪物が動きを見せた。彼らが持つ強靱な牙——通称“楔（Wedge）”が三善めがけて振り降ろされる。巨体に似つかわしくない速さだ。息もつかせないその素早さ、これが“七つの大罪”が持つ一番厄介な武器である。

三善の左腕と“楔”がぶつかり合う刹那、鮮やかな黄色の火花が飛び散る。堅いもの同士が激しくぶつかり合う音。三善は鋭い光に顔をしかめながら、それを力ずくで振り切った。

三善の腕から白光が消え失せた。三善は光に目が眩んだせいで——彼の赤い瞳は、光に極端に弱いのだ——ほんの少しだけ動きが鈍ったが、それ以外に不利なことなど何ひとつない。そう、彼の細い左腕は今やひと振りの剣となっていたのである。両刃の剣は微かに黄色のプラズマを纏っていたが、後に消滅していく。

『腹……ヘッタ』

怪物の声が振動となり、三善の身体に直に伝わってくる。

「あいにく、僕は食べ物じゃないけど」

三善の反撃が始まる。

それを遠目に見ながら、ケファは呑気に笑っていた。余裕綽々もいいところだ。なにせ彼は、一体の怪物の頭に座りこんで三善の様子を見物していたのだ。神経の図太さはこういったところで発揮さ

れるのかもしれない。

「おつ、今回はちゃんと制御できているみたいだな」

いいように扱われて怪物たちが黙っている訳がない。もう一体が味方を犠牲にしようと考えたのか、容赦なくその“楔”を振りかざした。

「おつと」

寸でのところで、ケファは宙返りを決め近くの塀に降り立った。いつまでも遊んでなんかられない。それは分かっているのだが、『時間』を取ると街中が壊滅状態に陥ってしまう。ならば、多少手を抜いてでもその景観だけは守るべきだ。

ケファは胸元で十字を切ると、溜息混じりに黙祷を捧げてやった。己と、これから天に召される者に対して『祝福』を。

「——でも、手加減って苦手なんだよなあ」

勢い余った怪物は二匹まとめて地面を転がった。派手な音と共に、近隣のガラス窓が割れる。ガラスの雨が降り注ぐ中、ケファは容赦なく己の左手を掲げた。

「『深層（significance）・発動』！」

目が眩むような閃光。彼が掲げた左手から鋭い光の矢がいくつも生み出され、怪物に向かって追撃を開始した。当然怪物もいつまでもうずくまっている訳ではない。口腔から黄色の酸を噴射し、飛び交うガラス片を瞬時に溶かし切ってしまった。あとは追撃する光の矢から逃れるのみだ。

「もう一発」

ケファが己の親指を噛み切り、舌で血液を舐めとった。そして、肩耳にぶら下がるイヤー・カフに触れながら、釈義展開の祝詞を上げる。真白きプラズマが、イヤー・カフの十字にまわりついた。聖気が爆ぜる感触。

「『深層（significance）・発動』」

彼の銀十字が光を帯びた両刃の剣——聖剣へと変貌を遂げたのと、遠くの方で三善が一体切り崩したのはほぼ同時。強い振動が地面を

揺らした。びりびりと痛いほどに鼓膜が刺激される。

三善は肩で息をしながら、左腕を一旦下ろした。空気中を飛び交う白い灰が視界を濁らせる。それが邪魔でしようがないのだが、いくら振り払おうが、己の左腕がその元凶である以上完全に追い払うことなどできやしない。

もう一体はどこだ、と辺りを見回すと、彼の左腕が元の形状に戻ってしまった。はらりと滑り落ちてゆく大粒の灰。――『対価』が切れたのだ。

しかし、『対価』だけならいくらでもある。足元を見れば、ガラス片も鉄片も、ほしいと思うよりもはるかに多く存在する。このとき初めて、ケファの運転の乱暴さに感謝した。ほんの少しだけ。

もう一体が酸を振りまきながら“楔”の先をこちらに向けてくる。猪突猛進もいいところだ。頭の中は完全に冷え切っている三善は、足元に散らばるやや大きめのガラス片を拾い上げる。

そしてひょいとその場にしゃがみ込むと、案の定怪物は塀に激突していった。その隙に、三善は素早くガラス片を白い灰へと変換する。

「『深層（significance）・発動』」

三善の祝詞と共に現れたのは、ガラス質のホイールだ。大きさはメートルほど、縁が鋭く尖っており、触れればすぐに怪我をしてしまいそうなほどである。それを、怪物が起き上がるより早く投げつけた！

車輪が回転し怪物の身体に食いこむたび、黄色の火花と茶色の液体がぶわりと噴き出してくる。別の対価を支払い、三善は己のために盾をつくると、

「……『発動』」

微かな摩擦音が聞こえた刹那、ホイールが突如爆発・炎上した。激しい熱風に歯を食いしばり、必死に両手で耳を押さえる。実はまだ火加減が上手く調節できないので、下手したら鼓膜が割れてしまう危険性があつたのである。だから予め防護壁も造っておいたのだ

が——轟音と爆風は、予想以上のものだったらしい。しばらくふらふらとしながら、三善は鎮火する様を眺めていた。

「——ヒメ、派手にやりすぎだ」

へたりこんだ三善の耳に、ケファの声が飛び込んでくる。のろのろと顔を上げると、彼は目の前で聖剣を振り降ろしたところだった。二体の怪物は間を置いて、地面になだれ込む。斬られた箇所からは黄色の血漿が噴き出していた。

それを見て、すぐに三善は悟った。自分がこれだけ時間をかけて倒した怪物を、ケファはたったの一分程度で倒したのである。さすが、としか言いようがないか。

「人のこと、言えないじゃん。ケファ」

喘鳴を洩らしながら三善が口の端を吊り上げた。そんな彼の頭に乗せ、ケファはたった一言、労いの言葉をかけてやる。お疲れさん、と。その一言で、三善が心のどこかでほっとしていた。

ケファは周囲を一瞥し、一般住民に被害が及んでいないことを確認してから、胸元で十字を描いた。

「『釈義完了——Amen』」

三善もそれにならい、祈りを捧げる。

……住民には被害は及んでいないだろうが、建物や道路、電柱など、そういったものは壊滅状態となっていた。あまり派手に壊してしまうと後々大変なことになるので、できれば爆破は避けたかったのだけれど。横目でケファは三善を見遣る。彼は未だ、真剣にお祈りをしているところであった。

いや、祈るのもいいが反省しろよ、反省。

「……なに？」

きょとんとした様子で三善が首を傾げてきた。

十

現場は後々やってきたプロフェット部門の聖職者に任せて、二人

は急いで目的地である聖フランチェスコ学院へ向かった。車は、駆けつけてきたプロフェットが乗ってきたものを拝借して。予め読んでいた資料も、私物も、先程の一件で何もかも消炭になってしまったので、詳細は結局分からずじまいだった。

ようやく学院に到着し、正門に待ちかまえていた警備員の元で所定の手続きを済ませる。しかし、二人は何故かしばらくそのまま待機するように言われてしまった。それもそのはず、せっかくこの日のために聖職衣を新調してきたというのに、先程の戦闘で全てが台無しになってしまったのである。多少の汚れなら目をつぶることもできるが、聖職衣の白い部分は血漿にまみれ、長い裾はびりびりに破れている（しかも微妙に焦げている）。唯一位階を示す肩帯は行方不明。おまけに全身傷だらけでやってきた聖職者なんて、
「確かに信用できないか」

ケファは警備員室でぼやいていた。自分がもしも警備員なら、絶対に校内へは入れさせない。

三善は彼の隣でパイプ椅子に座らされ、女性警備員から怪我の手当てを受けていた。こういうとき、彼の外見の可愛らしさは武器になる。

「それにしても、あらかじめ話を通っていると思ったのですが……」
ケファが切り出すと、別の男性警備員が肩を竦めながら言った。
「申し訳ございません。最近、校内で妙な事故ばかり起こるものですから……。外部からの侵入者か、内部の犯行か分からない以上、できるだけ閉鎖しておくようにと言われております。昨日もまた、あんなことがあったんじゃないか」

ぼつりと彼が口走ったのを、女性警備員が叱咤した。余計なことを言うんじゃない、と至極まっとうなことを言っている。

しかし、それを聞き逃す訳にはいかなかった。何せ、彼ら二人の神父はそれを調査するためにやってきたのだから。ケファはすぐに穏やかな表情を見せ、

「あんなこと……とは？　もしよろしければ、お聞かせ頂けません

か。あなた方の不安を、ほんの少しでもいいから取り除いて差し上げたいのです」

余談だが、ケファ・ストルメントは、非常に外面のいい神父であることで有名である。主にエクレシア内部で。これは彼なりの処世術であり、むしろよくここまで完璧に猫を被ることができるなあ、と感心してしまうほどだ。

三善はそれを知っているので、敢えて何も言わず、優しい神父才一ラを五割増し程度に放出しているケファを見つめた。……まさかこの人たちは騙されないだろう、一応警備の人なんだから。

しかし、それに騙されたのがまさかの女性警備員であった。元々は端正な顔立ちをしているフランス産美青年の、ある意味で武器でもある。これも三善は慣れっこなので、小さくため息をついて黙りこくるしかなかった。

「い、いえ……今朝の新聞は御覧になりました？」

日が昇るよりも早く本部を発った二人は、そんなものを見ている暇はなかった。あいにくですが、とケファが首を横に振る。

「実は昨夜、高等部の納屋が火事で全焼してしまいました」

「火事？」

「ええ。幸い怪我人は出なかったのですが……」

なるほど、とケファは頷いた。件の発火事件のことだろう。これだけ連続して起こるなら、警備が強化されるのも納得できる。もしも外部犯の仕業ならば、彼らの職務怠慢ということにもなりかねない。だから、警備員は来訪者に対してやや神経質になっているのだ。「それは……さぞ辛い思いをされたことでしょう。私も胸が締め付けられる思いがします。もしよろしければ、ここでお祈りさせて下さいませんか？ きつと我が神も、早急に解決することをお望みのはずです」

そして無理やり押し切る形で、ケファは警備員室で祈りの句を述べ始めることとなった。初めは日本語で形式的なものを述べていたが、途中からそれはラテン語へと変わる。三善は理解できないなが

らもそれをじつと聞いていたが、その中で聞き慣れた単語が耳に飛び込んでくる。

——Exegesis（釈義）。

はっとして顔を上げると、ケファはにこりと穏やかな笑みを浮かべながら彼らに礼をしているところだった。

「ありがとうございます。きっと我が神はこの学院に祝福をもたらしてくれることでしょう」

そんな胡散臭い言葉も、今の彼にはとてもよく似合っている。完全に絆された警備員たちは、感激して何度も感謝の言葉を述べていた。おいおい、そんな簡単に信じていいのか警備員……。三善はもう敢えて何も言うまい、と肩を竦めていた。

その時、警備員室の戸が開き、一人の男性が顔を覗かせた。

「大変お待たせいたしました。ケファ・ストルメント司祭に、姫良三善助祭」

初老の男性は、こちらもケファに負けず劣らず穏やかな表情で一礼してくる。ぴしりと着こなした黒のスーツは、聖職衣を連想させた。彼もまた、洗礼を受けた者であることは明白である。

「聖フランチェスコ学院へようこそ。私、本校の学長を務めさせて頂いております、四辻と申します」

第一章 3

二人は四辻に連れられ、来賓室へと向かった。

この学院は小・中・高一貫校で、現在二人が滞在するキャンパスには中学部・高等部の二つが存在する。警備員室がある正門から五〇メートルほど続く、きつい上り坂を昇った先は二股に道が分かれており、右に進むと中学部・左に進むと高等部となっている。四辻ら学校の上層機関は高等部のキャンパス前にある連絡棟におり、来賓室もその三階にあるのだという。

歩きながら、三善はケファにこっそりと耳打ちした。

「ねえ、さっきの……」

ああ、とケファは小さく頷いた。先程の警備員室での祈りのことだろう。

「本当に“七つの大罪（Deadly sins）”の仕業だったら困るから、結界張っちゃった。なんだ、気付いていたのか」

気休めだろうけど、とケファは囁く。「まさか正々堂々と正面から入ってくるとは思えないけど。ないよりマシだろ」

あの胡散臭さはただものではない。こういうところまで考えてこそその聖職者。三善はそれを思い知らされ、改めて「このひとはすごいなあ」と実感したのだった。自分が頭の中を一回転させている間に、彼はおそらく三回転くらいさせているのだろう。さすが、この年齢で司祭だけある。

そう納得していると、突然四辻が振り返った。

「歩かせてしまって申し訳ない。基本的に、校舎の中は自動車走行禁止なのです」

ほら、と彼が指差した先には、確かに大きく道路標識が設置されている。例外として、例えば救急車や消防車などの緊急車両は入ることを許可しており、そのためにわざと道路を広くしているのだそうだ。

「それにしても……きれいな学校ですね。特に、あちらに見える石造りの建物なんか。歴史の重みを感じさせる、素晴らしい建物だと思います」

ケファがやや遠くに見える円形の建物を指して言うと、四辻は嬉しそうに目を細めながら、

「あれは本校自慢の礼拝堂ですよ」

「礼拝堂？ ああ、なるほど……。ロマネスク建築でしょうか」

「ええ。サン・ジョヴァンニ洗礼堂をモチーフに考案されたと伝えられております」

ケファと四辻の会話にすっかり取り残された三善は、とりあえず「『ろまねすく』ってなんだろう……」と考えながら、二人のあとについて行く。

時刻は午後四時すぎ。ちょうど授業が終わった頃らしく、校舎から続々と教科書を抱えた生徒たちが出てくる。当然の話ではあるが、どれも皆三善と同じ年頃の少年・少女だ。それを三善はじつと見つめ、小さく息を吐き出した。

「ブラザー・ミヨシ。……なんだ、学校に行きたいのか」

いつからかは知らないが、三善が気付いたときには先を歩いていたケファ・四辻両名がこちらを見つめ、不思議そうに首を傾げていた。

「ち、ちがい……ます」

途端に恥ずかしくなつて、必死になつて否定するも、彼の心のどこかで何か言葉にできない靄がかかるのを感じていた。

「姫良助祭は、学校には？」

四辻が尋ねたので、ケファが代弁する。

「いえ、彼は幼少から本部で生活していたもので。十五歳ですけれども、大検は取得していますので今のところ学校に通う必要はないんですよ」

そうですか、と四辻がなにか言いたげに三善を見つめている。

ああ、と三善は恥ずかしさのあまり穴に入りたいと切に願っている。

た。いまさら言えるはずがないじゃないか！ 実は学校に憧れていました、この依頼が飛び込んできたとき不謹慎にも喜んでいました……なんて。そんなことを言ってしまうえば、ケファにからかわれるのは目に見えて分かっている。ならば始めから黙っているべきだ、むしろその話題に触れてくれるなど三善は強く念じる。

ところが、四辻はそんな三善に優しい声色で話しかけてきた。

「つかの間でしょうけど、姫良助祭も学校生活を楽しんでいただければ幸いです。なにも、学校は生徒だけのものじゃありませんからね。生徒と教師がいて初めて成り立つもの。共にこうありたいと願い、共に学んでいくことこそが学校の在り方だと私は考えています」ですから、と四辻は微笑む。彼は本当に、この学校を愛しているのだ。それがかたくなな三善の心にもしっかりと伝わり、なんだか気持ちが溶けていくような、不思議な温かさを感じていた。

そしてこうも思う。

こんなに素敵な方がつくる学校なのに――なぜ、事件は起こるのだろうか、と。

十

来賓室に到着すると、そこには二人分の聖職衣と肩帯が用意されていた。どちらもこの学校に勤務する聖職者のためのもので、黒を基調とした非常にシンプルなものである。

「先程エクレシア本部から連絡を受けました。替えの聖職衣は明日の朝に届くそうです。それまでは、是非我が校の聖職衣をお召しになってください」

確かに現在進行形で二人の聖職衣は見るも無惨な状態となっている。四辻の進言は本当にありがたいものであったので、二人はすんなりとそれを了承し、同時に何度も繰り返し礼を述べた。

「……それで、依頼の件なのですが」

席に着いた後、ケファがようやく切り出した。「私どもが神学の

授業を担当する、ということですね。そして、例の発火事件の調査と」

ええ、と四辻は首を縦に動かした。彼にとって、あの事件はひどく悩ましいものであった。昨夜の火災では幸い怪我人は出なかったものの、最初の火災から換算するとその被害者は相当数にのぼる。表情の険しさから、自分ではどうすることもできないもどかしさが直に伝わってくる。

「この学校は、生徒も教師も、皆さんが安心して生活できる場所ではないかもしれません。寄宿校であるから、なおさらです。生徒たちは今多感な時期にあり、不用意に傷つける訳にもいかない。だから露骨に警察沙汰にもできません。……それに、状況があまりに不可解すぎます。もしも“七つの大罪”が関与していることならば、私どもは子供達を守らなくてはなりません。神父様、どうかご尽力を」彼の声は僅かに震え、いかに不安であるかが理解できた。

それもそうだ。『聖戦』以降、“七つの大罪”と“大聖教”の対立は激化する一方だ。その大聖教に密接な関係のある学校だからこそ、“大罪”が関係している可能性も拭いきれない。これはもはや、学内だけで処理できる事件ではないのだ。

ケファはひとつ頷き、

「——心中、お察し申し上げます」

とだけ口にした。それからは数秒何かを思索し、彼なりの結論を導き出す。

「まず、状況をお聞かせ願えますか。できれば、校内図を見せて頂ければ非常にありがたいのですが」

四辻は「かしこまりました」と備え付けの棚から見取り図を取り出し、二人の前に広げて見せた。こうしてみると、この学校の敷地の広さには驚かされるばかりだ。エクレシア本部には劣るけれど、これだけの広さがあれば軽いレジャー施設がいくつか建てられるよな気もする。

「まず、私たちがいる連絡棟は……、ここです。それを取り囲むよ

うに、コの字型になっている建物が高等部本館。通常、高等部の生徒はこの中で一日を過ごします」

ふむ、と考えるケファの横で、三善は「これはなんですか」と無邪気な口調で四辻に質問している。高等部本館の右横に位置する、比較的大きな建物である。

「これは体育棟……まあ、普通の体育館ですね。二階建ての建物で、一階はピロティとなっております」

「この左の丸い建物が、先程の礼拝堂ですね」
「ええ」

四辻は続ける。「そして、体育棟よりさらに右……東側に位置するのが、学生寮です。学生寮は男子寮と女子寮に分けられ、それぞれが『大驚寮』『獅子寮』と呼ばれております」

「ああ……、聖ヨハネと聖マルコのシンボルですね。この……寮の中央にある部分は？」

「講堂です。まあ要するに、食堂ですね。決まった時間に揃って食事を摂るのが習わしなのです」

なるほど、とケファが頷いた。そして三善の肩を小突く。どうだ？ とさりげなく意見を求めているようだ。三善はしばらくじっと見取り図を眺め、首を横に振る。

「これだけでは何とも……。あらかじめ頂戴していた資料に記載されていた事件の場所も、てんでバラバラです。法則性があれば、また別なのかもしれません……」

そうですね、と四辻は肩を落とした。まあ、そんなにすぐに分かる事件ならわざわざエクレシアに依頼などしない。それはこれからの調査にかかっている。二人は全力を尽くす旨を四辻に伝え、校内図のコピーを貰っておくことにした。

「それと、神学の授業ですが」

ケファが、三善の肩をぽん、と叩いた。「こちらの、ブラザー・ミヨシに主導してもらうつもりです」

いきなり何を言い出すんだ、と三善が目を剥いていた。思わず素

が出て、「えっ」と声を洩らしたが、そんな驚きすらも無視し、彼は言葉を続けた。

「彼は十五歳と非常に若く、高等部の生徒よりも年下ではあります。しかし、彼の神学の知識は私も目を瞠るものがあります。それに、」にこりとケファが微笑んだ。「私のようなオッサンより、年齢が近い者の方がより親しみを持っていただけるのではないかと。いかがでしょう？」

その微笑みは贗物だ！ 騙されないで四辻学長！

三善の心の叫びは虚しく、四辻に届くことはなかった。彼の中で、三善のポジションは「学校に行きたくても行けなかった子」という位置にあるらしく、その提案に大きく賛同していた。教壇に立たせることで、つかの間だが学校生活を味わっていただけたら、と。そういう一心で、彼はケファの意見を快諾したのである。

少なくとも、それは四辻の善意だ。否定できずに、三善はただおろおろするばかりだった。

あれよあれよと授業で使用するテキストや教典サンプルを渡され、カリキュラムの詳細を説明される。頭では理解できたが、いまいち納得がいかない姫良三善。

どうして、こうなったんだろう……。

彼の嘆きは、結局のところ、大人に黙殺されて終わったのだった。

第一章 4

講義室を出ようとしたところで、窓際の方でざわりとどよめきの声があがっていた。

少女は開きかけた扉を一旦閉め、何事だろうかと首を傾げた。そもそも寄宿校というかなり特殊な閉鎖空間だから、生徒たちは外の話題に興味津津なのだ。きっとそういう、野次馬根性丸だしなのだろうと、少女は結論付けた。

「やっぱり、あれって本物だよね」

「学長が連れて歩いているのって……ひとり、子供が混ざってるし」「子供って神父になれるの？」

少女はそのたったひとつの言葉に身体を震わせた。神父、の一言に。

いやまさか、と彼女は思う。そんなはずはない、だって私は、『あのひと』の言う通りにやっただけだ。これでは話が違うではないか。『あのひと』は確かに、決して誰にも気づかれることなどない、と言っていた。

彼女はさりげなく窓辺に近づいて、外の様子を探った。もう大分遠くにいるためかろうじて見える程度だが、確かに四辻学長と二人の神父が歩いている。どちらも汚い身なりをしており、大人と子供というかなり妙な組み合わせだ。

その中で、少女はふと思い出す。

始めの頃、『あのひと』が言っていた。白と黒の二色を用いた聖職者に気をつけろ、と。奴らは君の願いをぶち壊しに来た「悪魔」なのだから。

微かに見える二人組の出で立ちとは、——確かに、二色の聖職衣だ。途端に、彼女の血の気はさあっと引いていった。動揺して、思わず口元に手を当ててしまう。

「どうしたの？ 顔色悪いよ」

別の生徒に話しかけられ、彼女は慌てて表情を取り繕う。そうだが、他の誰にも知られてはなるまい。これは『あのひと』との、血の盟約なのだから。

——だから絶対、私のせいなんかじゃない。

十

三善・ケファ両名は、宿泊場所として男子寮である『大鷲寮』の空き部屋を借りることとなった。そこで一旦着替えを済ませ、食事の前に昨夜火災があったとされる納屋に向かう。

「で、ここが問題の納屋か」

それは体育棟の側に建てられた小さな鉄筋小屋で、四辻曰く体育倉庫にしまいきれない外での部活に用いる備品や掃除用具が収納されていたそうだが、今はその原型を留めていなかった。壁は黒く焦げ落ち、備品もすっかり瓦礫に混ざり他のものと区別がつかなくなっている。話によると、先程まで警察の実地検分がなされていたそうだが、その名残として、立入り禁止を示す黄色のテープが張られていた。

「こりやあまた、随分派手に燃えたんだなあ」

ケファが呆れた様子でテープの周りを歩き出した。長さは、燃え残った骨組みと己の歩数で換算する。一つの壁につき十三歩。ケファの歩幅がおおよそ五十センチメートルなので、六メートル半程度の長さがあるようだ。

この納屋は比較的に見晴らしのいいところにあり、それこそ体育棟に面した部分を覗けば、学生寮からも、高等部本館からも、校庭側からもはつきりとその所在を把握できる。

歩きながらじっと観察してみたが、特段変わった形跡はない。少なくとも、“七つの大罪”が関わったような気配は微塵も感じられなかった。

「どうよ、ヒメ」

三善は曖昧に首を縦に動かした。

「僕には、ただ燃えたようにしか見えないんだけど……。ねえ、ケファ。あれって普通なの？」

彼が指差した方向に、ケファは「ん？」と目をやる。そちらには、辛うじて残った蛇口があった。本来は校庭の水撒きのために使われるだろうその蛇口、どうも三善はそれが気になって仕方がないらしい。

「うーん……位置は微妙だが、まあ普通じゃないか？ 日本の学校の標準装備と言っていていいだろうな」

「じゃあやつぱり、これも水辺の火災なんだね」

三善の言葉に、ケファはひとつ頷いた。確かに、先に報告があった通りだ。しかし彼らが実際に現場を見たのは「これ」だけだ。見方によつては本当にただの放火で、蛇口はたまたま近くにあっただけとも考えられる。

「これだけじゃあ、分らないな。昨夜の話となると、“七つの大罪（Deadly sins）” 独特の気配も消えてしまっているのが普通だ。もしかしたら、同業者かもしれないけどさ」

「同業者？」

三善がきょとんとして首を傾げたが、それについてケファはむやみに返答しようとはしなかった。ただひとつだけ、

「勉強不足」

と言ったきり、かたく口を閉ざしてしまったのだった。

「むう」

彼のそんな態度に、三善はすっかり機嫌を損ねてしまったらしい。ただでさえ、数時間前の神学ショックが後をひいているのだ。露骨に眉間に皺をよせ、「もういいよ」とそっぽを向いてしまった。これから食事を兼ねて、生徒たちに姿をお披露目だというのに。そんな不機嫌丸出しの顔のまま出席されても困る。

ケファはほんの少し考えて、

「あー、悪かったよ。うん、ごめんごめん」

「ごめんで済むなら警察も神様も必要ないもん」

「ごもつともです、ハイ」

なんでこんなにご機嫌取りをしなくてはならないのか甚だ疑問だが、まあいい。ここに、最終兵器があるのだ。腰辺りについているポケットから、ケファは一つだけなにかを取り出し、三善の目の前にちらつかせてみた。

紛うことなき、飴（棒付き）。先程警備員室からかつぱらってきたものだ。

それが視界に入るや否や、三善の紅い瞳がきらつと輝いた。しかも、彼が一番好きなイチゴ味だ。

「やるよ」

「お、おおっ……」

もらっていいんですか、と三善はいかにも「畏れ多い」と言わんばかりの反応を見せたが、突然我に返り、

「い、いや！　こんな手に騙されないぞっ」

「あーそう。じゃあ俺が食っちゃお」

ちらりと横目で観察すると、本人は眉を下げ、非常に残念そうな素振りを見せていた。がっかり、の一言が顔にはつきりと書いてある。……そんなに欲しいなら無理するんじゃないよ。

可笑しさ半分呆れ半分で、飴を三善の手に握らせた。それでようやく機嫌を直してもらえたようなので、内心ほっとしながらケファは宙を仰いだ。視線の先には、礼拝堂の頂上につり下げられたベル。次第にそれが揺れ始め、重厚な音色を奏で始めた。

——七回の鐘の音。

時刻は、十九時を回っていた。

+

「――『For unto us a Child is born,
unto us a Son is given: and t

he government shall be upon His
shoulder: and His name shall
be called, Wonderful, Counsellor,
The mighty God, The everlasting
Father, The Prince of Peace.」

三善が聖典の一部を読み上げる。

揺らめく蝋燭の炎がほんのりと赤く各々の頬と瞳を照らす。鮮やかな光彩を放つであろうステンド・グラスは、今はその蝋燭の光を反射しているだけであつたが、それでも充分に美しいと感じられた。神秘的な光に包まれて、今ここに信仰が宿る。

静かに、ぱたん、と本が閉じられる。のちに室内の明かりが点き、蝋燭の火はばらばらに消されてゆく。……溶けた蝋から立ち上る白い煙が、ゆつたりと立ち昇つていった。

三善は静かに一礼し、その場に着席する。そして、手にしていた本——聖典を膝の上に置き、黒の革張りの表紙を優しく撫でた。

一応挨拶代わりに、ということで一節読んだ訳だが、三善は若干緊張していたようで、仕草にそれが表れていた。心を落ちつけるためだろうか、机に隠されて見えないところでこつそりと表紙の金文字を人差し指でなぞっていた。

その横で、ケファが補足するために簡単な説教をしていたが、三善の耳には全く入っていなかった。あとで怒られるとは思うが、どうも頭の中がぼんやりしている。お腹が空いているからだろうか、三善はそんなことを考えた。

「——それでは、これ以上話してはせつかくの料理が台無しになりますので、ここまでとしましょう」

そのように締めて、ケファも着席する。数秒後、足先で何やら突かれたので、やはり彼には話を聞いていなかったことがすっかりバレていたようだ。

神への賛美を込めて、穏やかに、そして厳かに祈りを捧げる句を述べる。静かなる黙祷。……そしてようやく、晚餐が始まるのだっ

た。

男子・女子寮を繋ぐように建てられたこの場所は、全ての生徒が食事できるように設計されているため、非常にひろびろとした内装となっている。四辻曰く、自分たちから見て右から一年、二年、三年と席順が決まっており、特段の事情がなければこの場所で食事するのが基本だという。

三善はフォークを取り、野菜を少しずつ口に運んでいた。彼ら聖職者は四足の動物は食べてはならない。したがって、本日は生徒たちとは別メニューの半ば精進料理のようなものを食べていた。まあ彼に至っては、普段からたくさん食べない主義なので同じ年頃の子供に比べたら質素なもので充分過ぎるくらいなのだけでも。

少し食べたところで、三善は早くも満足してきたらしい。何せ、品数が多い。気持ちの方が一気に飽和状態に達してしまい、「これ、こんなに食べられるかなあ……」といった心境に陥っていたのだった。

「……ブラザー・ミヨシ」

こそ、とケファが口を開いた。まるで囁くような口調で、他の人には聞こえないよう充分配慮した声色である。

三善が横目でケファを見る。彼は表情を変えずに、ひたすら野菜を咀嚼していた。

なに？ と同じトーンで聞き返すと、ケファはつい、と顎を動かした。窓を指している。ふと三善がそちらに向けると、紅い瞳の先には夜色の空が広がっていた。それ以外に、なにも変わった様子はない。せいぜい、明かりが少ないため都会と違って星が良く見えるというくらいか。

ケファが言わんとすることを理解できなかったので、三善は一旦フォークを置き、改めて窓へと視線を送った。……やはり、これといったことは思い当たらない。

だが、その時ようやく三善はなにかを感じ取った。

臭い、とでも言うべきだろうか。まるでなにかが背筋を這ってい

くかのような、とてつもなく気持ち悪い気配を感じる。その気配には心当たりがあった。今日も一度対峙している、大聖教とは決して相容れない存在の。

「――“七つの大罪”？」

唐突にケファがフォークを置いた。

それに気がついて、三善は再び視線をケファへと移す。彼の表情は、それまで浮かべていた慈愛に満ち溢れた穏やかな表情などではなかった。代わりに、鋭いナイフの切っ先のよう、冷たい瞳で窓の外をじつと見つめていた。相変わらず、外は暗闇に包囲されている。仄暗く光るのは、あちこちに点在している街灯か。

「……四辻学長」

ケファは、おもむろに右隣りに座っていた四辻に話しかけた。この時にはすでに穏やかな表情に戻り、何事もなかったかのような表情を見せている。

「はい、どうなさいました？」

「今、この場所にはどれくらいの生徒さんがいらっしゃるのでしょうか？」

突拍子もない質問に四辻は一瞬戸惑った表情を見せたが、すぐに元に戻り、落ち着いた口調で返答する。

「ええと、高等部全学年の、およそ六〇〇名です。体調不良を理由に欠席している生徒もおりますが――」

「なるほど。分かりました」

それでは、とケファが立ち上がった。三善もそれを合図に立ち上がると、小さく己の祝詞を上げた。

――釈義（exegesis）展開。

ほんのりと巡る独特の熱が、次第に昂ってゆくのが分かる。三善はその赤の瞳を窓の外へと向け、左手の手袋をおもむろに外していった。

「ちよつと食事の邪魔が……入りそうですね」

刹那、講堂の窓ガラスが一斉に吹き飛んだ。

生徒の悲鳴が耳を劈く。ばらばらと破片が雨のように降り注ぎ、同時に磨き上げられた白い床が赤い染みによってみるみるうちに侵食されてゆく。

「『深層（significance）・発動』！」

三善が呻る。かざした左手から白い閃光がほとばしり、講堂を覆い尽くした。会場全体を覆う銀色の薄い膜が突如として現れ、降り注ぐガラス片から彼らの身を守っている。

「ヒメ、」

ケファが岩塩を口に放り込みながら肩を叩く。「その“壁”、五分……いや、三分でいいから継続してくれないか。念のため」

「対価はお互い山のようにある。三分と言わず、十分くらいでどう？」

「助かる」

がり、と噛んだ岩塩の塊。強い塩分に顔をしかめながら、ケファは割れた窓からその身を投じる。宙に投げ出された体は、重力に従って落下を始めた。

「『装填（significance）・発動』！」

その時、ケファの背には真つ白な翼が構築された。塩の破片が風に舞い、そして灰になって宙へと消えた。彼の身体は途端に鳥のように軽やかに夜空を漂い始める。

藍色の空の中に、“あれ”はいるはずなのだ。そしてそれが、今回の発火事件の鍵を握っているのかもしれない。……否、それよりも、もっと重要なことがある。

せめて一般の子供を巻き込まないでほしかった。それだけ、だ。

「——“七つの大罪（Deadly sins）”……！」

第一章 5

ケファが窓から飛び立ったのを肉眼で確認すると、三善は次の対価の装填のために、右手で銀食器をかき集め始めた。……まあ、銀食器もひと山あれば対価としては充分である。むしろ多すぎるくらいだ。

至極冷静。三善の現状況を一言で表すならば、間違いなくこうだろう。

「姫良神父！ あれはいつたい……！」

逆に、四辻を始めとする、その場にいた生徒・教師までもが突然の出来事に混乱していた。ガラス片による負傷者が出たことも彼らの不安を一層高めている。ただでさえ例の発火事件で精神が不安定になっているところに、まるで傷口に塩を塗るかのような事態。

混乱が混乱を呼んでいる——それは、非常にまずい。

うーん、と三善は数秒考えたのち、うろたえる四辻を見上げ、はつきりとした口調で言い放った。

「あなたには、まだやるべき仕事がありますよ。どうか彼らを落착かせて下さい。そうでなければ——二次災害が起こるかも分からない。お願いします、私の盾があるから、大人しくしていればこれ以上の怪我人は出ません。神と聖霊に誓って、保障致します」

四辻は目を瞠った。

この場にいる誰よりも若いはずの彼が、何故かこのとき一番頼りにできると直感したからである。その真摯な瞳が、四辻の頭を瞬時に冷やした。

その小さな背中に背負う『祈り』の力——今我々が縋りたいのは、まさしくこれなのだろう。

三善が再び口を開く。その口調はまるで、確信を得ているかのような強いものだった。

「『釈義』がある限り、我らエクレシアは負けない」

絶対に、と彼は言う。

その自信とは裏腹に、不安に負け泣き始める生徒も続出し始める。四辻が躊躇う間に、こんなにも恐怖と不安は伝染するのだ。三善の紅蓮の瞳は、揺るぎなく四辻を見つめ続ける。ここはあなたの学校なのだ、と諭されているかのようにも見えた。

「さあ、早く！」

三善の声に四辻はひとつ頷き、ようやく行動に出た。

十

夜色の空を引き裂くように、白き塩の翼を背負うケファが翔ける。講堂の窓を割られる前、確かに感じた“七つの大罪”の気配。それだけを頼りに、彼は目標物を宙から探す。

暗闇は慣れているとはいえ、搜索するにはあまりに不便だ。いつそのこと明かりでも、とケファは考えたが、その明りはすなわち敵に自分の居場所をみすみす教えることと同義だ。だからその案はすぐに却下し、月明かりだけを頼りに搜索することとなったのである。ばさりと羽ばたき、旋回。講堂上空からは、独特の残滓は残っていたものの、直接“七つの大罪”の居場所を特定できるほどではなかった。今はここにいない。もう逃げたか、と一度動きを止めると、遠くの方で何か黒い影が揺らいで見えた。

目を凝らしてよくよく見てみると、その影は重力に反して、宙にぴたりと静止した状態で佇んでいるようだ。場所は校庭の上あたり、昨夜燃えた納屋のすぐそばである。……何者かは分からないが、宙に静止できるとなると普通の人間ではないことは確かだ。

——否、人外でも、宙にその身を置くことができるのはごく限られている。

いよいよ“七つの大罪”が動き出したか。ケファはその薄気味悪さに小さく舌打ちし、胸元で十字を切った。これはもはや彼の習慣のようなもので、釈義を誰かに向けて発動する際には決まってこの

ようにしている。そして祈りを捧げる。

己と、後に天の眷属となるであろう何かに、神の御加護があるように、と。

翼が再び彼を夜闇へと誘う。同時に彼は対価を得るため、自らの親指を噛み切った。甘やかな痛みと、微かな鉄の臭い。舐めとると、口の中にはフワリと独特の味が広がってゆく。

「『装填（e i s e g e s i s）開始』」

ケファが左耳のイヤー・カフを取った。そしてその十字架の飾りをつまみ上げ、まるで刃物を振るかのように高らかにかざした。

「『深層（s i g n i f i c a n c e）・発動』！」

彼の声に呼応し、イヤー・カフが聖気を帯びた閃光を放つ。次の瞬間には大人ひとり程度の大きさの巨大十字――否、大剣へと形を変えていた。それを大きく振りかぶり、ケファは目の前に見えている謎の人影に容赦なく斬りかかった！

ざ、と空を切る音が耳を劈く。しかし、その両手に手ごたえは微塵も感じられない。

次の判断が頭を過る。だが、追いつかなかった。

鈍痛。

「つくは……ッ！」

脳天を何かに強打され、ケファの視界がぐらりと揺らいだ。吐き気とめまいが同時に襲いかかり、力の抜けた体はそのまま地面へと墜落するかと思われた。しかし彼は稀に見るほどの強靱な精神力の持ち主。すぐに大翼をはためかせ、塩のかけらと共に上空へと舞い戻る。

次第に鮮明になってゆく視界。彼の眼下には、例の影がはっきりと見えた。大きさからして、標準と比べるとやや背が高い男の影と思われる。だが、ようやく捉えたその影はケファの目の前で忽然と消えてしまった。

さすがのケファも目を剥いた。

「な……」

消えた影を追う間すらなかった。すぐに新しい衝撃が腹部に襲う。二発目の衝撃は手にしている剣で受け身を取り、無理やり薙ぎ払った。鋭く空を切る音がして、僅かだが刃先に手ごたえを感じる。

チイン、と独特の赤い火花が走った。それを視界の端の方で捉えて、ケファは思わず目を瞠った。あの火花……見覚えのある反応だ。間違いなく、あれは。

気づいてしまったからには、もう遅い。明らかに動揺してしまっている自分がいる。

再び態勢を整え、剣を再び振りかぶった。今度は容赦なく、『殺す』ための動きへと変わっていた。影に触れると同時に感じた肉を斬る重たい感触。先程よりも派手に赤のプラズマが飛び散り、夜闇の中に華を咲かせていた。その光が、一瞬だけ影の本性を露にする。
「——っ」

ケファの目は、『影』の紅い瞳を捉えた。ほんの僅かに見えただけなのに、まるで吸い込まれてしまいそうなほどに強い印象を植え付けられたその瞳。それがさらに、ケファの思考を確信へと導いてゆく。

しかし。

本当にこの影が“それ”だとすると――

心の中でもう一人の自分が悲鳴を上げている。警鐘のようにうるさく、しきりに逃げることを推奨する本能。だが、ここで引き下がる訳にはいかない。分かっているのに、身体が意に反して躊躇している。

ひとつの結論に達したケファは、既に理解していた。

今この場所で、“彼”に勝つのは不可能である、と。

少しでもそう思ってしまった自分が憎らしかった。その思考を断ち切るべく、ケファは力任せに剣を振るった。しかしそれは虚空を切るだけで、先程までの手ごたえは全くと言っていいほど感じられなかった。まして、“影”が放つ気配すらも完全に消え失せているではないか。

紫の瞳は自然と影を追い求める。

「いない、だと……？」

ケファはゆつくりと辺りを見回した。しかし宙はおろか、地上にさえそれらしい人影はなかった。あれほど独特だと感じていた気配の残滓すらも消え失せてしまっている。

涼しい乾いた夜の風が彼の頬を撫でてゆく。体の熱が徐々に冷えてゆき、冷静さを失いかけた思考も徐々に元の状態へと戻ってゆく。そして訪れた夜の静けさ。しんとした空。先程から痛々しいほどに感じていた空気のざわめきすら聞こえない。恐ろしいほどに、『全て』が元通りになっていた。

“影”を逃がしてしまったことを悔いるべきか、それとも倒される前に撤退してくれたことを喜ぶべきか。どちらにせよ、彼の心に残ったのは己を呵責する思いだけだ。

「……っ、くそっ！」

十

塩の翼の対価が切れたのでゆつくりと地上へと降り立ったケファは、悔しさのあまり頭をぐしゃぐしゃとかき回していた。身体に白い灰がまとわりつく。口の中にもそれらが入り込み、ざらりとした粉っぽい感触が舌に残る。彼はこの感触があまり好きではない。そんな些細な出来事が、彼の苛立ちをより一層高めているのもまた事実だ。

脳裏によりみがえる、先程の戦闘。否、戦闘と言えるほど大層なものではなかった。むしろ、「軽くあしらわれた」と感じる部分の方が大きい。

それよりも、紅い火花を目にした瞬間に感じたあの感情は一体なんだ。焦りか？ 不安か？ それとも、後悔か？ ……どれも違う。きつとあれば、恐怖、だ。なぜ、斬る判断が鈍ったのか——その理由は明白だった。

なぜなら、あれは。あの人影の正体は。

「ケファ！」

背後から呼ばれ、ケファははつとして振り向く。

三善だった。外が静かになったので、講堂に張った釈義を解除してやって来たようだった。その息切れしている様子から見ると、走ってきたか、体力を予想以上に消耗してきたか――。

いずれにせよ、彼を早く休ませなければなるまい。彼の身体の“仕組み”は、通常の人間のそれとは大分異なっているのだ。

三善でなくとも、一日にあれだけ釈義を展開すれば完全なオーバー・ワークだろう。こんなことを考えているケファ自身、身体のダメージは相当である。正直、今こうやって立っていられることが方が不思議でならない。

満身創痍、という表現が浮かんだケファだったが、すぐにそれを打ち消した。

三善に弱い部分は決して見せられないのである。それは師としての自分のあるべき姿だと考えていたし、彼に出会う前の自分もそうだったのだから、今さら変えることなどできない。

ただ自分は、模範を見せるだけ。それが勤めなのだ。

いずれ彼も自分の元を離れてゆくのだから。ヴァチカン支部で教鞭を執っていた頃、何人もの生徒が巣立っていったように。

三善はそう考えるケファをよそに、喘鳴混じりの声で話し始めた。「こっちはどうにか、大丈夫だった。負傷者もそんなに出ていない。そっちは？」

「……最悪だよ」

ケファは釈義完了の祝詞を唱え、手にしていた剣を小さなイヤ・カフに戻す。それを左耳の軟骨部にはめると、小さく息を吐き出した。

その赤銅の瞳が、全てを物語っている。あの“影”が、この男の闘志に火を点けた。嫌でも分かるくらい、彼は今殺気立っていたのだ。

いつになく不機嫌なケファを目のあたりにし、怯える三善。そんな彼の耳元で、ケファはそつと囁いた。その苛立ちからは想像もつかないくらい、優しい声色で。はつきりと。

「どつやら、この学校に“傲慢（Superbia）”の第一階層がうつついてるらしい」

第二章 1

翌朝、聖フランチェスコ学院の正門前に、ひとりの男が現れた。やや褐色がかった肌に、黒く短い髪。その身に纏う黒の外套が風により翻ると、独特のアイボリーの瞳が僅かに細められる。その瞳は、遠くに見える聖堂から、高等部校舎、中等部校舎……と順に追ってゆき、最後に正門横の警備員室に辿り着いた。

昨夜ケファより「学院高等部に“七つの大罪（Deadly sins）”が現れた」と報告を受けたが、今のところ落ち着いてはいないようだ。曰く、彼と行動を共にしている三善が釈義を展開し、生徒・教師たちを保護したそうだ。この落ち着きは、彼の行動の賜物だろう。

それに、と彼は警備員室を遠巻きにじつと見つめる。なんとなくだが、あの警備員室を中心に釈義の残滓を感じるので、あの二人のどちらかが釈義の「守り」をここに残していったのだろう。ということは、“七つの大罪（Deadly sins）”はこの付近には近づけない。

彼——ホセ・カーランドは小さく息をつき、さも面倒だと言いたげに肩を竦めた。実のところ、彼は昨夜ドイツから戻ったばかりなのだ。プロフェットの現役を早くに引退した彼は、今は人事を動かす者としてあちこち移動を繰り返している。ようやく本部に戻ってきたと思ったら、部下の「ちょっと面貸せ」コールもとい救援要請だ。

「泣きながら『助けてください』って言えば、どうにかしてあげますよ」

試しに電話の向こうの相手に、至極真面目な口調でこう言ってみた。すると向こうは地を這うような超低音ヴォイスで、

「ごちゃごちゃ言っていないで救援よこせ」

と返してきた。全くもって想定内の反論である。

あの子はからかい甲斐があつて面白いですねえ、と内心ニヤニヤしながら、ホセは警備員室に顔を覗かせた。

「すみません、入校手続きはこちらでよろしいでしょうか？」

警備員室には、二人の警備員がいる。どちらも男性で、少々厳つい印象を受けた。そんな彼らの鋭い目がホセを捉えると、何か言いたげな素振りで見下すやうな目で観察してくる。おそらく、昨日怪しげな聖職者（二名）がやってきて、何かとんでもないことをやらしたからだろう。それとも、“大罪”が現れたことで警戒されているのか。まあ、どちらにしろこの反応も想定内である。

ホセは彼らの目つきに臆することなく、手持ちの鞆から一枚の紙切れを取り出した。そしてそれを彼らに見せる。すると、訝しむ警備員達の表情が突然変わった。そう、疑念の表情から、畏怖の表情に。ちなみにこれも、彼からしてみれば想定範囲内。

数分後、所定の手続きをやたらすんなりと終え、ホセは校舎までのきつい上り坂をゆつくりと歩き始めた。

東十六夜市は、元々山を切り崩して作られた土地である。したがって、ほとんどの場所で――市内中心部は別だが――見事なまでの急斜面が待ちかまえている。特にこの学院に至っては山の頂上に建てられているようなもので、市に存在するどの坂よりも急で、そして長い。この年齢にしては体力がある方だと自負しているホセだが、正直この上り坂は結構、否、かなりきつい。まるで体に鞭を打つかのような仕打ちである。普段コンスタントに穏やかな表情を浮かべている彼ですら、額に汗の粒をいくつも溜めており、余裕のなさは一目瞭然だった。

二股に分かれた道を、左へ。依頼があつた高等部へはこちらの道を行くはずだ。

二〇〇メートルほどの上り坂をようやく昇り切る。情けないことに、唇から微かに喘鳴が洩れていた。認めたくはないが、年齢というものをちよつとはわきまえた方がいいのかもしれない。

校舎までは銀杏並木が続いている。今は若葉の爽やかな色彩がそ

の目を楽しませてくれていた。ぼんやりと散歩気分で歩いていると、ふと彼は強い視線を感じた。

「……ん、」

顔を戻すと、遠くの方に小さく人影が見える。

どうやら、この学校の女子生徒らしい。肩までのやや短い髪は癖ひとつないストレート。制服である紺のブレザーと青系のチェックのプリーツ・スカートが、いかにも学生らしくて思わず微笑ましいと思ってしまう程だ。そんな彼女は、ホセがこちらに気がついたことを悟ると、すぐに背を向けて走り去ってしまった。

本来ならば、それだけのこと。気に留める理由などひとつもない。しかし、どうしてだろう。ホセはそのまま足を止め、小さくなつてゆく彼女の背中をじつと、その目線だけで追いかけた。彼女の姿はとうとう、校舎の影へと消えて行ってしまった。姿が見えなくなつてからも、ホセはそのまましばらく立ち止まったままにいる。

さあつ、と温んだ風が吹き抜けた。

「——気のせい、でしょうか……」

なんだかあの子、とても思いつめた表情をしていた気がするのですが——

+

高等部講義棟三階、美術室。

三善とケファはすっかり変わり果てた姿となつたこの教室を仰ぎながら、地道に現状確認をしていた。

今朝、この教室から火が上がったと連絡を受けたのである。すぐにスプリンクラーが作動し、被害は天井がやや煤けた程度で済んだ。怪我人はなし。

消防車が撤退した後、三善は器用に水溜りを避けながら、窓辺に近づいた。窓のちょうど真下に水道があるからだ。水道の蛇口は三つあり、その全てが今も勢いよく水を噴射している。三善は手袋を

はめた左手で、蛇口を締めた。

「今回も水辺、か……」

ケファが呟く。「ヒメ、蛇口は別に壊れている訳じゃないんだろ
う?」

「うん。ちゃんと締まったよ」

特段水漏れを引き起こしている訳でもなさそうなので、たまたま故障、ということではないだろう。三善も困った様子で首を傾げており、割れた石膏像の欠片を拾い集めるケファですらすっかり参ってしまった様子だ。

「今日って臨時休校だよな? どうしてこんなところから火が出たんだろ」

「知るか。ったく、昨日の今日でまだ上手く動けねえのに、容赦ないなあ」

まだ鈍く痛む腹を押さえながら、ケファはぼやいた。

三善は再び水溜りを避けながら、ぴよこぴよこと跳ねるようにしやがみこむケファの横までやってきた。そして、天井の四隅を順に仰ぐ。黒焦げの天井。本当に、これ以上の被害が出なくてよかった。「せめて、火の状態でも見られればなあ」

ぼつりとケファが呟いたときだった。

「お困りのようですね。迷えるプロフェットのみなさん」

恐ろしく気の抜けた声が、二人の背後から聞こえてきた。

この声はとてもよく知っている。

ぱつと振り返った三善は嬉しそうに表情を明るくし、逆にケファは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。彼に対する評価が実にはつきりと分かる反応である。

「ホセ!」

扉に寄り掛かるようにして立っていたのは、ホセであった。その手には立派な革のボストン・バッグ、そして少し大きめの書類ケース。

「お久しぶりです。元気そうでなにより」

挨拶もそこそこに三善は彼に駆け寄ると、がばりと勢いよく正面から飛びつく。さすがのホセもこれを受け止めるのには少々苦労したようで、思わず後ろによるけていた。ケファはそれを見て鼻で笑う。

「今、笑いましたね」

こういうところだけは目ざといホセ、いつもの嫌味混じりのコメントをケファに向かって投げかけた。だが、彼はそれをさらりと無視する。

「随分早かったな。てつきり、警備員室で足止めかと思っていたが……」

「警備員室？ 正門の？」

「そう」

それなら、とホセは鞆から一枚の紙を取り出し、それをケファの顔面に突き付けた。反射的にそれを受け取ると、その紙に記された文字の羅列に目を落とす。

「『教皇庁特務機関発行、釈義調査令状』……？」

「日本語だとそういう無粋な訳になるんですよね」

教皇庁特務機関——大雑把に言くと、エクレシア本部お墨付きの調査令状。一般に警察機関が用いる捜査令状と性質が似ており、これが発行された以上問答無用で立ち入り調査ができるという便利な書状である。

尚、この書状は司祭以上の聖職者のみが利用できるものとなっている。先程ホセは警備員室でこれを見せつけてきたので、やたらスムーズに入校手続きが終わったという訳だ。

「教皇庁特務機関って、検邪聖省だろ。あいつら、こういう仕事もしてるのか」

「くすねてきた、が正解ですけどね」

ホセはにこりと微笑み、三善にボストン・バッグを渡した。中には、新しい聖職衣と肩帯が二人分入っている。いずれも、プロフェット用のツートーン・カラーのものだ。

「しかし、釈義調査令状ときたか……やっぱお前も、そう思う？」
多分、と曖昧にホセが頷いた。

三善はこの二人のやりとりを、実に不思議そうな表情で見ている。随所に盛り込まれた用語が理解できず、ひとり置いてきぼりになったというのが正解か。きよるきよると大人二人の顔を交互に見比べ、……彼らの言わんとすることを少しでも多く読み取るうと務める。

そこでようやく彼らが三善の困った顔に気がついて、目線を落とした。

「ああ、悪い悪い。仲間はずれはよくないなー、うん」

ケファが三善のふわふわとした頭を撫でも、彼の機嫌は逆なでされる一方だった。嫌そうにその手を振り払うと、真紅の瞳が赤銅の光彩を睨めつける。

「ヒメ君には、こつち」

ホセが書類ケースの中から、二束の資料を取り出した。一方を三善に、もう一方をケファに渡すと、「いいですか」と彼は念押しする口調で言う。

「今回、私とあなたたちの任務は似て非なるものです。あなた方は、どうかプロフェットらしく“七つの大罪（Deadly sins）”の動向を探ってください。当初の依頼通り」

「ホセは違うの？」

三善が尋ねたので、彼は首を縦に動かした。

「私は、……ええと。今回は他の部署の代理で来ているので。残念ながら別行動です」

とにかく、と彼ははっきりと言い放った。

「その資料は、以前こちらで事件が起こった際、教会の科学研で作成した解析結果です。今回、私が直接手出しできるのはそこまで。よければ映像資料もありますが、観ます？」

「観る。つーか最初から出せよ、それを」

ケファのそんな暴言はあっさりと無視された。

何枚か資料をめくり、ふむ、と三善は考えた。さすがに科学研で作成したものだけあり、専門用語ばかりで非常に読みづらい。結論はどこだ、とスキヤニングしながら探していると、その横でスキヤニング完了させたらしいケファが長い息をついていた。そして資料を返し、なるほどね、と呟く。

「“聖火”か。そりゃあただの水で消火できない訳だ」

第二章 2

せいか？ と首を傾げる三善を引き連れ、ケファは一旦寮に戻ることにした。寮の個室には生徒が自由に使用できるパソコンがあり、ホセが持ってきたという映像資料を観るにはあそこがいいだろうと判断したためだ。勿論それらパソコンは生徒用というだけあり、有害サイトをブロックするフィルタリングがかけられ、閲覧情報が逐一担当教官に連絡がいくシステムとなっている。

それだけ何とかできれば、とケファが言っていると、ホセが一緒にくっついてきた。おそらく、何とかしてやるつもりなのだろう。

講義棟をのんびりと歩きながら、ケファは横をちまちま歩く三善に目線を落とした。

「ところで、ヒメ。俺たちプロフェットが使う『釈義』についてだが――、その原義は？」

「え？ ええと、」

突然の質問に、三善は目をぱちくりさせ、一瞬口ごもる。だが、答えはすぐに見つかった。その証拠に、三秒後にはケファを仰いでいた。

「……『聖書の解釈（exegesis）』。『読み込み（eisegesis）』だけではなくて、本文の意図を読み出す、と言った方が正しいのかな。文章それ自体の字面を追うのではなく、『文章の深層に眠る意味（significance）』を考証する。うん、これだ、こういうこと」

「はい正解。……とはいえ、これは先週の授業で話したもんな。覚えて当然」

ニヤリとケファが笑った。こういう笑い方をするときは、決まって彼がなにかを企んでいるときだ。それを知っている三善は、内心「もしかして、小テスト？」と冷や汗をかいている。こういう類の予想は八割方当たる。一般に勉学に対する評価が辛いと言われるケ

ファ・ストルメントを相手に、一体どう戦えと。

「転じて、俺たちの能力としての『釈義』は、『信仰の力』を原動力に、神が造りし物質の本質を『読み込み（e i s e g e s i s）』、『深層に眠る本質を得て（s i g n i f i c a n c e）』発動している。力を体内で循環させているんだ。ここまでは復習。じゃあヒメ、プロフェット一人あたりにつき与えられる『釈義』の数とその理由は？」

三善が露骨に顔をしかめた。そして腕組みをしながら、うんうんと唸り始めた。あまりに考え事に集中し過ぎて、目の前の階段に気がつかなかったほどだ。案の定踏み外しそうになったので、ケファとホセが同時に三善の身体を引き揚げたのだが、その時にようやく「うわっ」と目を剥く始末。

「ばーか。前向いて歩け！」

怒られるも、三善は上の空だ。

「み、三つ！」

口から突いて出てきたのは、謝罪でも弁解でもなく、質問の解答だというからまた驚きだ。こればかりは「そうじゃねえよ」とさすがのケファも脱力してしまう。

今度は階段を降りた後で、質問の解答を求めている。

「数は、三つから最大五つまで。でも、理由はよく分かりません」

「正直で結構。次は階段から落ちる前に結論を出せよ」

ホセはこの二人のやりとりを、後ろから愉しげに眺めていた。三善のマイペースさもさることながら、やはりこの男・ケファが教育に関してはかなりの実力があると再認識したからである。

というのも、本来彼は神学のドクター・コースを十八歳で修了した、そこそこの名の知れた学者なのである。そのまま学者としての道を歩いてもなんら差支えなかったはずの彼が、何故エクレシアに入団したか。ホセは一度本人に尋ねてみたことがあるが、そのときは「論文を書くのが至極面倒だから」と実に真剣な表情で言われてしまった。

エクレシア入団後も、本部に栄転が決まるまではヴァチカン支部に併設された孤児院で教師を勤めていたということもあり、その質は同年代の聖職者の中でも群を抜いている。この若き天才が、さらに若いプロフェットを育てようというのだから面白い。

そう、自分があればこれ手をかけるより、彼の方が適任だった。あの子はどうやら忘れていたようだが、自分はある子に——仕方なかったとはいえ——ひどいことをしてしまった。彼がそれを思い出したら、きっと今のように飛びついてきたり、笑って話しかけてきたりしなくなる。

これが、己自身が背負った罪なのだ。少なくともホセ自身はそう思っていた。

ようやく昇降口に辿り着き、彼らはのんびりと歩調を緩めながら寮に向かう。天気がいい日は、なるべく外で授業を行うこと。これがケファの信条らしく、本部に滞在している間も彼らはよく中庭で逍遥しながら論じていることが多い。今日も例外でなく、その流れを酌んでいるようだ。

「まず個数は正解。ヒメの釈義は『金属』『プラスチック』『ガラス』の化学系三種類だし、俺だつて『塩』『血液』『炭』『熱』の物理系四種類。理由は簡単、『釈義発動のたびに身体が相当なダメージを受けるから』」

身に覚えがあるだろう、とケファが言う。例えば、能力を使いつぎて翌日寝込んだり、突然コントロールが効かなくなったりする。もつとひどい状態になると、能力そのものが体に跳ねかえる——所謂『リバウンド』が起こる。プロフェットの中ではよくあることだ。「そのダメージは属性にもよるが、一般的に、使える『釈義』の数が多いほど大きいとされている。まあ当然だろ、身体の中で訳の分からぬエネルギーが常にフル稼働するんだ、体力だつて使っし、熱量出さないと動けなくなる」

ふんふん、と大人しく聞いていた三善が、「質問、いい？」と尋ねた。ケファは無言で首を動かすだけだ。目線のみで続きを促して

いる。

「じゃあ、釈義が一つだったり二つだったり……三つに満たない人はどうなるの？」

確かに、前述のような説明を受ければ、誰もが考えることである。この『釈義』という能力、使用するプロフェットの大半は先天性——つまり、生まれつき備わった能力なのだ。必ずしも三つ全てが備わった状態で生まれてくるはずなど、ない。一つ乃至二つのみの状態で生まれてくる子供も必ずいるはずなのである。

それを聞いたケファは、いい質問だ、と笑った。

「教会側の見解としては、プロフェットの釈義制限にこだわりはないんだ。しかし、いざ“七つの大罪（Deadly sins）”との戦闘が始まったとして……、使える手段が一つだけ。特に対価が雨とか風とか、自然現象に基づいたものだったりすると、まず釈義を得る段階で大博打になってしまふ。対価がなければ、俺たちなんかただの胡散臭い教えを述べているだけのおっさんなんだよ」

つまり、と息をつく。「使える釈義は多ければ多いほどいい。しかし釈義それ自体は有限だ。だからより長く上手に付き合っていくためには、エネルギーそれ自体を削減しないといけない。つまりところ、そんな話」

本当はもうひとつ理由があるんだが——

そこまで言いかけて、ケファはぴたりと口を閉ざした。そして、後ろを歩いていったホセに呼びかける。

「映像資料って、例のサーモグラフィーも入ってる？」

「さすがに入ってますんよ。あれは持ち出し不可です」

「あつそ。ヒメ、残念だったな。もしかしたら見られるかと思ったんだけど」

何が？ と三善が問いかける前に、学生寮まで辿り着いてしまった。ここからは、例の映像を見た方が手っ取り早い。講義は一旦中断し、三人揃って借りている個室へと入って行った。

「これが、そのフィルタリングがかかったパソコンですか」
 ふむ、とホセは思わず腕組みをし、とりあえず外観を観察し始めた。

学生寮の個室は、一年生が二人部屋・二年と三年が一人部屋となっている。今回三善とケファが借りたのは一年生の空き部屋で、やや簡素なベッドが部屋の両隅に一つずつ、中央に仕切りとなるようにして机が設置されている。ホセから貰ったエクレシア・プロフェット用の聖職衣に着替え直している二人をよそに、ホセはそのパソコンを静かに立ちあげている。

銀色のボディのノートパソコンは、最近国内でも人気の軽量型だ。象が踏んでも壊れない、を謳い文句にしているが、日常生活において象に出会うことなんかほとんどないのではないか……とホセは密かに考えている。例えば話だということは百も承知だが。

そつとキーボードに触れ、何やら打ちこみ始めたホセ。滑らかなタイピングの音が響いている。

「ところで、ケファ。さっきの続きは？」

着替え終え、黄色の肩帯も銀十字も元通りになった三善がケファに尋ねた。「もうひとつの理由って？」

「ああ、そうだった」

ケファも着替え終えたらしい。金髪を手櫛で後ろに流しながら、のんびりと答える。

「今のエクレシア科学研の力では、釈義を三つ以上持つ人間でないと発見できないんだ。俺も一度見せてもらったことがあるけど、釈義を持つ人間は消費する熱量が通常の人間の倍以上になる。だからサーモグラフィーを応用した機材を用いれば候補くらいは発見できるって訳。ただし、一つ乃至二つの釈義では、普通の人間のそれと大して変わらない。だから発見そのものが遅れる」

その映像が見られるのではないかと思ったのだが、そこまで甘く

はなかったのだった。

正直な話、三善は「その、さーもなんとかって何？」とは思っていたが、その辺については敢えて何も聞かないでおくことにした。話の流れからすると、温度を感知する機械のようだ。それくらいの知識で構わないだろう。

「二人とも。フィルタリング、外れましたよ」

そのとき、ホセのお呼び出しがかかった。彼が立ちあげてから解除するまでの時間、約五分。

「意外と早かったな」

「システムが単純で助かりました。さて、映像でも見ておきましょうか……ヒメ君、おいで」

三善もひよこひよこことパソコンまで近付き、画面を覗きこんだ。

画面では、読み込み中の青いアイコンがくるくると輪を描いている。「ヒメ、今回の放火事件の話に繋げるぞ。俺たちは、今回の放火事件の犯人が、その『一つ乃至二つの釈義を持つ者』だと考えている。そしてこれが一連のボヤ騒ぎの正体——“聖火”ってやつ」

動画が再生され始めた。

講義棟の一角、水道が映し出されている。時刻は夜らしく、校舎の中はしんとした闇に包まれていた。微かに聞こえる、水の音。蛇口が緩んでいるのだ。ぴちゃん、と等間隔に聞こえる軽やかな音が、夜闇に混ざり一層不気味さが増す。

その時、三つ並んでいる蛇口の中央から、黄色の炎が噴き出した！炎の勢いは増すばかりで、とうとう天井に備え付けられているスプリンクラーが作動した。だが、炎は一向に消えない。むしろその勢いが増しているではないか。けたたましく鳴り響く火災警報器の音。赤く燃える炎が、白い天井を黒く焦がしてゆく。

「“聖火”というのは、その名の通り浄化作用を持つ特殊な炎のことだ。特徴は二つ。色がこんな風に黄みがかっていること、それから、普通の水道水や雨水なんかでは絶対に消えないこと。この火を唯一消せるのは、“聖水”という同じ属性を持つ水だけだ」

しばらく燃え続けると、炎は徐々に収束してゆく。あんなに激しい燃え方をしていたというのに、今は弱い火の粉が舞っただけだ。

三善はその映像をしばらく、じっと見つめていた。

「……もう一度、いい？」

そして、ホセの袖口を引っ張った。「気になることができた」

「ええ。どのあたりから？」

「火が上がる三〇秒前くらい」

分かりました、とホセがカーソルを動かし、映像を巻き戻した。映像は、再び夜の静けさに包囲された水道へと戻る。三善は食い入るようにつめ、時折首を傾げたりしている。

火が上がった。

「ホセ、もう一回」

映像を止め、再び同じ個所へと戻す。水の音が数度聴こえ、そして火が上がる。

「もう一回」

どうした、とさすがのケファも顔を覗かせる。しかし三善は首を横に振るばかりで、口を割ろうとしない。

四度目の映像。しかし今度は火が上がる直前に、

「止めて」

三善が言うので、ホセは言われた通りに映像を一時停止する。

「ケファ、これ、なんだろう」

そして静止画像の一部に指を指したのだった。

三善が指差したのは、水道の右端に僅かに映る窓だった。黒く塗りつぶされているように見えるが、これが一体どうしたのだろう。

「ここで何かが動いた」

と三善が言うので、再び彼らは映像を巻き戻し、再生してみることにした。今度は三善の指摘した部分に着目して。

——数秒後、ゆらり、と何かがうごめいた。

しかしそれは本当に一瞬の出来事で、それ以降同じものを見ることはなかった。

「なんだこれ？ 科学研でも発見してないだろ」

「ええ、聞いていませんが……」

おかしいですねえ、とホセも首を傾げている。一応、科学研の中であらゆる調査を行い、異常はないと判断されたため持ち出すことを許された資料なのだ。ということは、これに誰も気がつかなかったということか。現に、三善が言い出すまではホセもケファもこの影を完全に見落としていた。

「もう少し、解析してみる必要があるのかもしれませんが。もしかしたら私たちの予想が外れていて、“七つの大罪（Deadly sins）”との関わりがあるのかもしれない」

「じゃあ、両方から探ろう。ヒメ、」

ケファが三善の肩を叩いた。「お前、聞きこみしてこい」

「……はっ？」

僕が？ とあからさまに動揺した素振りを見せる。赤い目が、完全に泳いでいた。お前以外に誰がいるんだ、とケファが小突くと、三善は「それもそうか」とあっさり納得してしまった。

「俺は今から四辻学長のところに行つて、教師・生徒双方の情報を引き出してくる。ヒメはこれから学生寮を回つて、被害に遭つたつていう奴から詳細を聞いてこい」

分かった、と三善が素直に頷いた。おそらく、ケファが行くよりは警戒されないだろう、と考えたのだろう。なにせ、三善は高等部の生徒と同年代だ。上手い具合に仲良くなつてもらえればこっちのもの。

それに、普段大人にばかり囲まれている三善には、こういった機会がない限り同年代と話すことなんてない。何事も経験は大事なものである。

そういう意図があるとはつゆ知らず、三善はひとり個室を飛び出していった。

第二章 3

少女は学園の外れにある庭園へと足を運んでいた。

先程まで天気良かったのだが、今はどんよりとした厚い雲が青空を覆い隠してしまった。湿っぽい空気が流れ込んでくるので、もしかしたら、雨が降り出すところなのかもしれない。

濡れてしまう前に、寮に帰らなくては。

そう考えながら、彼女は石畳の道を歩く。

今朝、講義棟の近くにいたあの神父は誰だろう。黒い外套を身に纏っていたせいでその正体はよく分からなかったが、例のツートーン・カラーの聖職者でないことは確かだ。昨日やってきた二人の聖職者の応援だろうか？

もしもそうだとしたら、とても厄介なことになった。

思わずため息をつくとき、

「あーめちゃん」

突然頭上から声が聞こえてきた。見上げると、庭園に植えられている桜の木——今は青々とした葉に覆われている——の影に、微かに人影が見える。その人影に、少女ははっと身を固くする。

「御苦労さま。君も、ようやく慣れてきたんじゃない？」

男性の声だ。流れるように美しいテノール・ヴォイスは、こんなに不自然な内容でなければ、いくらでも聞いていたいと思う程だ。歌わせればもつと映えるだろうに、少なくとも少女の前で『彼』はそのような仕草を見せたことはただの一度もなかった。

そもそも、基本的に『彼』は少女の前に姿を現さない。初めて会った時に一度だけ姿を見せたが、それ以降はこんな感じで、声のみを伝えてくる。そんな人を信用しろと言われる方に無理があるけれど、少女はそれでも彼に付いて行くことを選んだ。その他に選択肢がなかったからだ。

「私……、」

少女は何とか声を絞り出した。「どうしよう」

「何を？」

「だって、昨日からあなたの言う聖職者が何人もやってきているもの。今日だって、そういう格好の人がやってきているし……」

怖い、と少女は切に訴えた。だが、木陰に隠れたまま一向に姿を現さない『彼』は、「大丈夫」と、優しい声をかける。

「しかし、厄介な奴が来たのは確かかなあ。昨日、腕を一本持っていかれてさ。俺も困っているところだ」

「腕……？」

「そう、腕。スパツと一本」

それってかなりマズインじゃなからうか。

聖職者が人を傷つけていいはずなんかない。もし『彼』の言うことが本当だとしたら、あの聖職者たちは――

贖者？

少女の頭にそんな言葉がよぎった。そうか、贖者ならば血なまぐさいことも平気でやってのけるだろうし、うまくいけば今までの“事件”も全てなすりつけることができるかもしれない。そうすれば、自分が疑われることはなくなる。もう、こんなに怖い思いをしなくてもいいのだ。

だが。少女の思考はそこでぴたりと静止した。

黙り込んだまま固まっている少女に、『彼』はやりわりと声をかける。

「雨ちゃんが怖いって言うなら、俺がやつつけてあげるよ」

やつつける？

少女は顔を上げた。

「そんなこと、できるの？」

「ああ、できるとも。大事な雨ちゃんを泣かせる奴は許せないねえ」それに、と『彼』は付け加えた。「片腕の代償は、しっかり払ってもらわなくちゃ」

その声色はぞっとするほど冷たい。少女ですら薄気味悪さを覚え

るほどに、『彼』が本来持ち合わせている残忍さをより一層際立たせる。

そんなことを願ってはいけないと頭では理解していた。胸の中に溜まってゆく黒い靄の正体はそれだ。自分勝手に、そんなことまで決めてしまっただけなのではないのだと。『彼』がやると言ったらやるに決まっている。一番はじめの放火の時も、二回目の時も。怖気づくのではないかとたかを括っていたら、彼は本当にそれをしてしまった。そしてこうも言う。

三回目以降は、君の番。

「……っ」

やっぱり、やめてもらおう！

少女が顔を上げると、そこには既に『彼』の姿はなかった。先程まで痛いほどに感じていた気配は霧散し、ただ湿っぽい風が庭園を吹き抜けていくばかりだった。

ぽつり、と雨粒が一滴、少女の頬を濡らした。

十

ようやくひとしきりの聞き込みを終え、三善は長く息を吐き出しながら寮を後にした。疲れた、と肩をがっくりと下げながら、詳細を記録したメモに目を通す。

それにしても、生徒たちはよく話してくれたものだ。結構な情報量に三善は呆気にとられつつ、先程までの状況を回想する。

被害に遭ったという生徒たちは突然やってきた三善を見るなり、露骨に嫌そうな顔をした。無理もない。昨日の件にしても、今朝の件にしても、不慮の事態とはいえ対処が遅れたことには変わりない。それに対し不満が募るのも至極当然のことだ。プロフェットである以上こういう局面には慣れている三善だが、やはり何度経験しても辛いものは辛い。どう対応しても、結局のところは言い訳でしかないのが分かっているからだ。

それでも、引き下がる訳にはいかない。ここで手を打たなければ、また『次』があるかもしれないのだ。

そんな思いを胸に三善が必死で頼み込むと、彼の真剣さが伝わったのか、生徒たちは唸りつつもようやく口を開いてくれた。

「……あの日の話をするのは、本当は嫌なんだ。もう思い出したくもないのに、俺たちは警察には何度となく説明しなくちゃいけない。その度に思い出さなきゃいけない……この苦痛が、分かりますか。神父さん」

とある男子学生はそう言った。左腕全体を覆うように、真っ白な包帯が巻きつけられている。その痛々しい腕を見ただけで、三善の心は酷く軋んだ。しかし、目を背けてはいけない。ぐ、と拳を握り、三善は口を開く。

「心中……お察し申し上げます。あなたにとって嫌な記憶を再び思い出させてしまうのは、非常に心苦しい。しかし、あなたのような被害者を再び出さないためにも、是非お話を聞かせてほしいのです。もちろん、主と聖霊に誓って、あなたの秘密は守ります」

必死に懇願する様子に、男子生徒は短く息をついた。仕方ないなと呟きながら。

「分かった。話すから――、約束してくれませんか、神父さん」

三善がぱつと顔を上げた。その嬉しそうな表情と云ったらない。

この男子生徒は三善のそんなストレートな感情表現を面白く感じられない。唇には微笑みが浮かんでいる。

「あなたは高名なプロフェットだとお聞きました。昨日もその力で“七つの大罪”と戦ったとか。あつ、友達から聞いたんだけど……。次に何かあった時も、俺たちを守ってくれますか」

三善は微笑んで、約束します、とはつきりと言った。

彼が体験した事件を要約すると、こうだ。

彼は校舎から学生寮に戻ろうとしていた。しかし、その日は午後から強い雨が降り始め、授業が終わる頃にはまるでバケツをひっくり返したかのような大雨となっていた。その勢いは収まらない――

むしろ、どんどん強くなっている。

校舎から寮までのおよそ百メートルには屋根の付いた渡り廊下はないし、彼は傘も持っていなかった。走れば大して濡れずに済むだろうと考え、彼はどしゃぶりの中外に繰り出したのだそうだ。そのとき外にいた生徒は、彼の周囲だけでもおよそ十五人弱。通常に比べてはるかに少ないが、これはほとんどの生徒が雨の勢いに気圧され、教室待機を決め込んでいたからだと考えられる。

彼が外に出て走り始めると、左腕が熱い。異変に気が付きふと腕を見ると、なんと制服の袖に火が付いていたのだ。このどしゃ降りの中だというのに、火は弱るところか徐々に勢いを増してゆく。慌てた彼は上着を脱ぎ捨てたので、火傷はそこまでひどくならなかった。しかし上着は全焼し、見るも無残な状態となってしまった。ちなみに周りにいた十五人にも同様に火が付き、これらの火も雨だというのに全く消える様子はなかったのだという。

「あの炎はなんですか。昨日の化け物となにか関係があるのですか」
そう尋ねる彼に、三善は曖昧な微笑みを返すことしかできなかった。

——こんな内容の話を、どの生徒も口を揃えて言うのである。シチュエーションこそ異なるが、水気の多いところで突然発火する点（水道水や、ミネラルウォーターなどが挙げられていた）や消火器では消えない点、それから時間帯が主に早朝・放課後から深夜に集中している点は共通項目として取り扱っても差支えないだろう。

ふと、先程のケファの言葉を思い出した。

「“聖火”を唯一消せるのは、“聖水”という同じ属性を持つ水だけ……」

何かが引っかかる。

三善はうんうん悩みながら、ケファ達が本拠地としている大鷲寮の一室に戻り始めた。

朝はあんなに晴れていたのに、今はどんよりと湿った雲が立ち込めている。これはひと雨降るな、と三善が思っていると、すぐに彼

の頬に雨水が落ちてきた。

「うわ、」

せっかくのメモが濡れて台無しになってしまう！

聖職衣の腹部にメモ帳をしまいこみ、三善は大驚寮めがけて一気に走り出した。雨は徐々に勢いを増し、灰色の癖毛を湿らせてゆく。このままでは、せっかくの新品の聖職衣が台無しになってしまう。

走りながらも考えて、三善は通常用いなければならない外周コースではなく、庭園を突き抜けていくことにした。本来この庭園はそういう目的で通ることは禁止されているようだが、仕方ない。事実上この庭園を通れば数分程度のショートカットが可能だし、一応自分は部外者だ。そういう少々頂けない理由を用意して、三善は方向転換した。

「……あれ？」

庭園を走りぬけてゆく刹那、とある木陰に、彼は人影を見た。

赤い瞳が捉えたのは、この学校の制服を身に纏った女子生徒だ。肩までの黒髪に、三善ほどではないが白い頬。彼女は大木に身を委ね、ぼうつと遠くを見つめている。三善の姿には気が付いていないようだ。

雨宿り、かなあ。

三善はそんなことを考えながら、庭園を走り抜けた。目の前はもう、大驚寮の正面玄関である。

+

雨の音を耳にしながら、ケファは黙々とキーボードを叩く。三善はまだ帰ってこない。もしかしたら、この雨だからどこかで雨宿りしているのかもしれない。風邪を引かれても困るので、できればそうしてもらいたいところだ。なんとなく、……濡れて帰ってくる予感があったが。

そんな彼の背後でまったりとくつろいでいるのは、すっかり休憩

モードに突入したホセである。

「ところで、今日は礼拝を行わないのですか？ ケファ」

ただ休憩するのも暇なので、自分ができることを考えたようだ。そんな問いをケファの背中に投げかけると、意外にも丁寧な返事が聞こえてきた。もつとこつ、「こつちは暇じゃねえんだよ」などと汚い言葉が返ってくることを想像していたので、思わず拍子抜けしてしまうホセである。

「今日は中止なんだと。思いの外生徒が混乱していて、疑心暗鬼に陥っているらしい。まあ、昨日の今日でこんなことがあれば……賢明だろうな。明日からはいつも通りやる予定ではいるけれど、このまま進展がなければ見合わせだろうな」

「なるほど」

ケファは一度手を止め、椅子の背もたれを利用して背筋を大きく伸ばした。ぼきりと気味の悪い音がした。それが首の骨が鳴る音だと分かれると、ホセはにこにここと笑い（いや、正確には嘲笑だろう）、言ってやった。

「歳ですね。自称二十五歳のケファさん」

「残念ながらあんたより十歳は若いぞ、ブラザー・ホセ」

「おじさんの世界へようこそ。お待ちしておりました」

「人の話は聞けよ、おっさん」

これだからアンタは……と嘆息を洩らすケファに、ホセも実にわざとらしい溜息を返す。その長つたらしさといつたらない。

「全くあなたときたら、ああ言えばこう言う。一応付き合ひだけは長いんですから、仲良くしておきましょうよ」

「絶対嫌だ。俺はお前が嫌いなもの！ 何度言えば分かるんだ、この化け狸！」

「狸とはまたまた。それじゃああなたは狐ですねえ。その化けの皮、いつ剥がしてやりましょうか」

「てめッ……」

明らかに不機嫌オーラを垂れ流すケファをよそに、ホセは涼しい

顔をしている。口喧嘩だけなら、ホセは彼に負けたことがないのだ。伊達に長いこと生きていませんよ、と呟き、それから部屋の隅のコーヒー・サーヴァに手をかけた。中のコーヒーは温み、湯気も微かに見える程度となっている。

ホセは二つのカップにそれを注ぎ、そのうちひとつをケファの横に置いた。

「あなたは確か、ブラック派でしたね」

「うん、まあ……よく覚えているな」

教えたことがあっただろうか？ 不思議そうに首を傾げたケファに、何を言っているんだと言わんばかりのホセが肩を竦めた。これも、少々演技がかったている。

「研究室時代、よく私に淹れさせていたでしょう。私の方が先輩なのに。全く、あなたときたら態度だけでかくて」

「……訂正させる。俺はお前の論文の代筆をさせられていただけなんだが」

「そうでしたか？ ……おや」

ホセはふと、ケファが開いていた顔写真ファイルの中から一枚、見覚えのある顔を発見した。

今朝、坂を登った先ですれ違った制服姿の少女である。名前を土岐野雨というらしい。そうか、そんな名前なのかとホセは納得したように頷いた。それにしても、名前で「雨」は珍しい。来日してから相当経つが、この名前は初めて見た。

「この子、さつき見ましたよ。かわいい子ですよ、日本人らしくて」

にこやかにコメントすると、唐突にケファの手が止まった。視線はディスプレイに向けられたままだが、明らかにホセの言葉に集中している。おや、とホセは思う。自分はなにか変なことを言っただろうか。ただ、（自分でもおっさんだと思いつながら）可愛いと。そう言っただけなのだが……どこに責められる要因が？

微妙な沈黙を破るかのように、ケファが口を開く。

「……今、なんと？」

「かわいい子ですよね」

「その前だ」

「この子、さっき見ましたよ」

ケファはそれを耳にするなりものすごい形相でホセを睨みつけた。まるで般若の面のような、恐ろしい表情である。そして怒気を孕んだ強い言葉を力任せに投げつけた。

「何故それを早く言わない！」

いいか、とデイスプレイを指先で叩く。「今朝、ボヤ騒ぎがあっただろ」

それは知っている。首を縦に動かしたホセに、ケファは言い放った。

「今日は高等部の全学年が休講になっているんだ。そもそも校舎に入ることをすら禁じられている。それなのに、どうして彼女がボヤのあった時間にそんな場所にいるんだ？」

「……ああ、なるほど」

ようやく納得したホセは、のんびりと彼に返答した。「つまり、彼女が一番怪しいってことですね」

第二章 4

「ただいま」

しばらくして三善が戻ってきた。すっかり雨に打たれてしまい、全身びしょ濡れ状態だ。いつもふわふわとしている灰色の髪も、今は水分を吸って白い頬にぺたりと張りつく始末。走ってきたのか、喘鳴混じりに「せっかく新しい聖職衣だったのに」と残念そうに肩を落としている。

それを見たケファは、「おかえり」と声をかけながらタオルを渡した。……本当に、予想通りに濡れて帰って来やがった。ただでさえ三善はあまり身体が強いのに、どうして雨宿りという選択肢を選ばないのだろうか。まあ、おそらくそのあたりはこの自分に影響されたのだろうが。その点についてのみ、ケファは少々反省している。

「ちよつとは予想外なことをしてみる」

と訳の分からないことを言われたので、三善は頭の上にくいつかクエスチョン・マークを浮かべながら首を傾げる。何が？ とでも言いたげな表情である。

「ヒメくん、あまり濡れてしまうと風邪をひいてしまいますよ。その辺りをもう少し賢く、ね」

苦笑するホセに補足され、ようやく合点が行った。そういえば、雨宿りという選択肢は頭になかったような気がする。ただただ、早く戻ろうと思っただけで。

「ごめんなさい、と三善が謝ったところで、さて、とホセは手にしていたカップをテーブルの上に置いた。

「ヒメくんも帰ってきたので、ちよつと出てきます」

「え、どこに行くの？」

尋ねる三善に、ホセは短く頷き、一言。

「ト、イ、レ、です」

さらりと二人の横を通りすぎ、ホセは入り口で己の革靴を履いた。そして、濃紺の傘をさりげなく携え、部屋を出ていつてしまった。ぱたん、と静かに戸が閉まる。

あまりに華麗に出ていかれてしまったので、その姿を呆然とした様子で見つめながら、三善はぼつりと呟いた。

「トイレって、確か部屋に備え付けだよな」

「傘持つて行ったけど、あのおっさんは一体どこまで行くつもりなんだ」

謎だらけだが、あのホセという男はそういう人物だ。そういうものののだと二人は熟知しているので、それ以上とやかく追求しようとはしなかった。

「それで、どうだった？ 何か聞けたか」

三善のために紅茶を淹れながら、ケファが尋ねた。彼は頭をがしがしと拭きながら、うん、と生返事をしている。

「大体は聞けたけど、ごめん。ひとりだけどうしても話を聞けなかった」

「ひとり？」

三善は肯定した。

ケファから紅茶の入った大きなマグカップを受け取ると、ふわりとした湯気が視界を濁らせる。鼻をくすぐるいい香りは、不思議と三善の気持ちを穏やかにしてくれる。ケファが淹れてくれるお茶はいつでもそうだ。どんなにもやもやとした気持ちを抱えていても、これを出されるとほっとしてしまう。まるで魔法みたいだな、と思いつつ一口飲むと、心地良い温かさが胃に流れ込んでゆく。

「あのね、土岐野雨さんっていう……」

「そうか、やつぱり」

「やつぱり？」

きょとんとしたまま三善がケファを見上げると、彼は先程まで操作していたパソコンを再び操作し、三善にディスプレイを見せてやった。

「こちらで事件に関わった人物をまとめてみた。この学院で起こった放火は今朝も含めて五回。うち、後半三回の現場全てに居合わせているのが、土岐野雨。しかも、彼女だけ被害ゼロ」

なるほど、と三善は呟き、再び画面に目を落とした。電子画面には、おそらく学生証のものだと思われる顔写真が掲げられている。日本人らしい、大きく丸い黒目に肩までのストレート・ヘア。こちらに向けられた真摯な眼差しからは、放火に関わっているとはとても想像がつかない。

そんなに悪い人だとは思えないんだけどなあ。三善はそう考えたが、すぐにそれを訂正する。以前似たようなことをケファに言ったとき、「人は顔じゃねえぞ」と言われたことがあったからだ。

そこでふと、先程の少女を思い出した。あの時は必死になって走っていたし、雨のせいによく見えなかったけれど、あの庭園にいた少女は確かこんな感じではなかったか。ふむ、と突然考え出した三善に、ケファは怪訝そうな表情のままどうしたのか尋ねてきた。

「いや、さっき、こういう子を見たなあって……」

「はっ？ それ、本当か？」

「うん。多分この子だ」

実は、寮の部屋を尋ねても彼女だけ不在だったのである。こういう事態だからこそ、今日はなるべく外に出るなと学長からお達しがあったはずなのだが。寮母も出かける姿を見ていないというので、「おかしいわねえ」と首を傾げていた。もしもあの庭園で見た少女が土岐野雨だとしたら、寮にいなかったのも頷ける。

そうか、とケファは短く頷き、パソコンのカーソルを動かした。

「今朝の放火の時なんだけど。校舎から走ってくる彼女をホセの野郎が見ているそうだ」

「それって……」

ケファは何も言わなかった。その代わりに、別のファイルを呼び出し、画面上に展開させる。それは、ホセが持ち出していた例の動画資料だった。それを再生し、三善が指摘した箇所で一時停止させる。

「昨日、“傲慢（Superbia）”と対峙したって言ったろ。もしかしたらと思ってもう一度見直したんだけど、」

そこでケファは何かを入力した。画面に一瞬ノイズが走り、画像が徐々に塗り替えられてゆく。その度に、三善が指摘した影がはっきりとしたものになる。漆黒の闇の中微かに浮かび上がるのは、人間のものと思われる影だ。時間を追う毎に、その影の輪郭ははつきりと浮かび上がってゆく。

「ところで、ヒメ。“七つの大罪（Deadly sins）”のに共通する主な能力は？」

「え？ ああ、“解析”^{トレース}“逆解析”^{リバース}“封印”^{シール}“弾冠”^{シュート}の四つ、かな」
「うん、そうだ。その中のひとつ“封印”^{シール}が、空間をねじ曲げ特定のを別次元に飛ばす……うーんと、時間軸の話はしてないか。まあ、今はそういうもんだっと思ってくれ」

ここ、とケファが影を指す。そこに浮かび上がる影は、もう当初のぼんやりとしたものなんかではなかった。くっきりとした輪郭を以てその人物の存在を知らしめている。それは、二人にとって見覚えのある人物のものだ。

「ここに、“封印”^{シール}が施されていた。ちょっと解析かけたらすぐに出てくるなんて、“傲慢（Superbia）”第一階層は大層余裕がなかったらしい」

——土岐野、雨。

それは制服姿の彼女が、苦しげな表情を浮かべながら炎を放つ瞬間だった。瞳には涙を浮かべ、声を上げ泣き叫びたいのを懸命に堪えているその姿は、こちらから見ていてもひどいものだった。唇を噛みしめながらかざした彼女の手から噴き出す、黄みがかつた炎。涙が頬を伝うたび、その勢いは増してゆく。

三善は沈痛な面持ちで俯き、無意識に手にしていたメモ用紙を握りつぶしていた。ぐしゃり、と音を立てるまで、自分が拳を握っているとは気がつかなかったほどだ。

「……三善。それで、お前の聞き込みはどうだった？」

ケファが優しい声色で尋ねると、三善はのろろと首を横に振った。

「もう……それで、いいじゃない……？」

この聞き込みの内容は、彼女が行ってきた過ちの数々だ。あの映像を見れば、それら全てが彼女にとって辛く哀しいものだ。嫌でも思い知らされる。何度も蒸し返されるよりは、ここで終わりにした方がいいのではないかと三善は思ったのだ。

だが、ケファはそれを否定した。

「お前は優しいなあ」

三善が何故拒んだのかをすぐに察し、ぼん、と半乾きの頭に手を置いた。

大きな手に、三善ははつと紅玉の瞳を見開いた。

「もしかしたら、あの嬢ちゃん、誰かに気付いてほしかったのかもしれないな。やりたくないことを無理にやらされて、でも、そのことを誰にも相談できなくてさ。辛かったろうなあ。三善、お前は今気付いただろ。だから今、誰よりも親身になってあの嬢ちゃんを助けてあげられる。でも、助けるには理由が分からなきゃいけない。あの子が今どうして欲しいのか、一緒に考えよう」

聞き込みの資料はそのために使うんだ、とケファは優しく笑った。決して彼女を責めるために使うのではないと、三善にはっきりと明言した。

それを聞き、三善は赤い瞳をじつと紫の瞳に重ね合わせ、……のろろと頷いた。そして、もうすっかりぐしゃぐしゃになった紙きを丁寧に広げ始める。

「ええと、」

ただたどしい口調で三善は要点をケファに伝えた。ケファはそれをひとつひとつ、確認しながら聞いている。そして三善が「以上です」と言い放ったのを聞くと、彼はいつもの口調で言うのだ。

「満点ごーかく。よく頑張ったな」

さて、とケファは立ち上がり、窓の外を確認した。

雨はいよいよ本降りとなり、大粒の滴がコンクリートの地面を叩きつけている。大きな水溜まりに弾かれる雨粒は波紋を描き、映し出す曇天に緩やかな波を作る。

「こりゃあ危険かもしれないな」

ぽつりとケファが呟く。

「え？」

「ヒメちゃんが教えてくれただろ。必ず水のある場所で発火する、雨水で発火した例もあるってさ。この雨の中、傘もささずに外に出歩いていたら……」

三善はさつと血の気が引く感覚を覚えた。そうだ、先程見た少女が本当にあの土岐野雨だったとしたら。

——今、発火する条件がものの見事に揃っているではないか。

三善はどうしよう、と泣きそうな顔でケファを仰ぐ。

「どうするもなにも、とりあえず見つけて保護するしかないだろ」

まだ外にいるかは分からないが、とケファは付け加えた。「ヒメ、外に出られそう？」

「うん、大丈夫」

「そ、か。じゃあ行くか」

先にケファが窓辺から離れ、外に出る準備を始めた。三善はそれを横目で見つめた後、再び窓の外に視線を移した。そして、ふっと息をつく。

実のところ、三善は雨が苦手だった。否、雨というよりは、この曇天そのものが嫌なのだろうか。暗い色をした雲が重く広がる様は、『あの時』の湿った天井を彷彿させるのだ。

自分が二年前、ケファ・ストルメントという教師に出会うまで過ぎた、あの暗く冷たい空間を。

正確に言えば、三善は当時のことをはっきりと覚えてはいない。彼が覚えているのは、暗い場所に感覚が麻痺するくらい長いこと閉じ込められていたこと、それから、たまに耳に入る「ごめんね」という、哀しそうな声だけだ。その声の正体は今でもよく分からない。

しかしその一言が、今も三善の中でしこりのように残っているのは確かである。

謝りたいのは、こちらのほうなのに。

三善はそう考えながら、それから右手の中指で首から下げている銀十字をなぞる。

細かい彫刻が指先に感触として伝わった。この十字架は、洗礼を受けた際にケファから譲り受けたものである。本来は新しいものを取り寄せるべきところなのだが、三善はわがままを言って、これを譲り受けたのである。

指先に伝わる彫刻のくぼみ、それから、それとは別の深い傷。これは自分の師が背負ってきた断罪と信仰の証なのである。この傷に彼の生きざまが見えるようで――、だから三善はこれがいいな、と考えたのだ。この傷を、彼と一緒に背負うと決めたのだ。だから。

――だから、もしもこの場所に“釈義”が原因で苦しむ人があるのだとしたら、自分がその苦しみを半分背負ってやりたい。それしかできないのが、ひどくもどかしいと感じるけれども。しかし、自分ができることは全部やりたい。

「三善、行くぞ」

背後からケファに声をかけられた。その声に反応し、三善はぱつと振り返った。

「うん」

だから、今は彼女のために動こう。そう思ったのである。

第二章 5

少女——土岐野雨は、降りしきる雨の中構内を走り回っていた。かれこれ一時間近く『彼』を探しているが、一向に見つからない。もしかしたら、もうこの学院の中にはいないのかもしれない。

どうしよう、と土岐野は喘鳴を洩らしながら、前髪から流れ落ちる雨粒を拭った。それとも、もう「あれ」を実行しに行っているのだろうか。

土岐野の脳裏には、先程『彼』が口にした一言が蘇っている。

——雨ちゃんが怖いって言うなら、俺がやつつけてあげるよ。

確かに、あの聖職者たちは怖い。なにせ人の腕を一本吹き飛ばすほどの能力があるのだ。そんな彼らに自分がしでかしてきた行為を知られてしまえば、間違いなく捕まってしまう。

プロフェットとはそういう人物だと、土岐野は『彼』から聞かされていた。殺人すら厭わない僧兵。七年前の聖戦のとき、聖都ではプロフェットたちによる大量虐殺が行われたというではないか。授業では当然そんなことは教えない。ただ、「大聖教」が一番正しいのだと懇懇と聞かされているようなものだ。歴史は時に隠蔽されることがある。だから土岐野が思うに、『彼』の言い分の方が信憑性はある。

だからといって自分が「やつつけて」なんて願っていいものとは思わない。それは、プロフェットたちが行ってきたそれと似たようなものだ。

だから土岐野は雨の中『彼』を探し回っていたのである。白い息が唇から洩れた。随分身体が濡れてしまった。寒さでかじかむ手を温めながら、土岐野は辺りを見回している。

高等部の敷地は、この場所で最後だ。ここにいなければ、あとは中等部を探すしかない。

「いない……」

しかし、休講だからか校舎の周りには人っ子ひとり見当たらない。
『彼』独特のぞっとする雰囲気もなく、土岐野がひとりではつんと
立っているだけだった。

本当に、倒しに行ってしまったのだろうか？

泣きそうになりながら、土岐野は懸命に周辺を探し回った。校舎
の影、中庭。屋上も見えてみたが、地上からはよく分らない。街路
樹も仰いでみたけれど、せいぜい鳥が雨宿りしているくらいで、そ
れらしい人物はどこにもいなかった。

雨による寒さで、体力がすっかり奪われてしまった。土岐野はつ
いその場にしゃがみこみ、咽びそうになるのを懸命に堪えた。

濡れた髪が頬に張りついている。制服のスカートもびちゃびちゃ
で、やや細めの脚にべったりとへばりついていた。

どうしよう。見つからない。殺されてしまいかもしれない。

自分の我儘のせいだ。

その時、土岐野はふと気がついた。先程から、自分に雨水が当た
っていないのだ。

見上げると、土岐野の頭上には濃紺の傘が差し出されていた。己
の背後に立つのは、背の高い一人の男。

「風邪、ひいちゃいますよ」

そう言つて男——ホセ・カークランドは微笑んだ。

突然現れた白い聖職衣の彼があまりにも自然だったので、土岐野
はつい「誰だろう」と呑気なことを考えてしまった。こんな神
父は学院にはいなかったはずだし、そもそも在籍する外国人の教諭
と言ったらせいぜい英語科くらいだ。

「ええと……土岐野、雨さんでしょうか」

彼は流暢な日本語で尋ねてきた。土岐野は曖昧に頷きながら、そ
っと立ち上がった。知らない人だが、どこかで見たことのある顔だ。
どこで会ったかな、と考えながら、土岐野は彼独特のアイボリーの
瞳を見つめた。

随分変わった色である。

そこでようやく、土岐野は今朝出くわした神父のことを思い出した。そうだ、この男はあの時の！

気づいてしまったらもう遅い。土岐野はさっと血の気が引く感覚を覚えた。

だが、ホセはと言うと悠長なもので、いつもの穏やかな調子のまま話している。

「寮までお送りしますよ。なにせこの雨ですし」

「けっ、結構です！」

たまらずに土岐野はホセを突き飛ばした。刹那、妙な熱が土岐野の両腕にまわりつく。まずい、と思った刹那。

激しい音を立てて、彼女の両手から炎が噴き出した。爆ぜるようにして勢いを増す黄みがかった炎は、真つすぐにホセめがけて突き進んでゆく。灼熱の業火。その熱で、周りの景色が大きく揺らいで見えた。

「あつ……！」

だが、ホセは至極冷静だった。あろうことか炎を避けずに、そのまま左手で受け止めてしまったのである。当然彼の左腕は火の粉を纏う黄色の炎に包まれ、聖職衣に燃え移った。

「あ、あ——」

少女の黒曜の瞳には炎の揺らめきがにじみ、涙が頬をゆつくりと伝っていった。それ以上なにも言うことができなかった。無意識に、またあの炎を発動させてしまった。しかも今度は、人間に向けて。

ふむ、ホセは呟き、懷から手のひらサイズの小瓶を取り出した。

「“聖火”はね、同じ属性の“聖水”で消えるんです」

そして、淡々と小瓶の中身を左腕にかけた。すると、土岐野が放った炎はみるみるうちに鎮火していくではないか。黒い煙はふわりと頬を掠め、焦げ臭さを残して消えた。そしてそれらが全て消えたところで、ホセは焼けおちてしまった聖職衣の袖を破り、己の腕を確認した。炎の勢いは相当だったはずなのだが、腕には傷一つついていない。彼の逞しい腕に巻かれている奇妙な機械の塊だけは、若

干表面が焦げていたが。

「ついでに言いますと、“聖水”は医療用具なので、傷にも効くんですよ」

そんな間の抜けた話は、土岐野の耳にはこれっぽっちも入っていなかった。ただ、彼女は目の前で見せつけられた奇妙な光景にただただ動揺するばかりである。

そんなことはない。ぼつりと呟いた一言は、まるでうわ言のようだ。思わずホセはきよとしたまま首を傾げてしまった。

「そんなこと、あるはずがないの……！ 何であなたは平気なの？ どうして？」

そうだ。『彼』は初めて出会った日に、はつきりと言ったではないか。

——あの『炎』は、燃えたら最後、絶対に消えることがない。だから俺が手伝ってあげる。俺がいれば、ちゃんと消してあげられるからね。

そうだ、『あの人』は確かにそう言った。しかし、目の前の神父はいとも簡単に消して見せたではないか！

「あの方は、確かに言ったのよ、確かに——」

混乱する土岐野はまるで壊れた機械のように、ものすごい速さで言葉を並べ始める。話すことで頭の中を整理する時間を確保しようとしているのかもしれない。自分でも驚くくらいに早口だ。

ホセはふむ、と怪訝そうな表情を浮かべた後、彼女の名を呼んだ。

「……『あの人』とは、一体どなたのことでしょうか」

彼の問いかけに、土岐野の唇はぴたりと止まった。しまった。

あまりに混乱し過ぎて、なにか自分とはんでもないことを口走ってしまった気がする。そもそも『彼』については他言無用だと約束していたはずだ。完全に墓穴を掘ってしまったことを悔いて、彼女はただうつむくしかできないでいる。

外の雨は小雨に変わり、しとしとと細かな水滴がコンクリートの

大地に降り注ぐ。大きくできた水たまりは、まだ僅かに滴の波紋に揺れていた。

「……あなたに教えることなんか、なにもない」

彼女の脳裏には、怒涛の勢いであの光景が流れていた。

初めて彼女の前に『彼』が現れたときのこと。『彼』は泣いている土岐野に、優しく笑って手を差し伸べてくれた。そして、願いを叶えてくれると言った。今まで誰にも言えず、ひとりで悩み続けていた彼女にとって、それは一筋の光のようで。

——よく頑張ったね。

『彼』の言葉が頭を過る。

そうだ。私は『彼』に願ったのだ。そのために『彼』の望みを叶えた。

体育館倉庫も、校舎も、美術室も。言われた通りにこの『炎』で燃やした。そうすると、必ず彼は優しい口調で褒めてくれるのだ。

——頑張ったね。お疲れ様。

「土岐野さん……？」

ホセの声が、彼女を現実に戻した。

彼女はギュッと拳を握った。

そうだ。それがどんなにいけないことだと分かっているけど、立ち止まっていけないのだ。『彼』が思い悩む土岐野をいち早く助けてくれた。決して「大聖教」なんかではない。誰よりも味方になってくれたのは。

あのひとだ。

土岐野はスッと顔を上げた。そして力のこもった黒の眼差しを、彼女はまっすぐにホセへと向ける。

だから。彼女は思い切り、声を張り上げた。

「もう放っておいて！」

「あっ……！」

叫ぶのと同時に、土岐野は走り出す。泥水が跳ねて足元が汚れようと構わなかった。ただ、『彼』に会いたかった。攻撃するのはや

めてもらいたいけれど、やはり自分には『彼』しかないのだ。会って話せば、きっと『彼』は慰めてくれる。

そう思うのに、何故だろう。喘ぐ息に混ざる細い声に、自分でも驚いた。

「どうして……」

心が苦しいのだろう。

「どうして」

こんなにも悲しいのだろう。

土岐野は立ち止まった。あの神父が追ってくる気配はない。吐き出す白い息は、今も彼女の見える世界を白く白く濁していく。

今度はジワリと目の前が霞んできた。

「どうしてよぉ……！」

どうして、涙があふれて止まらないのだろう。

第三章 1

外に出ると、じつとりと湿った空気が肺に溜まってゆくような感覚を覚えた。小雨になったとはいえ、まだぐずついた天気だ。三善は曇天を仰ぎながら短く息をつく。

「じゃあ、俺は校舎側からあたってみる」

ケファが寮母から拝借したビニール傘を差しながら言った。「ヒメは……」

「僕は逆回り。庭園経由で校舎に向かうよ」

「了解。じゃあ、もしも何かあった時は」

なにかあったときは？ と三善が首を傾げると、ケファはいつもの茶化した素振りでニヤリと一言。

「自分の身は自分で守ること」

こうして、学生寮の前で二人は別れることとなった。

先程突き抜けてきた庭園は、向かって右側にある。三善は数歩そちらに足を進め、ふと思いついたかのように振り返った。ケファの後ろ姿は、既に小さくなっていた。

「――」

そのまましばらく彼の後ろ姿を眺めていた三善だったが、後に前へ向き直り、庭園へと駆け出したのだった。

しばらく傘を差したまま走っていたが、次第に傘が邪魔になってきたようで、途中から潔く閉じてしまった。肩に振りかかる細やかな雨粒は、徐々に三善の聖職衣を重たく湿らせてゆく。喘鳴がかった息を吐き出すと、熱気を帯びたそれは白く変質し宙へと立ち昇っていた。

彼の脳裏には、少女の横顔が過っている。

「あの子――」

あの時、泣いていたんじゃないか。

空から降り注ぐ雨水が上手に隠してくれていたけれど、本当は、

辛くて悲しくてたまらなかつたんじゃないか。

そういう時、己の師ならばきつとこのように言うだろう。放っておく優しさも必要なのだ、と。優しい彼ならばきつとそう説いてくれるはずだ。もちろん、三善は放っておくことも大切だということを知っているし理解もしているつもりだ。それでも三善には、彼女が今「一人の時間」を必要としているようにには思えなかった。明確な根拠はない。だが、あの横顔にはなんとなく覚えがあった。少し前の己自身だ。

今はもうそんなことはないのだが、三善はかつて外に出ることを許されていない期間があった。己の身の上があまりに特殊すぎるためだと後々ホセから聞かされたが、あの時はただ一人で地下の密室に閉じ込められているだけで、中途半端に生かされているにすぎなかった。今のようになんて多少元気に過ごすことができるようになったのは、あの時暗い地下から連れ出してくれた二人の聖職者がいたからだ。

あの子も、今いる場所から引つ張り上げてくれる「誰か」が欲しいのかもしれない――

そう思ったところで、庭園に辿り着いた。三善は一旦立ち止まり、すっかり上がってしまった息を飲み込んだ。

――まだ、ここにいるだろうか。

三善はその赤い瞳を一度だけぎゅっと固く閉じ、大きく深呼吸した。拍動が徐々に落ち着いていく。吐き出した白い息は天に昇る。

風は、ない。

「……うん、」

行こう。

再び目を開けた三善は、庭園へとゆつくり足を踏み入れた。石畳の上を、一步一步踏み込んでゆく。蒸した空気が、まるで全身にまとわりつくようだ。一瞬顔をしかめ、三善は額の汗を袖口で拭いた。彼女が先程いた木陰は――あそこだ。三善は目を向けるも、そこには既に誰もいなかった。まあ、あれから相当時間が経っているか

ら仕方ない。移動してしまったのだろっ。となると、もう庭園から離れてしまったと考えた方がいいのか？

三善はふむ、と首を傾げ、とりあえず庭園をそのまま突っ切って行くことにした。どちらにしるこの道を通った方が早そうだ。そう思ったのである。

苔に滑らぬよう歩調をかなり緩やかにし歩いていると、突然かさり、と木の葉が揺れ動く音がした。

そちらを仰ぎ見る三善だったが、特に異変はなかった。ただ、二三枚の葉がはらりと散っているだけだ。

「なんだ……」

風か。ほっと胸をなで下ろす三善。だが、すぐにその安心は恐怖へと転じた。

睨めつけるような強烈な殺気。身を翻し釈義を展開しようとするも、遅い。

熱風。

あ、と思う暇もなく彼の細い体躯は宙に舞い、石畳の地面に叩きつけられた。後頭部に走る鈍い痛みとぐらぐら回る視界。頭をしたたかに打ったため、身体を起こすのに時間がかかってしまった。

「……ッ！」

何者かによつて頭を踏みつけられた。容赦なくぐりぐりと踏みつける靴底が強い摩擦を引き起こし、髪の毛を引っ張られているかのような激痛が襲った。そのたびに湿った砂が靴底からこぼれ落ち、三善の睫毛に降りかかる。

「——あれ？ 肩帯ストラの色が黄色だ。なんだ、間違えちゃったのか」

その声は男のものだった。柔らかなテノール・ヴォイスで、その美声はこのような状況でなければずっと聞いていたいと思う程だ。男の声をかき消すかのように、己の頭蓋骨が石畳にくい込んで妙な音を立てた。

三善はあまりの激痛に瞳に涙を浮かべながら、彼の姿を見上げようと身じろぎする。

「動くと言、折れちゃうよ」

だが、その忠告に思わずビクッと身体を震わせた。……そしてそれっきり、何かを理解したらしい三善は決して身体を動かそうとはしなかった。代わりに口を動かす努力をする。

「あ……、んっ、」

まだまだ喃語に近いが、よかった。辛うじて声は出るらしい。

再び靴底が弄るように頭を踏みつけ、ひゅ、と口から鋭い空気が洩れた。

「うっわ、まだ子供^{ガキ}なのに助祭か。よほど人手不足なのかなあ、教会の皆様は」

それはそれで大変だなあ、と憐れみを含んだ声が微かに聞こえてくる。憐れむ暇があったらその足をどけてくれ、めちゃくちゃ痛いんだが。三善はこぼれ落ちる涙をぐつと堪え、そのタイミングを見計らっている。

男はふむ、と暫し考え込み、再び角度を変えて三善の頭を踏みつけた。

「子供を殺す趣味はないんだが……あの子が恐がるなら仕方ないか」
「……離せッ」

刹那、投げ出されたままになっていた三善の左手から炎が噴き出した。まるで火柱のようにスピードと威力を上げた黄色の炎は、噴き出すそのままの勢いで男へと直撃する。

釈義の無意識の発動に三善は自分で驚いていたが、……生憎、男は全くひるんでいなかった。むしろそのせいで何か妙なところのスイッチが入ってしまったらしく、

「悪い子にはお仕置き」

鈍い、音。

同時に鳩尾に激痛が走り、三善の身体はそのまま地面を転がった。仰向けになった状態で動きは止まり、痛みを我慢するために肩だけで荒い息を吐き出す。急所を強く蹴られたせいで、吐き気と寒気が全身を支配していた。

しかしそのおかげで、相手の姿をようやく把握できた。

聖職衣を思わせる漆黒の上着に、血のように真っ赤な短髪。かなりの長身である。胸元にはかなり太い鎖がかけられていて、動くたびにそれがじゃらじゃらと重い音を立てていた。

痛みに喘いでいると、彼の革靴が三善の腹部を強く踏みつけた。

一瞬息が詰まる。

「ふうん、“聖火”か。俺の前髪を焦がすとは大したもんだ。だが相手が悪い、六〇点」

のろのろと赤い瞳を動かしながら、三善はこの男の正体を延々と考えていた。こんな人物は今までに見たことがない。だが、正直なところ彼からは生きている人間の気配が全くと言っていいほど感じられないのだ。

そこで三善は、昨夜のケファの言葉を思い出した。

どうやら、この学校に“傲慢（Superbia）”の第一階層がうろついているらしい。

その言葉の真意を確かめるべく、三善はゆっくりと声を絞り出す。

「……ごー、まん……？」

「うん？ ああ、そうそう。お前らが言うところの“傲慢”だなあ、俺は」

正確にはスペルビア、と随分優しい声で注釈をつけてくれた。だがその声色とは裏腹に、今もその脚は三善の鳩尾を踏み続けている。いい加減痛みもよく分からなくなってきた。ぼんやりとしたまま、三善は数回に分けて息を吐き出した。釈義を使った後の、なんとも言えない脱力感が残っている。やはり先程の炎は“釈義”だったか。「ああ、可愛いなあ！俺、そういう苦痛に悶える顔大好き」

そして霞む視界の中、彼はにこりと頬に笑みを湛えた。その表情は、まるでケファが普段意図的に纏っている“いい子の仮面”のようだ。つまりは、中身が伴っていない。笑いたくなければ笑わなけ

ればいいのに——次に受けた一撃で、三善の思考はそこで止まった。唇から胃液がこぼれ落ちる。

「さて、そろそろ気絶してもらわないと困るな。人間はどこが弱いんだっけ。左胸……は駄目か、殺しちまう」

そこで突然男の口が止まった。男の脚を、三善の左腕が捉えたからである。

この時点で三善の視界は完全にブラック・アウトしていた。ほぼ無意識でなにかを捉えたが、それがまさか彼の脚だとは彼の知る由もない。ただ、どこかで己の師を呼んだだけ。三善の中で、あの師は困ったような表情を浮かべている。『あれ』はあまり余所で使うな、と、彼の唇が動く。

ごめんなさい。三善は短く呟いた。

そんな突拍子もない三善の行動に、驚きのあまり“傲慢（Superbia）”は目を剥いている。だが、所詮は無意識のあがきだ。彼はそう判断し、振りほどこうとした。

——三善の赤い瞳が、まるで黄昏の空のように滲んだ朱に変色するまでは。

彼はつい動揺し、瞬きを二回ほど、かなり意図的に行った。その間に三善の瞳は元の紅に戻ったが、それでも男は焦燥感に駆られている。なにせ、この反応には見覚えがあった。“七つの大罪（Deadly sins）”の中では特に珍しくない、とある能力と酷似しているのだ。

そんなはずはない、と“傲慢（Superbia）”は足元で伸びている三善を睨めつけた。

「おい、お前。今何しやがった？」

「……『解析（Trace）』、」

その返答を聞くや否や、彼は三善を容赦なく蹴り飛ばした。細い体軀はうつ伏せの状態でどさりと地面に滑り落ちる。初めは右手の人差し指が痙攣していたが、……とうとうぴくりとも動かなくなつた。

小さく舌打ちした彼は沈黙した三善を見下ろすと、白い息を吐き出した。

「――まずは一人目、か。うっかり殺しちゃったか？」

加減が出来なくて困る、と彼はぼそりと呟いた。

それにしても、だ。先程のあの能力は一体何だ。足元で伸びたまま動かない少年神父を見下ろしながら、“傲慢（Superbia）”は静かに思考を巡らせる。

“七つの大罪（Deadly sins）”のみが持ちうる四つの能力。その中のひとつを、たかが大聖教の神父が行使するなどとは聞いたこともない。しかし、あれは間違いなく本物だった。

その名は『解析^{トレース}』――他人の能力をそっくりそのままコピーする能力。

俺はあいつに一体なにを「盗まれた」のか？

「まあ……盗まれたものが、たかがプロフェットに扱える訳ない、か」

彼はそのように呟き、その場を後にした。

残る神父は二人。あの子のために、徹底的に排除する。

第三章 2

雨の中走り去る土岐野を、ホセはついに引き止めることができなかった。

本来的には立場上引き止めなければならなかった。そもそも、今己がこの学院に滞在しているのは、教皇庁より派遣された釈義調査官だからだ。ならば尚更引き止めなければならなかったはずだ。自分でも分かっている。だが、あの背中を見ていたらどうしても声をかけられなかった。

少なくとも、今から己が言う言葉は、未来に沢山の可能性を秘めている若者に対してつきつけるものではない。次の世代にはそれなりに道を選ばせてやりたい。現に周りの大人たちによって可能性を極端に狭められた子供がひとり、身近にいる。彼に対する償いではないが、どうしても強制するなんてできなかった。

土岐野雨の「あれ」は、間違いなく“釈義”だ。

“聖火”を放たれた時、咄嗟にとある術すべを用いて“釈義”を相殺させた。おかげで火傷こそしなかったが、正直なところ非常に危なかった。それくらいの脅威をあの子は持っているのだ。随分苦しい思いをしてきたに違いない。

早く見つけてあげられなくて申し訳ない。そして、そのまま逃がしてあげられなくて申し訳ない。なぜなら、己がああ令状を持つ限り、彼女の存在を教会に報告しなければならないから。せめてただの聖職者として派遣されていたのなら、まだいくらか道があったもののを。

そこでふと、ホセは彼女の言葉を思い出した。

あの人は、確かに言ったのよ、確かに――

「……『あの人』、ねえ」

思い当たる節はあるけれど。

そう考えながら、彼は実にのんびりとした足取りで歩き始めた。

いずれ彼女にはまた会うことになるのだから、焦らなくてもいいかという見解に至ったのだ。それよりも、彼女が洩らした『あの人』とやらを検証しに行った方がいい。おそらく、頭に浮かんでいるとある人物で大方間違いはないだろうが。

しばらく歩いて、ホセはある一か所でぴたりと立ち止まった。

その場所は、昨夜ケファが『あの人』と対峙した場所であった。先日燃えたという納屋のすぐそば。それなりに大乱闘だったようで開けた校庭はところどころ液化化現象を起こしている。幸い他に建物が存在しない土地だったので、校舎などには一切影響がないようだが。よほど強い聖気同士がぶつかり合ったのだなあ、とついつい不謹慎にも感心してしまうホセだった。

そして傘越しに宙を仰ぐ。近くの建物は、体育館と連絡棟か。

ホセは自ら歩いて建物を観察し、いかなる被害を受けたのか細かく確認し始めた。

建物の陥没はないが、ケファが使用した“聖十字の剣”の影響で多少壁に亀裂が入っている。あの剣は強力な神器故に、加減しないところという事故が度々発生するのである。気になるのは、壁に走る亀裂から微かに感じる例の残滓か。この感じは嫌と言うほどよく知っている。

ケファが言うには、“聖十字の剣”で斬りかかったとき、紅い妙な火花が散ったらしい。彼が扱う彼の剣は大抵のものを斬ることができるはずだし、それにケファの優れた動体視力を以て“動きが追えない”ということは滅多にない。もしあるのだとしたら、よほど高位な“七つの大罪（Deadly sins）”くらいだろう。

総じて考えると、やはり『あの人』とは――

「――」

刹那、ホセは振り向きざまに手刀を繰り出した。握っていたはずの傘はふわりと曇天の空を舞い、数秒の間の後地面に落下。身を翻したのと同時に、己が身に纏う白色の聖職衣も軽やかに揺れた。

繰り出した手刀は空を切り、代わりにもう一方の腕を何者かに強

く掴まれた。しかしホセは一切動じない。瞬時に肘で相手の急所を突く。今度ははつきりとした手ごたえがあった。

「躊躇わずにまっすぐ狙ってきたか。さすがだねえ、^{ファーザー}司教」

ホセの片腕を封じるその男は、血のように真つ赤な短髪を持ち合わせていた。聖職衣を思わせる漆黒の上着は勢いでふわりと翻り、それに伴い首元の鎖がじゃらりと乾いた音を立てる。

「そう呼ぶのはやめてください、たかが“七つの大罪（Deadly sins）”風情が」

ホセは珍しく冷たい声色で吐き捨てるように言い、強く掴まれていたその手を振り払った。そして、湿り気を帯びる己の短髪を乱暴に掻き上げる。

赤毛の男は愉しげに嗤いつつ、ほんの僅かに肩を竦めた。

「まさかこんなところで会うとはねえ。『十字軍遠征』最大戦力保持者——孤高のプロフェット、ホセ・カークランド。てつきりくたばったかと思っただぜ」

「あなたのその身体は、一体何代目ですか。私は前の『あなた』なら知っていますけど、ね。『傲慢（Superbia）』の第一階層」

赤毛の男はニヤリと気味の悪い笑いを浮かべ、それから右手をひらひらと動かした。その腕は刹那、まるで風化したかのように地面に零れ落ちた。それは砂の城が崩れ落ちる様と非常によく似ている。それを目の当たりにし、ホセは露骨に不快な表情を見せた。

「ああ、崩れちゃった。君の部下がね、昨日俺の腕をぶった切ってくれたものだから。復活するまで適当に補っていたんだけど……この湿気じゃあ駄目だったか。嫌だねえ、日本は雨が多くて。そうは思わない？」

「生憎、私の祖国は雨と霧ばかりでしたので。……戦うおつもりで？」

ホセが問うと、“傲慢（Superbia）”はうん、と首を縦に動かした。

「あの子がそのように御所望だからね。お前たち聖職者が恐いんだってさ。恐怖を感じるものは全て悪だ。悪は退治してやらなきゃ」

あの子とは、とホセは一瞬考えたが、答えはすぐに出た。はっと顔を上げ、問い質すような口調で“傲慢”に尋ねた。

「まさか、土岐野さん……」

「君には関係ないでしょ。それよりさあ、自分の身の回りの心配をしたら？ 君、『前の俺』に会ったときはDoubting Thomasの野郎を連れていたでしょ。あれが造反したから別の生き物に乗り換えたの？ 随分可愛い犬っころだこと。役に立つの、あれ」

「犬っころ……？」

「真っ赤なお目目の子犬ちゃんだよ」

男のその発言に、ホセは思わず目を瞠った。

おそらくそれは——犬っころで連想するのもどうかと思うが——三善のことだ。なぜ“傲慢”がそれを知っているのか。否、知るはずがないのである。そもそも三善は『戸籍自体が存在しない』。“七つの大罪”に知られぬよう隔離して育てられたはずで、プロフィールとして活動するようになってからもなるべく目立たぬよう位階を調整した。この事実を知っているのは、ホセと、専属教師であるケファ、それから大司教補佐のジエームズ・シェーファーくらいである。

三善の存在を、“七つの大罪(Deadly sins)”の核である“第一階層”にこのような形で知られてはならなかった。まだその時は来るべきでなかったし、然るべき、と判断するには、彼はまだ若すぎる。だからあらゆる手段を用いて徹底的に隠蔽し続けていたのに。

となると考えられるのはただ一つ。彼は既に何らかの形で三善本人と接触してしまったのだ。

全くもって嫌な予感しかない。

「……彼を、どうした？」

「殺しちゃったかも。だって“^{トレース}解析”してきたんだもん」

頭に血が昇るのが自分でも分かった。しかし今にも溢れ出しそうなドロドロとした気持ちを垂れ流してしまつては元も子もない。張り付いた笑みを浮かべたまま、ホセは首を傾けた。そうですか、困りましたね。そのように呟きながら。

その様子を見て、“傲慢（Superbia）”は嘲笑った。

「お前の弱点は、感情を上手く隠せないことだ」

瞬間、男の姿が忽然と消えた。ホセは斜め上を見上げ、左腕に巻かれた器械から何かを繰り出した。乾いた摩擦音が響き、それが止まると同時に彼は地面を蹴り上げた。

ホセが宙に浮かんだのと、彼が先程まで立っていた場所に炎の雨が降り注いだのはほぼ同時だった。激しい爆風はホセの聴覚を侵してゆく。熱がこちらにまで這いあがってくる。火の粉が舞い、熱で目が焼けそうだった。

「っ、痛……」

彼は自分の左腕から真つすぐに伸びる『何か』——ワイヤーを横目で見つめ、ふ、と息をついた。こんなこともあるうかと、両腕に常に仕込んでいるものだ。とはいえ、腕に相当な負担がかかるのであまり使いたくない代物なのだが。

ホセはリールでそれを巻き取り、すたと連絡棟の屋根の上に降り立つ。地上を見下ろし、流れてゆく白い煙をじつと見つめた。こうしてみると、まるで地上が全て真つ白に染まってしまったかのようだ。例えば、新雪がすっぽりと地上を覆い隠したかのような。

その光景は、彼のそう古くはない記憶と非常によく似ている。あの日はとても寒かった。大豪雪でバギーは立ち往生。食糧車はそもそも途中で撃破されてしまった。疲弊した仲間たちを休ませ、単身前線に向かった。普通ならばあり得ないことだが、この部隊はそれが普通だった。その気になれば、たったひとりでも充分戦える。それが己の部隊だ。讃美歌を口ずさみながら現れると、決まつて「彼ら」は発狂する。神に祈る時間くらいなら考慮してやったが、それ

以上の猶予は絶対に与えない。そして地上のありとあらゆるものを、灰に

「——っ！」

ぱしん。

自ら頬を叩いて、湧き上がる妄想に終止符を打った。身体の震えもそれと共に落ち着きを取り戻し、頭の中もいい具合に冷めた。

ホセにしては珍しく渋い表情を浮かべ、小さく舌打ちする。

「こんな時に、ケファはどこに行っただんですか。役立たず」

そう呟いてから、そういえば自分が勝手に出歩いたことを思い出し、少々後悔した。まあ彼がこの爆音に気づかないはずはないから、いずれ駆けつけてくれるだろう。それまで時間をうまく稼げばいい。ホセはちらりと背後を見、それから右腕を振りワイヤーを飛ばした。刹那、耳を劈くような激しい金属音を立てフックが弾かれる。

「急に攻撃してくるとは。あなたらしくもない」

嗤いながら振り返ると、“傲慢（Superbia）”はほぼ真後ろに立っていた。その身体には赤いプラズマを纏っている。それはあたかも、彼自身を守っているようにも見えた。

「ねえ、^{ワイヤー}司教。さつきから気になっていただけ、何で釈義を使わないの？ お前の第一釈義を使えば一発だろうに」

それは実能的を射ている問いだ。そして、今のタイミングで気付かれるとかなり厄介。ホセはぎくりと身体をこわばらせるも、それについて何も言及することはなかった。ただ、無言で睨みをきかせているだけだ。

その様子に、おや、と思ったのは“傲慢”の方である。

「まさかとは思うが——“喪失者（Ruין）”に、成り下がったとか？」

ホセの反撃より早く、男は行動に出た。

リールで回収しかけたワイヤーの先端を掴み、手際よくホセの首に絡ませる。バランスを崩したホセの身体は屋根の上に押し倒され、身じろぎひとつできない体勢になる。

上に組み敷く男はからからと笑い、それからホセの顎を掴んだ。
「滑稽だね。あの英雄が“喪失者”に、ねえ。そんな身体で俺に対抗しようとしたの？ 随分甘く見られたものだ」

そしてホセのアイボリーの瞳をじつと覗き込む。その表情は、ホセが微かに見せる動揺を楽しんでいるようにも見えた。

「俺は“第一階層”。“七つの大罪（Deadly sins）”の中で唯一“弾冠”……身体を交換できる者。俺の命は永遠だ。生物が最も進化したかたちを、俺は手にしているんだ。——一〇〇年そこから命尽きるお前らなんか、これっぽっちも怖くねえんだよ」
その言葉に、ホセはふつと笑みをこぼす。

「……さすが“傲慢（Superbia）”ですね。自分が一番だと言いたいのですか？」

「勝手に喋るな、司教。^{ファザー}プロフェットとしてのお前がいないエクレシアなんか——」

それを全て聞き終わる前に、ホセは声高らかに笑った。彼らしくもない大きな声で、この男をさも滑稽だと言わんばかりに。

頬を伝う雨の滴が、べつとりと付着した土を洗い流してゆく。
“傲慢”には、それがまるで黒い涙のように見えた。思わず“傲慢”は不快そうに眉間に皺を寄せる。

「だからあなたは傲慢だと言っているのです。ひとつだけいいことを教えてあげましょう。今のエクレシアには、私なんか足元にも及ばない、最高のプロフェットがいますよ。最強の鎧を持つあなたでさえ、太刀打ちできないでしょう」

「そりゃあ誰——」

「もう会ったのでしょうか？ どうでした、うちの秘蔵っ子は」

そこで男ははつと目を見開いた。そんな莫迦な、とても言いたげな表情。彼が思い当たる人物は、ひとりしかない。

先程力づくで蹴り飛ばしてきた、あの少年神父。

「まさか」

ホセは優しく笑い、そつと男の頬に右手を添えた。

「それをどうとるか、あなた次第です。可哀そうに……、また身体を替えなければいけないですね。今のうちに、その身体に別れを告げなくては」

父の御神に、み子に、きよき御霊に、
むかしながらの御栄えあれや、
ときわに、アーメン、アーメン。

彼の歌声は雨と共に、ゆっくりと降り注いだ。

第三章 3

ケファが校舎に辿り着いたときには、既に誰もいなかった。ビニール傘を差したまま、彼は短く息を吐き出す。

……確かに、“釈義”の残滓は残っているのに。

ケファは校舎の周りをうろつくと徘徊したのち、そつと街路樹の下へと足を運んだ。雨により消えそうになっている独特の気配がそこにはあった。随分荒削りな“釈義”だな、と彼は思う。ホセは既に“釈義”を喪失しているし、三善ならばもつと純度が高い気配を残すだろう。それに、この雨の中気配が残っているということは、まだ発動してからそれほど時間が経っていないはず。その“釈義”の発動者が、まだ近くに。

ふと、彼はその場に捨てられた黒焦げの塊に目が留まった。ポケットからハンカチを取り出し、直接触らぬようそれにかぶせると、ひよいとつまみあげる。

「これ……」

黒く変色しているが、この燃えかすには覚えがある。癖のある布の織目に、金糸が施された袖口。――間違いない、司教の聖職衣だ。「随分遠くのトイレに行ったんだな。あいつ」

思わずニヤリと笑ってしまう。

何はともあれ、ホセが彼女と接触したことには違いなさそうだ。ちゃんと引き止めてくれていれば、一安心。あれでも一応元・プロフェットだし、彼女を放置する危険性くらい頭の中に入っているだろう。

さて、とケファは腰に手を当て、そろそろやってくるであろう三善と合流するべく、庭園の方へ向かって歩き始めたのだった。

――その頃、土岐野は嗚咽を堪えながらのろのろと庭園まで戻っていた。

『あの人』はかなりの高確率で庭園にいる。ここなら確かに人目

につきにくいし、隠れる場所も充分過ぎるくらいにある。先程はいなかったが、もしかしたら戻っているかもしれない。

とにかく、『あの人』に会いたかった。

土岐野はゆっくりと庭園に足を踏み入れた。濡れた石畳の表面は、鏡のように滑らかだった。滑って転ばぬよう、ゆっくりと。

いつもこの辺りにいるはずなんだけど、と土岐野が顔を覗かせると、彼女の目に予想外のものが飛び込んできた。

「えっ……！」

うつ伏せの状態で倒れたまま、ぴくりとも動かない少年がいる。全身泥まみれで、すっかりびしょ濡れになった灰色の癖毛には土がこびりついていた。土岐野はその出で立ちを見て、すぐにそれが誰なのか察した。

昨日見た、少年神父だ。

気付いたら最後、身体が硬直した。死んだようにぐったりとしている彼を見て、土岐野の頭にはすぐ『あの人』の姿が過る。

—— やっつけてあげるよ。

まさか、本当に。

土岐野はふらりとした足取りで彼に近づき、白い頬にぺたりと己の手を添えた。随分冷たい。この雨のせいで、冷えたからだと無理やり言い聞かせた。

数回頬を叩くが、彼は一向に目を覚まさない。小さな唇に、ほんの少しだけ胃液の痕がこびりついてるのに気がついた。さっと、血の気が引いた。

どうしよう、とろろたえながら、土岐野は再び彼の頬を叩く。

「だ、大丈夫ですか！ 起きて、起きてよっ！」

しかし彼は相変わらず瞳を閉じたままだ。こういうとき、どうすればいいのだろう。土岐野はだいぶ前に授業で行った救命講習を思い出した。完全にうる覚えだ。実際にやったことなんか、ない。

「とりあえず、仰向け……？」

体勢を変えるのが先決か。土岐野は彼を仰向けにしてやろうと身

体を引っ張る。だが、意識のない人間がこんなにも重いものだとは知らなかった。なかなか身体がひっくりかえらず、途方に暮れてついつい座りこんでしまった。

その時だった。頭上から、慌てたような声が聞こえてきた。

「おいっ！ どうした！」

金髪の男性だった。見たことがない聖職^{カソック}衣を身に纏っているのが、彼もまた例の聖職者だろう。いつもの土岐野ならばすぐに逃げ出すところだが、このときばかりは誰かが来てくれたことに思わずホッとしてしまった。また涙腺が緩み、雨水と共に涙がこぼれ落ちた。

男性は、土岐野と倒れている少年を見比べ、すぐに事情を察したらしい。ひとまず彼の元に駆け寄ると、首筋にそっと指を当てた。もう片方の手は、口元へ。

「脈は、ある。息は……」

唇にこびりついた胃液の痕を見て、彼はぴくりと眉を動かした。頭から血を流していないことを確認し、三秒ほど彼は思案する。そして男性は少年の身体を起こすと、膝の上でうつ伏せにした。指で下顎を持ちあげ、肩甲骨の辺りを叩く。数回叩いたところで、げほっ、と少年は大きく噎せた。唇から嘔吐物がこぼれ落ちる。

「ああ、やつぱり」

呑気な口調で男性は呟き、彼の口の中に指を差しこんだ。口内の吐瀉物も全部吐き出させると、ようやく少年を仰向けに寝かせてやる。

その冷静な対応に、土岐野は目を丸く見開いたまま身体をこわばらせていた。どうしたらいいのか分からない、といった様子で、しかし逃げ出すこともできず、ただただ呆けている。

汚れた指を雨水で清め、金髪の男性は再び少年の呼吸を確認した。今はすっかり落ち着き、非常に安らかな息をしている。これなら安心だ、じきに目は覚める。

「ありがとう、嬢ちゃん」

そこで彼は口を開いた。「怖かったろう。日本の若い子は、救命

の演習はあまりやらないし」

思いの外優しい声色だった。土岐野はおろおろとしながらも、一番聞きたいと思っていたことを尋ねた。

「その子、大丈夫ですか……？」

「ん？ ああ、大丈夫。心臓止まった訳じゃないし、ただ食道が詰まっただけらしい」

それも今出してやったから、とあっけらかんとした口調のまま言うので、土岐野はなんだか拍子抜けしてしまった。

「それと、ああいうときは仰向けにする前に呼吸の確認をする。あのまま仰向けにしていたら、間違いなく窒息だった」

彼は付け加えると、さっさと立ち上がる。そして、未だ眠り続ける少年をその背中におぶった。

「申し訳ないけど、傘、持ってくれない？」

そして、顎で先程投げ飛ばしたビニール傘を指したのだった。「それ、借り物だからさ」

土岐野は言われるがままに傘を持ち、骨が折れていないかどうかを確認すると、そっと彼に向けて傘を差した。彼としてはただ持ってくればそれでよかったのだが。なかなか予想外の行動だ。

「ありがと」

男性は目を細めるようにして笑った。紫色の光彩が、土岐野を見つめる。彼女はしばらくその瞳を見て、唐突に視線を逸らした。急に訪れた罪悪感に耐えられなくなったのだ。

あのまま仰向けにしていたら、間違いなく窒息――

考えれば考えるほど、背筋が震える。今、己は人を殺しかけていたのだ。あの炎だけでなく、ちょっとした行動で。

「――私…… なにもできなかった、」

土岐野がぼつりと呟く。すると、

「別に、なにもってことはないんじゃない？」

彼はさっぱりとした口調で言い放つ。「君は自分ができることをしようとした。ただ方法を知らなかったただけ。それを『なにもな

い』とは言わない。強いて言うなら、無知」

誰でも非常事態はパニックになる、と彼は実に穏やかな表情を見せた。

「でも、なにかしようとしたから、こいつは救われた。それは君のおかげ。美德と言ってもいい」

そう言ったとき、遠くの方で爆音が轟いた。ずん、と地響きを足裏に感じ、身体が一瞬傾いた。見ると、遠くの方で何やら煙が上がっているではないか。あの方向は、と男性はぼつりと呟いた。

土岐野が見上げると、既に彼の表情から優しげな雰囲気がかつそりと抜け落ちていた。今精悍な顔に宿るのは、ぴりぴりと張り詰めている鋭利な緊張感のみ。アメジストの瞳がしばらく立ち昇る煙を睨めつけると、唐突に彼は土岐野を呼んだ。

「嬢ちゃん、俺はあっちに行くけど、どうする？　一緒に来る？」
え、と土岐野は口ごもった。

こういうとき、普通なら「危ないからここに残れ」が妥当だ。しかし、彼はその言葉を敢えて飲み込んだ。むしろ、見てもらいたいと言っているような。

それを感じた土岐野は、ゆっくりと首を縦に動かした。

十

そう遠くない過去においても、この歌は惨劇を引き起こした。涼やかなる音色が生み出すのは、全てを破壊する力だ。それをよく知っているからこそ、“傲慢（Superbia）”はホセの歌声に身をこわばらせたのだった。小さく舌打ちすると、彼はこの歌がどういった作用をもたらすのか、慎重に気配を探る。

しかし、それらしいものは一切感じられなかった。代わりにホセのものではない、何か別の“釈義”に気が付いた。その気配は徐々にこちらに近づいてくる。

「——どうやらお迎えが来たようだ。司教」
ファーザー

“釈義”が放つ、独特の聖気の匂い。それでおおよその人物は特定できる。これは間違いなく、プロフェットの中でも特別に任命を受けた者——“十二使徒”のものだ。

そうですか、とホセが囁くような細い声を投げかける。白い息が同時に唇から洩れ出した。

「随分遅かったですねえ、あの子は……」

穏やかな表情とは裏腹に、時折喘鳴を吐き出しながら呟いたその声には疲労感が垣間見える。

刹那、閃光を纏う鋭い光の矢が一面に降り注いだ！

「『深層（significance）・発動』！」

その矢は雷の如く、二人めがけて落ちてきた。無差別極まりない手法。容赦という概念そのものが欠如した力技だ。

“傲慢（Superbia）”もホセもこればかりはさすがにまらずいと判断した。“傲慢”は右へ、ホセは屋根の下へと転がり込む。一拍遅れて豪快に爆ぜる音がし、白い閃光が全ての視界を奪っていった。

ホセの体躯が重力に引き寄せられる。右のワイヤーフックを飛ばし、何とか地面と衝突するのを防ごうと考えたが——先程の光の矢を思い出し、諦めた。この雨の中、下手にワイヤーばかり使用すると、感電する可能性も充分考えられる。ならばこのまま黙って落ちた方が無難というものだ。

ふと、ホセは真下に何かがあるのに気がついた。否、『ある』ではない。『居る』のか。

そう気づいた時には、既に遅かった。何かにぶち当たった感触。内臓を打ったのか、冷や汗が出る。

ホセとしてはぎりぎり避けたつもりだが、どうだろう。ちゃんと避けたのか自信がない。

「っ……、す、すみませ……、」

さすがに痛かったのだしばらく悶えていたが、事態が事態だけに無理やり起き上がる。あれだけの高さから落下しておいてほぼ無傷

とは。つい自分でも「もしかして己は人外なんじゃあ……」と思っ
たが、それについてはまた後で考えることにした。

顔を上げると、独特のアイボリーの双眸がこの学校の十字をモチ
ーフにしたエンブレムを捉えた。

雨に濡れた紺色のブレザー、黒のまっすぐな髪。それはまさしく、
先程出会った少女……土岐野雨だった。まさか頭上から人が降つて
くるとは思っていなかったらしく、彼女は尻もちをついた状態で目
を剥いたまま暫し固まっていた。

怪我はないか、どうしてここに、ここは危ないから逃げたほうが
いい。色々言いたいことはあるのだが、とりあえずホセが言ったの
は、

「あの、大変申し上げにくいのですがスカート捲れていま——」

「ひっ！」

「この変態ッ！」

彼女の平手打ちと同時に別の人物から回し蹴りを食らい、彼の身
体は地面に再び突っ込んでしまった。摩擦する派手な音がその勢い
をよく表している。

慌てて飛び起きると、その背後に立っていたのは、超絶お怒りモ
ードにシフトされたケファである。背中泥まみれでぐったりとし
ている三善を背負い、ぜえぜえと息切れしながらホセを見下ろす。
土岐野はその横で顔を真っ赤にしながらスカートを押さえている。
完全に怯えた目をしていた。

さて、とケファは右足でわざとらしくホセを突いてやった。

「おい、その薄汚いカーランド君。実戦から離れたおっさんが
ここまでよくやってくれたとは思うけど、うちのヒメちゃんほっぱ
って何やっているのかな？ それと、セクハラ反対」

この時点で、彼の腹を突いていた足は本格的な蹴りへと動作変更
されてゆく。それこそ容赦のない扱いである。

「ケファ、ちょ、痛い。この愛は相当痛いんですけど」

「ええ？ 聞こえないなあ！」

「君はもう難聴気味なんじゃないかな？　そもそもねえ、君がこんな雨の中雷なんか出すからいけないんじゃないか！　おかげで僕はワイヤー使えなくて、こんなかつこ悪い着地しちゃったの！」

「雨の日に通電ワイヤーなんか持ち歩く方が悪い！　つーか助けてもらっておきながら礼の一言もねえのか？　ああ？」

「そんなこと言ったら君は迎えに来るのが遅いんだよ！　僕がワイヤー使う前に来てくれればよかったじゃないか！」

「お前のトイレに付き合ってたらかバーカ！　いい加減自立という言葉を覚えろ、じ・り・つ！」

「お狐様はいつものことながら言葉尻が汚いようで。礼は言うけど相変わらず配慮というものが欠如しているよね！　そんなに僕をいじめたいの？　それで満足？　随分器の小さい人間だなあ君は！」

「別に楽しかねえよッ！　隣人愛嘗めんな！」

「あ、あの」

「大人の会話に子供が口を出すんじゃない！」

土岐野の声に反応し、最後の一言だけが一字一句違わずに、そして同時に発せられる。妙なところで息の合うケファとホセだった。仲がいいのか悪いのかさっぱり分からない。

土岐野は「でも」と彼らの後ろを指差した。思わずギリリとした鋭い目つきのままふたりはその方向に首を動かした。

彼らの視線の先に、すとん、と降り立った“傲慢（Superbia）”がいた。先程の光線である程度体力を奪えたかと思っていたが、見る限り彼はぴんぴんしている。翻った黒い上着の裾は焦げてすらいらない。

彼が何かを囁いた。すると、彼が一心に纏う影がずるずると剥離してゆき、その右手に渦を巻くように集約されていくではないか。すらりと伸びる黒影は、鈍く光る刃に。柄は彼の身長ほどに長く伸びた。そうして出来た巨大な鎌は、雨に濡れつるつると磨かれた御影石のように冴えた光沢を放つ。

「……一時休戦」

「賛成」

二人は囁くような声で休戦協定を結んだ。

ケファは左耳のイヤ・カフをそつと取り、手の中に転がす。耳には、乳白色の石が付いた小さなピアスだけが残っていた。それはよくよく見なければ気が付かないくらいに小さい。

“傲慢（Superbia）”が鎌を振りかぶると同時に、ケファは愉しげに嗤った。

「――『発動』。やっと正体現したか、“傲慢（Superbia）”第一階層」

第三章 4

イヤー・カフの十字は巨大な剣となり、曲線を描く黒の鎌を阻止する。刹那の波動。妙な紅き火花が飛び散り、左腕に独特の衝撃が伝わる。プラズマのまぶしさが目を焼いた。ゆつくりと瞼を降ろしその目を細めると、同時にみしみしと骨の軋みが聞こえた。

ケファは力任せに鎌を薙ぎ払った。一段と派手な閃光が散る。

「傲慢（Superbia）の特性は“鎧（Armor）”——なるほど、この火花はその強靱さの象徴、つてか」

鼻で笑いながらケファは“傲慢（Superbia）”を睨めつける。精悍さを強調するその表情は、背後で立ちすくむ土岐野を震え上がらせ、ホセを満足げに笑わせた。

短く息をつき、片手でゆつくりと背負っていた三善を降ろす。それをホセが両手で受け止め、そと彼から引き離れた。彼の剣が放つ聖気に耐えきれず、建物が微かに軋んだ音を立てている。壊れることはないだろうが、さすがにそちらの防御までは手に負えない。

剣を両手で構え直すと、ケファは短く告げた。

「ヒメを頼む」

その一言に、ホセは穏やかに微笑む。

「頑張ってください。聖ペテロ」

「その名で呼ぶな、ゼベダイの子ヤコブ」

ケファはそれを言い切るのと同時に、その大剣を勢いよく振り回した。

空を切る鋭い音が耳を劈く。予備動作が余計にかかる大ぶりの動きにより、一瞬だがケファの前方に隙ができた。

「もらった！」

その隙を見逃す“傲慢（Superbia）”ではない。機敏な動作で彼は鎌を振りかざした。ケファは動揺した表情を浮かべ、短く舌打ちする。ひゅ、と軽やかな風音。黒き鎌があと少しで聖職者

の肩を切り裂く——その時だった。

ケファの空いている右手が鎌の刃を捉えた。“釈義”で作り上げた塩をわざとその刃にぶち当て、数秒の猶予を得ることに成功する。砕け散る塩の破片の中、“傲慢”にはケファがニヤリと嗤う様が見て取れた。

彼は遠心力により背後に回った大剣を、勢いよく真正面に引き戻す。無防備に開いた“傲慢”の腹部にそれがぶち当たり、視界が赤の閃光に染まった。

だが、独特のプラズマに包まれながらも、“傲慢”は笑みを絶やさない。楽しくてしょうがない、とでも言いたげな表情に対し、ケファは露骨に顔をしかめている。

「痛いなあ。今、君のせいで腕が一本ないんだよ。上半身まで持っていく気？」

「知るか、んなもん。どうせおまえらはすぐに復活するんだ。人間が“七つの大罪”を背負い続ける限り——」

ケファはぼつりと呟いた。「お前ら“大罪”は、消滅しない」

ランダムな動きを見せるその鎌は、予測がつかない。だからケファは、然るべきその瞬間まではかわす方向で考えた。もう先程のような騙しが通用するとは思えない。相手が莫迦ではないということ、彼はきちんと理解していた。

バックステップを何度か繰り返し、唐突に剣を地面に突き立てる。それを軸にケファが回し蹴りを決めるも、“傲慢”はひらりと軽やかに避け、ケファの肩に深く鎌を突き刺した。

じわり、と血が広がり、聖職衣の白い部分が赤黒く変色していく。痛み顔を引きつらせるが、ケファはこれ幸いと右手で肩に触れた。ぬらりとした血液をその手に滲ませると、塩で傷口を硬化した。己の血液は、対価の支払いに使う。

そつとそれを舐めとると、舌先に電流のような刺激を覚える。

「『装填（e i s e g e s i s）・開始』」

その様子に、“傲慢（S u p e r b i a）”は思わず苦笑した。

「君たちは大変だよね。そんな馬鹿げた対価を払わないと、何もできないんだもん」

「俺たちは人間だからな。神様じゃあ、ない」

す、とケファの左手が男に向けられる。「お前らも聖典のひとつやふたつ、勉強したらどうだ。例えば、こんな話はいかが？『深層（significance）・発動』」

左手から発せられた光の矢は卒然と“傲慢”を追撃し始める。何本かはかわされてしまったが、三本くらいは命中したと思われる。矢がぶち当たった際に発生した煙が立ち上ってゆく。焦げたようなざらざらした匂いが鼻をつく。“傲慢（Superbia）”の周りには、蜘蛛の巣のようにあちこちを走る赤いプラズマ。反撃しようと身体を動かした刹那、彼は悟った。

それは叶わない、と。

「……『主はモーセに仰せになつた』」

ケファが“傲慢（Superbia）”の耳元で囁いた。背後から立ち回り、その剣を“傲慢”の喉元に突きつけている。ちよつとでも動けば薄く皮が裂けるのではないかという、本当にギリギリの位置にその切っ先はある。

「『あなたがイスラエルの人々の人口を調査して、彼らを登録させるとき、登録に際して、各自は命の代償を主に支払わねばならない。登録することによって彼らに災いがふりかからぬためである』」

“傲慢”は横目でケファを睨み、しかし動きはぴたりと止まった状態でそこにいた。最早校庭に敷かれたコンクリートの殆どが原形を留めておらず、クレーターのようなくぼみがいくつもできていた。優しい声色で、ケファは己の信じる神の教えを紡ぎ出す。

「『登録が済んだ者はすべて、聖所^{せいじよ}のシエケルで銀半シエケルを主への権能物として支払う。一シエケルは二十ゲラに当たる。登録を済ませた二十歳以上の男子は、主への献納物としてこれを支払う。あなたたちの命を贖うために主への献納物として支払う銀は半シエケルである。豊かな者がそれ以上支払うことも、貧しい者がそれ以

下支払うことも禁じる。あなたがイスラエルの人々から集めた命の代償金は臨在の幕屋のために用いる。それは、イスラエルの人々が主の御前で覚え^{みまえ}られるために、あなたの命を贖うためである。』
それを耳にしたホセはぼつりと呟いた。

「……『出エジプト記』三十章十一節から十六節、“命の代償”、ですね」

「え？」

土岐野が聞き返す。その問いにやんわりと頷きながら、ホセは未だ目を覚まさない三善を背負った。三善自身が小柄であるので、こういうときは非常に助かる。本人は小さいことをとても気にしているようだが、いかんせん彼は外で倒れることが多い。ならば、不謹慎ではあるがもうこのまま成長が止まればいいのにも思う。

「この生徒なら、あなたも聖典の一つや二つ覚えていてでしょう？」

雨がやつと上がったようで、空を見上げるとうつすらと白んで見えた。もうじき晴れるだろう。よかった、とホセは胸をなで下ろした。

「あの箇所は、私達の『対価』という概念の原点なのです。それぞれに見合った対価を、神の御前で自分自身を覚えていてもらうために支払うのです。つまり、プロフェットは生きている間、その能力を持ち続ける限りずっと神に捧げものをしていくのです」

ホセは破顔して言った。相変わらず顔は泥で汚れていたが、土岐野も実は似たようなものなので、もう気にしてはいないようだった。その代わり、彼が言ったその言葉に含まれていた僅かな違和感に興味を示した。

ためらいがちに、彼女は尋ねる。

「……あなた、は」

「私ですか？ 私はもう、とつくにその全てを支払い終わっていますよ。五年前に勃発した我ら教会と“^{エクレシア}七つの大罪（Deadly sins）”による聖戦——俗に言う『十字軍遠征』の時に、ね」

今もそれを思い出すたびに、胸に刻まれた傷痕が疼き出す。

そう、あの日に——自分のプロフェットとしての能力は、完全に失われたのだ。

聖都で彼の者^かに対して断罪を遂行した、あの日に。

十

ホセに包帯を巻いて貰いながら、ケファは目を剥いていた。

「三善の存在が“七つの大罪（Deadly sins）”に知られた……？」

背後でホセは短く頷く。

あの後、例によって“傲慢（Superbia）”を取り逃がしたケファは、彼らとともに医務室にいた。保険医に相談したところ、三善は今のところ眠っているだけだと言う。このままでは分からないことも多いので、目が覚めてから再度診察ということと落ち着いた。ケファ自身も怪我はしていたが、「自分たちでやるから」と敢えて保険医には退室してもらうこととした。——そして現在に至る。

「傲慢（Superbia）」が言うからには、そうでしょうね。私はそれとなく、不自然にならない程度に隠していたつもりです。帯刀^{たいとう}家の力も借りて」

「なるほど……うっかりあいつと接触してしまったから、三善は排除されそうになったんだな」

ケファは短く頷き、目線をちらりとベッドへ移した。

三善は相変わらずよく眠っている。彼は、体力がない割に身体自体は頑丈なのだ。

それよりも、問題は彼の隣だ。彼が眠るベッドの隣に位置する合皮のソファに、学校指定のジャージを身に纏った土岐野が俯いて座っていた。濡れた制服は天井を走る銀のカーテン・レールにかけられている。

「寒くないですか？」

ホセが声をかけると、土岐野は短く頷いた。ぎゅっと己を抱くように両腕に触れ、今にも泣きそうな顔をしている。——この少女は、本当によく泣くなあ。大人二人は意外にもものんびりと構えていた。

突然、土岐野が口を開いた。

「あの、神父様……」

「ホセ、です」

彼女が顔を上げると、いつもの穏やかな調子でホセは言った。「ホセ・カーランド。位階は司教にあたります。こちらの怖い顔をしている方が、ケファ。位階は司祭で、“釈義”の能力者です」彼の横で借り物のシャツに袖を通してケファは、その大雑把な紹介に眉をひそめたが、あながち間違いではないのでそれについては何も言わなかった。

「そして、ベッドで眠っているのが姫良三善助祭。彼は非常に若いですが、優秀なプロフェットです」

できれば名前で、と控えめにホセは微笑むと、土岐野はおずおずと、声を小さくしながら言った。

「それじゃあ、ホセ神父。私……ごめんなさい」

きょとんと二人は目を丸くした。一体、何に対して謝ったのか。首を傾げると、

「私のせいで、みんな、こんなに怪我をして……」

土岐野の声が震えている。その他にもなにか言おうとしているけれど、うまく言葉にできなかった。その様子に、ホセはふっと眉を下げる。

「今までよく、頑張りましたね」

責めるでもなく、『あの人』と全く同じ言葉を。

土岐野の脳裏には、『あの人』——“傲慢”(Superbia)の姿が蘇った。どちらが正しいか、もう判断が出来なかった。つい先程まで『あの人』だけが正しいと、そう思っていたはずなのに、今ベッドで眠っている三善や、大怪我を負ったケファを見たら決心が揺らいでしまった。『あの人』は、容赦なく人を傷つけた。久し

ぶりに見た彼は、自分に向けた優しい笑みとは比べ物にならないくらい残酷な表情を浮かべ、あの鎌を振るっていたではないか。

本当に、それは己が望んだことなのか――

そう思ったら、また土岐野は泣けてきてしまった。ぼろぼろとこぼれ落ちる大粒の涙は、青いジャージの膝元を濡らしてゆく。

「遅くなってしまうてすみませんでした。もっと早くに迎えに行きたかった」

どうしてこのひとたちは、己を責めないのだろう。嗚咽を洩らしながら彼女が問うと、それについてはケファが答えた。

「頑張った子をわざわざ責める理由なんかないだろ」

その通り、とホセは一度頷き、手持ちの荷物から一通の封書を取り出た。そしてそれをきょんとしている土岐野に手渡した。

「あなたには、これを」

私の本題はこれなんです、と彼は実にのんびりとした口調で続けた。「私は、教皇庁特務機関より派遣されました、釈義調査委員なんです。人事の総括が本職なんです、奈何せん人手が足りなくて「釈義、調査委員……？」

聞き慣れない単語に、土岐野はただただぼかんとするばかりだ。誰でも、初めはそうだ。ずっと昔の話だからすっかり忘れているが、きっとホセもケファも同じように呆けた顔をしたはずだ。

「率直に申し上げます。土岐野さん、あなたのその発火作用は、間違いない“釈義”によるものです。昔からそうだったのですか？」

「い、いえ。今年の春から……です」

それならば合点が行く。幼い頃に発覚していれば、すぐに教会側に保護されるはずだからだ。ふむ、とホセは首を傾げ、次に家族に能力者がいるかどうかを尋ねた。しかし、土岐野は首を横に振るばかりだ。

「というか、本当の両親は知らないの……。私、幼い頃に両親を亡くしていて、今は弟と共に叔母夫婦の元でお世話になっているんです。だから、両親のことは分かりません。ごめんなさい」

彼女の家庭事情は予想外に複雑だったらしい。ホセは非礼を詫び、彼女に渡した封書を開くように指示した。そこには、見たこともない申請書が五枚綴りで入っている。書類の名前は、なんだか見たこともない言語で書かれているが……これは何語だ。土岐野はつい目を瞠っている。

「事情は分かりました。ここからは事務的なお話をさせて頂きます。“釈義”が発覚した以上、……あなたには本当に辛い選択だと思いますが、普通の生活に戻るのはおそらく無理だと思います」

土岐野が目を見開き、がばりとホセを見上げた。彼の表情は、先程までの穏やかなものなんかではなかった。感情という感情が削ぎ落された、ほとんど無表情といって差し支えない表情。それを目の当たりにし、彼女は「どういうこと？」と不安をより一層露にする。「“釈義”のコントロールができるよう訓練してもらわなければならないのです。あなたが聖職者にあるかどうか、という次元の話ではなく。今後普通に生活していくにしても、その能力を放置すれば、いずれ今回と同じように誰かを傷つけるだけの凶器になる。それを防ぐために、一度こちらで使い方を学んで頂く必要があります」

「それって……」

彼は短く頷いた。つまりは、隔離されるということ。日常から引き離されることを、彼は無言で伝えていた。

「——ここからは、私の独り言ですから適当に聞き流してください。私は、あなたについて上層部に報告する義務があります。でも、正直なところ迷っています。報告すべきかどうか」

その一言に、ケファがぎょっと目を剥いた。それはつまり、契約違反。しかも教会側において特に重要視されている“釈義”に関連する内容での隠匿はかなり重大な罪に当たる。それを、この男は容易く「悩んでいる」と表現したのだ。驚かないわけがない。

「あなたがこの一七年間、いろんな人に支えられ、大事にされてきたというのは見れば分かります。やりたいことも、好きだと思うことも沢山あるでしょう。私は、そんな未来ある子供に『Yes』と

しか言いようのない選択をつきつけたくはない。あなたはどうか自由に生きて欲しい。人の痛みが分かる子は、籠の中で飼われているべきじゃないんです。だから、あなたがそのように望むなら、私は喜んで事実を隠蔽しましょう」

少なくとも、と最後に付け加えた。「私のように、なつてほしくない」

その時、三善がもぞりと身じろぎした。ようやく目を覚ましたらしく、長い睫毛が微かに震える。一拍置いて、瞼がゆっくりと開いた。独特の赤い瞳はぼんやりと白い天井を彷徨っている。

「……起きたか、このおばかちゃん」

よっこいせ、とケファが立ち上がり、彼の枕元までやってきた。

「ケファ」

仰向けに横たわる三善を真上から見下ろすと、彼は今どうして横になっていいのか全く理解できていない様子だった。しばらくケファの顔を眺めていたら、ゆっくりとだが思い出してきたようだ。その証拠に、どうすればいいのか分からない、とでも言いたげな表情を浮かべている。自分のキャパを越えた出来事に、奇しくも出くわしてしまつたからだろう。

「どこか調子が悪いところはあるか？」

「まだ、お腹が痛い」

それよりも、三善はケファがどうしてそんなにあちこち傷だらけになっているのかが気になっているようだ。ケファの表情が何とも複雑だったので、彼が怒っているのか悲しんでいるのか、それとも笑っているのかはよく分からなかった。しかし、三善はそれでいいと思い直し、ふっと息を吐き出した。

首を傾けると、三善の大きな瞳に土岐野の姿が映り込んだ。ときさんの、と三善の唇が動く。

名を呼ばれたことにとっても驚いたようだ。そつと土岐野は三善の元に近づき、優しい声色で尋ねた。

「大丈夫……？」

うん、と三善は頷く。

「意外と平気」

「ごめんなさい、私のせいで……そんな姿に、」

「そんな姿って、どんな姿？ …… まあ確かに身体のアチコチが痛いけれど、そんなにひどいのかな、僕は」

ひどいよ、かなりひどいと彼女は付け加えた。彼女はきつと嘘は言わないだろうから、その通りなのだろう。頭も腹部も時折鈍痛が走る。困った事態ではあるけれど、ある意味いつも通りだ。そこまでする気にはしない。三善は何とか彼女を安心させようと、にこりと微笑んだ。

「これくらいは怪我ならいつものことだから。でもちよつと、身体を使いすぎた、かな。…… いずれにせよ、僕はあなたのせいだとは思っていないよ」

「でも、現にあなたは怪我をしたじゃない」

なかなか頑固だ。ふ、と三善は思わず息をついた。どう言ったら彼女は理解してくれるだろうか。うまく回らない思考を無理やり巡らせ、思いついたことを口にしてみる。

「土岐野さん。あなたは『ローマの信徒への手紙』、読んだこと、ある？ 新約の」

土岐野は静かに首を横に振った。

「じゃあ、一度開いてみるといい。罪の話が載っているから。土岐野さんが言う『私のせい』のは、多分ニュアンスとしては“咎”^{アウオーン}の方が近いのだと思うけれど。正しい者は誰もいないし、僕自身だつて決して正しくはない——だからいいんだよ。気にしないで」

まだ彼女は納得していない表情ではあったが、これ以上三善は何かを言おうという気にはならなかった。それよりも、もっと重大なことを言っておかなければならない。

三善がケファの名を呼んだ。

「…… “^{トレス}解析” した」

囁くようにそう言うと、ケファの紫の瞳に動揺の色が浮かんた。

まさか、あの“傲慢（Superbia）”の能力を、か？ 尋ねると、三善は首を縦に動かした。

「ごめんなさい。でも——」

「ばか。そんなことをしたら、お前が」

「いいんだ。これは僕の判断だから……、でもちよつと、頭の中がパンクしそう。吐き出していい？」

「待て」

おい、とケファがホセを呼んだ。「ちよつとその頭貸せ」

「天才の頭脳を持つてしても無理ですか？　そもそも、人の記憶力をまるで物みたいに言わないでくださいな。……まあ、いいでしょう。後半だけ請け負います」

そんな三人の会話を聞き、土岐野はきよとした表情でホセを見上げる。

「とれーす？」

「ああ、ブラザー・ミヨシの能力です。彼はプロフェットですので、勿論釈義使いではありません。しかし、その他にも特異能力がいくつありますか。 “解析”^{トリークス}とは、その中のひとつ、能力部位で触れたものの本質を分析し、能力者であった場合はその能力をコピーできる能力です。解析した情報は彼自身を取り決めた暗号コードに置き換えられるので、外部にそれを伝えておけば、逆解析していつでも使えるという仕組みです。コードそのものに期限はありませんから、そのようにホセは説明し、にこりと笑った。

「しかし、困りましたね。これは教会の^{うち}ごくごく限られた人物しか知り得ないことなんですよ。外に洩れたら困るんです。土岐野さん、だからこれは」

そして、唇の前に指を一本立てた。「秘密、ですよ」

間章

「……なんだって？ “^{トレス}解析” できるプロフェットがいる？」

少年が、実に意外そうな声色で尋ねた。

肯定のために首を縦に動かした赤髪の男——“傲慢（Superbia）” は、顔をしかめながら腕を組んだ。腕はここに帰ってきてから、それらしい形のものを適当に、そして文字通り『くつつけた』ものだ。やはり両方の腕があつてこそ物事のバランスが取れるというもので、先程は正直——歩が悪かったから逃げた。片腕がなただけであんなにもアンバランスになるとは思つてもみなかつたのだ。まあ、今更なにを言つても言い訳にしかないが。

「さつき『契約先』に行つたら、そんな奴がいてさ。どうやらカーランドの飼い犬らしいが、あんなの見たことねえや。それに例の『聖戦』で強制不参加にさせられたプロフェットついていただろ。あれに初めて会つた」

「カーランドって、あの一人ぼっちの？」

少年が問いかけると、“傲慢（Superbia）” は無言で頷く。

それを横目で確認すると、少年はふうん、とさも興味がなさそうに飴玉を口に放り込んだ。

「そう、あの忌々しいカーランドはまだエクレシアにいるんだね。いずれ再び対峙することになるとは思つていたけれど——。どう？」

『あの頃』から、なにか進歩があつた？」

少年が尋ねると、男は曖昧に笑つた。

実のところ、男は真実を告げるかどうかまだ迷つていたのである。あの『十字軍最大戦力』と謳われた（事実、あれより残酷な釈義を彼らは見たことがない）ホセ・カーランドが、その機構の破損により釈義を展開できなくなる“^{ルウイン}喪失者” に成り下がったこと。そしてその代わりに現れた、灰色の髪をした謎の少年プロフェット。カ

「クランドが言う「自分を上回る最高のプロフェット」とは、おそらくあれだとは思うが——彼の情報は皆無。突如として現れたダークホースの実力は、途中で蹴り飛ばしてしまったがために測定不能だった。まあ、あの飼い犬（奇しくも、“傲慢”の中では犬と断定されてしまった）はおそらくたいしたことはないだろうが、注意するに越したことはないか。

それよりも即戦力として注意するならば、かの少年よりも、あの金髪のプロフェット——確か、名をケファ・ストルメントといっただろうか——だろう。さすが“聖ペテロの申し子”と謳われるだけある。釈義ひとつひとつに込められる聖気の度合いがいちいち強すぎるのだ。『聖戦』では先述の通り強制不参加とされたらしいが、彼が召集されていなくて本当によかったと心底思う。単純に威力だけ見ればかつてのクランドと同等、否、上回る可能性もある。自分の“鎧”である程度防いだにしろ、長期戦になった場合どうなるかはよく分らない。

エクレシア側の大司教・『教皇』亡き今、“七つの大罪（Deadly sins）”を完全に浄化する唯一の方法“秘蹟”^{サクラメント}を用いる者はいない。それが我々にとって幸か不幸か、判断する手札がないのも事実。

“傲慢（Superbia）”は呑気に飴をねぶる少年を見た。

「おい“嫉妬（Invidia）”。余裕だな」

「だって君が倒してくれるのでしょうか？ 僕の出る幕はないじゃないか」

「そりゃあ、そうだが……」

それにしても、と少年——“嫉妬（Invidia）”は視線を虚空に泳がせた。外はすっかり暗くなり、ミルク色の月光がぼっかりと浮かんでいる。先程までの気持ちがいいほどの豪雨は嘘のように晴れてしまった。“嫉妬（Invidia）”は雨が好きだった。だから少し、ほんの少しだけ残念そうに眉を下げ、短くため息をついた。

「それにしても“^{トレス}解析”が出来るなんて。その能力は、僕たち、“七つの大罪（Deadly sins）”だけが使える能力だろうか？ ただのプロフェットができるものではない」

「だから気味が悪いんだよ。あのわんこ……」

“傲慢（Superbia）”は歯を食いしばり、納得がいけない様子で短い髪をぐしゃぐしゃに乱した。

その脳裏に浮かぶは、赤の瞳が滲んだ朱に変わる刹那。あの瞳の色はよく知っている。

“第一階層”がその能力を行使する際、その外見に特に変化はみられない。しかただひとりだけ、能力を行使している間、瞳の色が変わる者がいた。ずっと昔、それこそ『聖戦』よりも前、“傲慢（Superbia）”が前の身体に魂を宿していた頃。彼女は“七つの大罪（Deadly sins）”を率いる『白髪の聖女』として彼らと共に在った。

その強さを孕んだひたむきな赤の瞳は、とてもよく覚えている。

「なあ、もしもの話だけど」

“嫉妬（Invidia）”が“傲慢（Superbia）”の姿を仰いだ。彼の言葉の続きを聞きたがっているのだ。しばらく彼はそのまま黙っていたが、ようやくひとつの考えに帰結した。その声色は地を這うような重低音。

そう考えれば納得がいくのだ。真実かどうかを確かめる術はないけれど。

「——もしも、あいつが、『マヤ』の血を引いているのだとしたら……」

第四章 1

「ええと……、『復活という出来事が私たちの周りに起きたら信じよう』、という言い分の問題点は何かと言つと……」

教壇の上で黒板にチョークを走らせる三善の姿を見つめながら、土岐野はぼうつと二日前の出来事を回想していた。

あの雨の日。目の前で“傲慢（Superbia）”と対峙したこの聖職者たちは、自分にひとつだけ課題を出した。

——おそらく、あなたは“傲慢”と何らかの契約を結んだのでしよう？ それが何とは聞きません。ですが、それがある限り教団は公に手を貸すことができないのです。だから、できるだけ早いうちに、どちらを選ぶか決めていただきたい。“大聖教”か、“七つの大罪”か。

ホセは厳しい面持ちでそのように言い切った。

——もちろん、あなたが“傲慢”を選んだとしても、私たちは一切文句を言いません。ただ、強制的に奪取する可能性は無きにしも非ず、ですが。

どちらを選べばいいのだろう。

土岐野は愛用するルーズリーフに、薄い筆圧で「七つの大罪」と書き記した。そういえば、“傲慢（Superbia）”の正式な名称を、彼女は一連の出来事で初めて知った。初めて会った時、あの男は爽やかな笑みを浮かべながら「ダグラス・ネブラスカ」と名乗ったのだ。だから“七つの大罪”にも人間のように名前があるのだと思っていたが、どうやらそういう訳ではなかったらしい。

隣に、もうひとつ「エクレシア」と書いてみた。これが、今講義をしている「大聖教」の総本山。自分が持つ特異体質も、彼ら曰くこちら側にあるべき能力なのだという。本来的には、大聖教についていくことが自然なのだろう。だが、今の土岐野には「どちらが正しいか」なんてことは正直なところよく分からなかった。

大聖教と“七つの大罪”——同じ概念から派生した二つの考え。

信じるものはほとんど同じなのに、手段が違っただけでこんなに思いがみ合う必要があるのか、と彼女は思ったのだ。まるでボタンをかけ違えてしまったかのようなちぐはぐさを、彼女は肌で感じていた。どちらも、私に優しくしてくれたじゃない。どちらも、炎を放つことしかできなかった私を否定しなかった。認めてくれた。

そう思ったとき、握っていたシャーペンシルの芯が折れた。その音で彼女ははっと我に返った。折れた芯が、ルーズリーフの上をゆつくりと転がっている。たまたま書いた「七つの大罪」と「エクレシア」の間を行ったり来たりしているその芯は、なんだか今の自分みたいに宙ぶらりんに見えた。

一方、教壇に立っている三善は、案の定冷や汗の大盤振る舞いだった。

柔らかな日の光が窓から燦々と降り注ぎ、穏やかな時間がゆるゆると流れている。昼食後の授業というのは、どうしてこつちも気持ちがいいのだろう。主に、眠気という意味で。

三善は静かに教室を一瞥し、やっぱり眠たいよね、と肩を落としたり。

前列に座る比較的やる気のありそうな生徒は、それはもう目をキラキラさせてこちらを見ている訳だが、……生徒の大半は身体がこくりと前後に揺れている。気持ちはよく分かる。午後一番の講義なんて、眠い以外の何者でもない。それが分かっているからこそ、なんと云うか……否定できない。

ちらり、と教室の後ろ端で腕組みしているケファに視線を向けた。神学の授業をやれ、と命じたのは彼だから、そろそろレッドカードを出してくれるのではないかと期待したのだ。この続きは俺がやる。そう言ってくれることを信じて。

だがその視線に気づいたケファは無言で、ただ顎を使い合図を出すだけだった。要するに、ゴーサイン。

だってほとんど誰も聞いていないじゃない、と半分泣きそうにな

りながら三善が首を横に振ると、凄味のある睨みが飛んできた。……ケファのスパルタモードが発動した瞬間である。

ええと、と口ごもりながら三善はテキストに目を落とした。洗礼を受ける前に習ったような初歩中の初歩しか書いていないけれど、これを一般の子供が理解できるとは到底思えない、が三善の正直な感想である。どう噛み砕こう。うーん、と三善は思わず唸ってしまった。

「『復活』という出来事は歴史的に一度しか起こらない出来事であるので、科学的証明が困難だということ——これが問題点にあたります。私たちの世界は、科学的方法で立証される事柄ばかりで成立している訳ではありません。法律的方法によって吟味されなければ、正当な方法を用いているとは言えないのです。つまり、」

身体の芯が冷える思いをしながら三善は言葉を紡ぎ出す。「目撃者の証言や本人の証言が収載されている聖書の記事を有力な証拠として検証が必要になります。だから、復活の証言には、聴く者の主體的な判断、即ち、信じるか否かの判断が求められます。話す側ではなく、聴く者に判断の最終権限が託されているのです」

やつとのことでのその項目を言い切ると、丁度よく、まるで示し合わせたかのように授業終了のチャイムが鳴る。教室中が喧騒に包まれた。

三善はふー、と長い息を吐き出して、教壇に突っ伏した。この長い長い一時間で、自分の魂が半分くらい削られるような思いをした。今度からは、きちんと授業を聞こう。そう念じながら、己のやわらかい灰色の髪をぐしゃりと押える。

「お疲れさん、ヒメ」

ふと頭上から声が聞こえた。三善はそのままの体勢で「むう」と奇声を上げる。

突っ伏しているがために表情は分からないが、どうやらケファは苦笑しているらしかった。気配でなんとなく分かる。

「こんな時間に神学なんか入れたら、普通は眠くなるつつの。ま

あ、ヒメちゃんの講義自体が理屈っぽくて、それに拍車をかけたつてのもあるけどさ。こういうのはもつと楽にやっていいんだ。特に、今日は普通科の授業だし」

どういうこと？ と三善はのろのろと顔を上げた。

「全力で神学を刷り込まなくてもいいって話。国語や数学と違って、神学は『生きるための考え方のひとつ』を提示しているにすぎないの。そもそも、宗教ってそういうものだろ」

「……ああ、そっか。直接人の生死に関係することだから、基本的に『何を信じるか』っていう部分は本人に任せていいのか」

そう、とケファは頷く。

「そして、直接生死に関わることだからこそ、俺たちは真面目に教えを説かなくてはいけない。真摯に向き合わなければ、俺たちを生み出した神様とやらの示しがつかん」

まあ、それをきっかけに信者が増えれば万々歳だけど、とケファは茶化しながら笑った。

これくらいあっけらかんとしていれば楽だが、そうもいかないのがエクレシアの内情である。そもそもエクレシアは大聖教内で分裂した宗派を無理やり束ねたよろず宗教法人である。ケファが「本人に任せる」発言をしてもあまり怒られないのは、彼が大聖教にとつて有益となるような研究成果を十数単位で発表してきたからであつて、普通は例外なく叩かれるに決まっている。

そのあたりの兼ね合いが奇妙に絶妙だということを三善は知っているため、敢えてその辺りは深く追求しないことにした。

「じゃーねー、ヒメ先生」

「またねー」

声をかけながら講義室を出ていく生徒たちに三善はにこにここと笑いながら軽く手を振ってやる。それを見て、ケファは思わずきょとんとしていた。

「なに、お友達になったの？」

「うっん。さっき廊下を歩いていたら、突然飴を握らされた」

三善ののほほんオーラに絆されたのか、はたまた単位のために（聖フランチェスコ学院は単位制だ）買収されたのか。真意は明らかでないが、特に悪いことではなからう。まあいいか、とケファもそのあたりには納得してくれた。贈り物はあまり受らないほうがいいと軽く釘をさした程度で、それ以外には細かく口出ししなかった。

「そうだ。三善、これ」

「ん？」

急に名前を呼ばれ、テキストをまとめていた三善はついつい瞠目してしまった。彼に渡されたのは、結構な厚みのある紙束である。

本文は英数字の羅列のみで構成されており、ぱっと見ただけではそれが何を意味するのか見当がつかない。だが三善はそれをちらりと見ただけで、「ああ」とすぐに納得したようだった。

「書いてくれたの？　ありがとう」

それは、一昨日三善がああ男から“^{トレース}解析”した暗号文であった。

とりあえずケファに全部を話し無理やり記憶させた、というのは覚えていたが、その後それをどうしたかは全く覚えていなかった。ものにもよるが、三善は記憶を断片的にしか留めておくことができない。記憶分野のキャパが極端に狭いのだ。だからこそ、外部に記録できるものはきちんと書き留めておく必要があるのだが。

三善はその紙束を上から数枚ぺらぺらとめくり内容を確認し、脳内できちんと再生できるかシミュレーションしてみた。頭にいくつか数式が浮かび上がり、そしてそれが正しいことを瞬時に検算しながら。三〇秒ほどゆっくり時間をかけて「正しい」ことを確認すると、三善はそつと紙束を閉じた。

「うん、合ってる」

「ところで、それって本当に“傲慢（Superbia）”の“鎧”なのか？」

三善が肯定したのを受けて、「それじゃあ尚更」とケファは三善の頭に手を乗せる。

+

また、ひどくなった。

ホセは鏡に映った自分の姿を睨めつけながら、短くため息をついた。

聖職衣の上着は肩に掛けたまま、その下に着ている白いシャツのボタンをへそあたりまで大きく開けている。年齢の割に引きしまった筋肉の上、ちょうど胸の中心に赤い十字の傷痕が見える。

一日「傲慢（Superbia）」と対峙して以来、どうも身体調子が悪い。棘で貫いたようなどくと脈打つ甘い痛みが、身体を支配している。この痣を中心に。

「やはり、“傲慢（Superbia）”に接触したからでしょうか……」

あの日、かつての“釈義”能力部位の一つである「右手」で彼女に触れ、そして元々の“釈義”能力部位の「喉」で対価「讃美歌」を歌った。自分がもう『釈義』を展開できない身体だと言っても、『対価』に全く反応しない訳じゃない。特に後者は、前者とは全く異なる方法で発動していた訳で――

いずれにせよ、釈義を消費し続けるのはそもそも無理があるのだ。その件については、この胸元の痣が物語っている。

だから、不安なのだ。三善には昨日検査を受けさせ、身体に異常はないと言われたけれども。あの時三善が発した一言が脳裏に浮かぶ。

――“^{トレース}解析”した……。

あれ自体は釈義ではないものの、使いすぎると後々身体にリバウンドとして跳ね返ってくる可能性がある。この十字の痣――“聖痕”という形で。ただでさえ三善の保有する釈義の全てが後天性なのだ。通常のプロフェットよりもはるかに危険が多い。

「^{かみさま}太陽に近づきすぎた者は、蛾の羽根をもがれ地に落とされる、……か」

その時、静かに部屋の扉が開いた。

「ああ……、ケファでしたか。ヒメ君は？」

大あくびをしながらケファは扉を閉め、実にのんびりとした足取りで歩いてくる。

「図書館に行ったよ。必要なものができたんだと。……とりあえず、今のところは安定しているみたいだ。体調的にも、釈義的にも」

「そうですか」

それでも安心はできませんね、とホセは言い、自分の荷物から小さな瓶を取り出した。その中身は一般に“聖水”と呼ばれるもので、本来的には土地を清め結界を張るための祭器なのだが、今では医療用に使われることのほうが圧倒的に多い。ちなみに、一昨日土岐野の放った“聖火”を沈めたのもこれである。

彼はそれをさらしにしみこませ、聖痕に当てる。じゅ、と人間から発せられたとは思えない、まるで焼けた石に水を注いだような音がした。しばらくしてようやく痛みが引いてきたのか、長く息を吐き出し、ホセはそのアイボリーの瞳を閉じた。

「この仕事が終わったら、一度フランスに『コレ』を取りに行かなくてはなりませんね。あなたも来ますか？ ブラザー・ジョーのところですが」

そう言つて聖水の入った小瓶を振つて見せる。

「別にいいよ。どうせあの親父はピンピンしているだろ。連絡はたまに取っているし、今更だ。ああ、でも、孤児院の方には顔出ししたいかな」

そこまで言つて、ケファはふと思い出したように、「やっぱやめ。ヒメがいる」ときっぱり断った。

そう言うと思った。ホセは笑いながらシャツのボタンを留め、上着に袖を通す。首には洗礼を受けた証である銀十字を、左腕には口ザリオを。それらは窓から差し込む太陽の光を反射し、きらりと瞬く。

「いいじゃないですか、ヒメ君と一緒にでも。彼にも外の世界を教え

るべきです——最終的には、『聖都』に行く子ですからね」

「だから嫌なんだよ」

ケファは眉間に皺を寄せ、吐き捨てるように言った。「まだあいつには早すぎる。少なくとも、あいつが猊下の力なしに生き長らえる方法を手にするまでは外に出せない」

甘いだろうか、と彼が呟いたので、ホセは優しく首を横に振ったのだった。

「——だから、我々は急がねばなりませんね。あの子のために」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6238q/>

バベル1 傲慢の紅き鎧

2011年7月23日03時29分発行